
とある市民の自己防衛

桜くん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある市民の自「防衛

【Zコード】

Z0113U

【作者名】

桜くん

【あらすじ】

電車の中で睡つたら、気がつけば意味の分らない状態になつてい
た。

こうして、新たな人生のスタート！・・・のハズが・・・
憑依じゃねえか！しかも一般人！！！
よし！こうなつたら・・・原作キャラとは関わらない様にしよう。
一応、自己防衛出来る力もあるしな！！

作者の書いた駄文の上、無茶苦茶ですが、お時間のある方はどうぞ。

プロローグ（前書き）

お見苦しい内容ですが・・・はじめます。

プロローグ

『次は、 駅。 駅。』

いつもの電車でいつものアナウンスを聞きながら、ガタゴト揺れる電車に俺は揺られていた。

外の風景もいつものまんま。乗客の顔も変化に乏しく余り変わらない。

そんな日常風景が今日もある。

いや、きっと明日も明後日も。

「ああ。寝み。」

テスト勉強のせいで大して寝てない。

「まあ、後少しだからな・・・。」

ああ、眠い・・・・。

目を覚ますと、暗い場所にいた。何処だ此処？

「トンネルにでも入ったのか？いや、それにしては。

暗すぎる。まさか・・・。

「申し訳有りません！」

突然背後からそんな声が聞こえた。振り返ると、実に苦労しているオジサンがいた。

テンプレと言う奴か。

「俺は、死んだんですか？」

「ええ。ワタクシこのような者です。」

オジサンは、名刺をそっと差出してきた。

(あの世課・ヤマダハヤト)

ふむ、実に分かりやすい。

「死んだといっても、肉体はまだ生きていますがね。」

「どういう事だろうか？」

「簡単です。精神が既に死亡しているのです。そして、ここに来た。」

ワタクシは、なんとか戻そうとしたのですが・・・。ダメだったと・・・。

「で、俺はこれからどうなるんですか?まさか、このままここに?」
「いいえ、取り合はずアナタには、別の世界に行つてもらいます。」
なんで?

「この世界は、いわゆる神とそれに準ずる者しか存在が出来ないからです。」

「そんな・・・もう親にも会えないんですか?」

まだ、肉体が生きているのなら、可能性はある。そう思つていたが。
「・・・たとえ目覚めたとしても、その時のアナタは既に別人です。家族のことも友達のことも解からない。既に”アナタ”と言つ存在は死亡していますから。」

「・・・。」

俺は、無言でうなづいた。

「それでは、転生して頂きます。これから行つてもうつ世界は、いわゆるアニメの世界です。」

「アニメ?」

テンプレだ。

「知りませんか?最近よく。」

「わああああ!」

メタ発言は禁止ダ。

「安心してください。アナタがある程度知つてゐる世界ですから。」

「わかりました。・・・でもひとつお願いがあります。」

「なんでしょうか?」

「もし、俺の体が目覚めたら、少しだけ昔を思い出せる様にしてください。」

「・・・善処します。」

ヤマダさんは、そう言つと白い紙を差し出してきた。見るとヤマダには5つの欄があつた。

「その中に自分の力を書いて下さい。なんでも良いですよ。」

「また、テンプレートな事が・・・」

「いいえ、結構真面目なんです。今から行く世界には、別の神が転生させた方々が数人いらっしゃいます。いつ彼等の戦いに巻き込まれるか分かりませんから。」

「どうやら、結構テンジャラスな所らしい。」

「はあーわかりました。俺は、戦いなんてしたくないし、平和に一生を終えたい。」

だから、目立つ力や強い力はパスつと。

「こんなもんですかね。」

「えっと・・・”超電磁砲”と”一方通行の反射”と”幻想殺し”。確かに目立ちにくいでですが、もう少し強い方が。」

これでも自分の身ぐらいい守れると思うのだが・・・

「じゃあ、”球磨川君の力”と”不慮の事故”で。」

「あくまで自分優先で防御思考ですか。わかりました。では、”反射”と”不慮の事故”には、オン・オフ機能を付けときますね。」「あー待って下さい!どれか消して、コルルのライフジオの方が・・・」

。。」

「最悪、海にでも逃げるつもりですか!?それなら最初はから”知られざる英雄”的な方が良いのでは?」

それは・・・ちょっと・・・誰にも気付かれない人生は嫌だし・・・。

「分かりました。それも追加しておきましょ。元はワタクシの力不足なんですし。」

ヤマダさんはそう言いつと紙を受け取った。

「では、楽しい来世を。時々ですが、アナタの家族の写真でも送りますよ。」

「はい。」

すると、俺の意識は暗く濃い霧の中に沈んで行つた。

プロローグ（後書き）

どうでじょつか？

第1話 予想外の転生（前書き）

始まります。

第1話 予想外の転生

目覚めると、目の前には、裸になつた木々があつた。『ひつやからだ』の中のようだ。

イヤイヤ、待つてよ！ なんで転生なのにこんなところにいるんだ？ 俺はそう思い立ち上がるつとするが。

「あり？」

いくら足を動かしてもスカスカと空をきつてしまつ……空？ 俺は、恐る恐る下を見た。足が浮いていた。そして……首にはロープ。

「まさか……首吊り？」

イヤイヤ、なんで行き成り人生が終焉してるんだよ？ 一応さつき転生するつてヤマダさんも……というか、なんで俺は平気なんだよ？ すると答えが近くに転がっていた。近くで鳥がもがき苦しんでいる。ああ。“不慮の事故”か。俺は取り合はず電気をロープに流し焼き切つた。

「やばかった。もし“不慮の事故”を覚えて無かつたら死んでたぞ。

「

第1話から行き成り死亡つて……ある意味斬新だが。

「はあ、まあいいか。……ん？」

すると、頭の中にヤマダさんの姿が浮かんできた。

『すいません。どうやら少々失敗したようです。』

「どうこう事ですか？」

『やはり、精神だけじゃ不安定みたいで。そのせいで精神が死んでいた、その子に宿ったみたいです。』

「じゃあ、この体の元の持ち主はどうなったんですか？」

『……恐らく既に死亡しています。今頃地獄か、天国か。……』

その時俺は、ヤマダさんの言葉を思い出した。

『田覚めたときは別人。』

リアルに実感した。確かにそうだ。

「俺……どうすれば……。」

『その方の体でなんとかしていただくしか……。』

「そんな……力は使えるけど……。」

先ほどから、元の持ち主の記憶が入ってくるのだが、口クなもんじやねえぞ！イジメられて、死にたくなるのも分かる様な目に合つて。そして……。

『申し訳有りません。どうか……。』

ヤマダさんの言葉には本気の申し訳なさが滲んでいた。

「あ・・・わかりました。力の代償として受けますよ。」

・・・俺も甘いよな。

一応の記憶を頼りにこの身体の持ち主の家に行くと、さうして小さなアパートだった。

「ただいま。」

そつと中に入るが誰もいない。留守なのだろうか？
俺は、田をつむり思い出す。・・・そつか。

「これで、5回田の転校先だつたのか。」

どんだけ暗い人生を送つて来んだよ。この人。
俺は、頭を抱えて親の帰りを待つた。すると

「電話か。」

突然電話が鳴り始めた。受話器を取ると、この身体のお母さんから
だつた。

『もしもし・・・一夜？母さんだけど。』

「うん。」

『いめんな。やっぱり一緒に行けないみたいなの。お父さんも。』

「へ？」

『どういう事だらうか？』

『毎日、家政婦さんに来てもらひつから安心して。』

一体何に安心すればいいんですか？訳が解からない。

『じゃあ、元氣でね。』

そう言つと母さんからの電話は一方的に切られた。

「…………。」

これって、見捨てられたって事？

「なんだ！この新生活は！」

俺は悲鳴を上げた。

こうして俺の新しい人生がスタートしたのだった。

第1話 予想外の転生（後書き）

作者：ついに・・・投下してしまった・・・。

?
：まあ・・・頑張れ。

作者：更新は、遅いですが、頑張ります。

第2話 リリカル・マジカル関わりません。（前書き）

短いです。

第2話 リリカル・マジカル関わりません。

突然の一人暮らしと言つ小学生低学年がやつては行けない様な状況に混乱したが、しばらくして落ち着いた。

「まあ、ある意味ラッキーと考えるしか無いか。」

この身体の元の主である、南一夜と言つ精神は既にこの世界にはいないのだ。

親と暮らしていたら、妖しがられるだろうから。それこそ居心地が悪い。

「取り敢えず、ここが何の世界だか調べるか。」

ヤマダさんは、俺が知つてゐるアニメの世界だと言つた。しかも他の転生者達の戦いとまで言つていた。

少なくとも平和な世界とは思えない。となると、候補としては・・・

- 1・”超能力と魔法がある世界”
- 2・”近未来の能力者バトルの世界”
- 3・”小学生の先生がいる世界”
- 4・”ファンタジーな魔法の世界”

・・・って所か。

「取り敢えず2と4は違つた。」

新聞を見るどちらかと俺の知つてゐる年より低いが少なくとも近未来では無い。

そして、Jijiは日本だ。帰り道に空飛ぶ人には合っていない。

「となると、可能性は1・3か。どちらも嫌だな。」

その時ふっと、新聞の文字が気になった。

「海鳴？」

そう書かれてあつた。海鳴・・・魔法・・・いや待て！

「”リリカルなのは”だと！待て待て！確かにあらすじは知ってるけど細かくはしらんぞ！」

えっと・・・確か小学生の女の子が、魔法少女になつて・・・ええつと・・・なんか黒い女の子と戦つて・・・。ダメだ・・・主人公の顔すら怪しい。まあ、そんな世界だ。

「ヤバイ・・・原作知識が無いと余計な事に巻き込まれるかも・・・。

そう思つたが・・・すぐに諦めた。なぜならば

「その”なのは”及びその周りに近づかなければ良いじゃんーよしこれで行こう！」

こうしてしばしの方針も決まり俺は眠ることにした。

#とーりやんせ。とうりやんせー。#

眠りにつくとこれまでの人生がフィードバックしてきた。
もちろんこの身体の人生だ。

けして、格好良くもなくスペックも低いが、俺は生きよつと誓った。

第3話 なんとか回避だよー夜ぐん（前書き）

続けて投下します。

第3話 なんとか回避だよ一 夜くん

さて、あれからしばらくたつた。恐れていた通り俺の通う学校。“聖杯小学校”には、“なのは”と言う女の子がいた。しかも、転校した先が彼女のクラス。テンプレだ。しかし、俺は持ち前のステルスキルで転校生と言う存在感を打ち消した。その結果、余り気にされない存在になることが出来たのだった。イエー。

「ふ・・・しかもそれらしい事件は6月と12月に合ったからな。恐らく原作も回避成功だぜ。」

今は、年の瀬であり、次から4年生だ。

「ウンウン。順調順調。しかも転生者らしい奴らも見つけたし、これで俺の人生は大丈夫だぜ！」

転生者らしいのは、全員で3人いた。

1人は、赤神寿也。なのはの幼なじみであり彼氏らしい。
2人は、八神翼。転校生であるフェイトと仲がいい。他称・彼氏
3人は、遠藤晴樹。八神妹の彼氏らしい。

と、こんな感じである。そんなことから、“なのは”の他に“フェイト”と“はやて”と言つ子にも注意して行きたい。

「さてと、親にでも手紙を出しますかね。」

あの電話以来マジで、親は来なかつた。来るのは家政婦さんばかり

で、実際に顔を見たことがない。

しかし、それでもこの身体の親なのだ。手紙ぐらいは書いている。

「ヤベ……失敗か。」

インクが滲んでしまい字が消えてしまった。俺は時計を見るともうすぐ8時を刺す所だった。
どうしようか? つむー・・・。

「コンビニで買つか。ちょうど腹も空いたしな。」

俺は、財布を持って、家を出た。コンビニまでは歩いて10分もかかる。そんな軽い気持ちだった。

『ありがとうございました。』

と言つ店員さんの言葉を聞き流し、買った肉まんをほうばりながら家路を急いでいると

「黙つてないで、なんか言つたらどうだー!」のガキ。」

「全く・・・自分から絡んで来た癖にどうしてそう都合よく強気に出れるのか。理解に苦します。」

「んだとー。」

女の子が酔っ払いに絡まれている現場を発見した。それにしても凄いな。顔は、暗くて見えないけど大人相手にそこまで言つか。
もしかしたら、転生者?

「失礼。私には、やることがあるので。」

「待てやー。」

酔っ払いは、女の子の肩にてをかけると力いつぱい壁に押し付けた。

「キヤ・・・！」

小さな悲鳴が女の子の口から上がった。

「糞ガキが！こっちが下手にでてりや調子に乗りやがって！大人の怖さ、タップリと体に教えてやる！」

そつ言つて・・・つて！ええ！ヤバイ！具体的には言えないけどなんかヤバイ！

「い・・・嫌・・・止めて下さいー。」

女の子も先ほどまでのクールな声ではなく「いか弱々しい声で言った。

だが、酔っ払いの手は止まらない。俺は傍観を一旦止めてポケットを探つた。

「あつた。」

そして・・・。

「”超電磁砲”かなりの”威力で。」

まさか、コイン一枚で酔っ払いを貫通して建物半壊とはな。

「アハハ・・・。」

俺は、ながば呆然としている女の子を無視して、9割方死んでいる酔っ払いに手をかけた。

「”大嘘憑き”やっぱ、チートですね。」

すると、酔っ払いも建物も先程までの惨劇が嘘の様に治っていた。

「・・・。」

今思えば、酔っ払った事を無かつた事にすればよかったです。と言つ罪悪感が湧かなくもない。

「なんですか？アナタは。」

そう聞かれたので俺は振り返り返りざまに言つた。

「南一夜。ただの超能力者です。」

そして、失敗した。何故ならば。

「私は、”理”のマテリアル。星光の殲滅者です。」

そこには、俺が最も警戒すべき相手がいたからだった。

第3話 なんとか回避だよー夜ぐん(後書き)

作者：普通使うのか？”超電磁砲”。

南：誰が書いたのかな？

星光：全くですね。

作者：・・・・・やりすぎました。

星光：あ、作者が逃亡しましたね。全く・・・まあいいでしょ。

南：え、次回もよろしくお願ひします！つと。

星光：では、また。

第4話 別人だつたよ・・・なにじだ！（前書き）

始めます。

第4話 別人だったよ・・・なことだ！

「マテリアル？」

「ハイ。ですから私は高町なのはとは別人と考えて頂いて結構です。

「場所は変わつて近所の公園。テンパル俺になのは？が落ち着ける場所を示してくれた。

「それにしてもソックリだな。危うく心臓が止まるかと思つたぞ。」

「私は、闇の書のメモリーを元に生まれましたから、90%同じと
考えて頂いて結構です。」

「あり？ セツキと言つてる事違くね。

「なのは？ は、袋から勝手に肉まんを取り出ると一つい割つた。なん
だろうか。

「つまり、私は、この具の様なものなんですよ。言つなれば、スト
レートな感情をもつ高町なのはと言つた所です。」

「？？？」

「どう言つ事なのだろうか？ 原作にこんなのがつたっけ？ って言つよ
りなんで当然の如く肉まんを食つてんの？」

「まあ、こんなことをアナタに言つても分らないでしょうけどね。」

なのは？はそつと軽く笑つた。

「まあね。」

俺は、肉まんの半分を取り返し言つた。

「では、私はそろそろ行きますね。肉まんありがとうございました。」

「ああ。気をつけてな。もうあんな酔っ払いに絡まれるなよ。」

「ええ。最後にちょっとだけ嬉しかつたです。人になれたみたいで。」

「

そつ言い残すとなのは？は空へと飛び上がつた。

「さよなら。」

何故か、その言葉は、寂しそうに聞こえた。

家に帰りハガキを制作する事1時間。時計の針はもうすぐ9時となりとしていた。

「あ～寝み。」

俺は、大きく欠伸をすると、布団の中に潜り込んだ。風呂には入っていないが問題無いだろう。

俺は、ゆっくりと近づいてくる睡魔に身をまかせ目をつむる。

「・・・。」

眠れなかつた。どうにも先程のなのはモドキが気になるのだ。

「外でも散歩するか。」

そつ誰にともなく呟くと、俺は家を出た。

別に気配を辿るとか、魔力を感じるとか出来る訳では無いのだが、適当にぶらついていると、奇妙な感じがした。
何と言うか、誤魔化されている様な・・・そんな感じだ。

「？？？」

俺は、自分の右手を突出した。すると、空間に穴が空いた。
これは・・・結界とか言つ奴か。

「・・・何かあるな？」

取り合はず深入りする気は無いので、”大嘘憑き”で自分の気配を無かつた事にする。

因みに、俺の”大嘘憑き”は元に戻せる使用になつてゐる。

「おじやましまーす。」

そう言つて入り込む。

「アレ？何かが、当たつたみたいだ。」

あたりを見ると、墜落していく人間が見えた。・・・墜落？

「バカな、ルンガは、ちゃんとよけたハズだぞ！」

「・・・偶然？なのですか。」

見ると、なのは？と変な服を着た男が対峙していた。その近くには、プスプスと煙を上げる男が倒れていた。

「・・・俺のせいか？」

そういうば”不慮の事故”つて反射的に出てくるんだつたな。気を付けねえと。

ルンガと言つ男に手を合わせ、なのは？と男を見る。

「ち、闇の書の残りカスの分際で・・・とつととくたばりやがれ！」

「たとえ、残りカスであろうと、私は闇に帰ります。」

「そのまま、死んじまえよ！」

結果は、見なくても分かる。あの男の勝ちだ。そもそもから、あのものはモドキは既にボロボロだ。
きっと、別れてすぐから戦つてたんだろう。

「　　ブレイカー！」

「遅せいやー・スフィアー！」

「あう……」

なのはモヂキは、光弾に叩き落とされ、地面上に打ち付けられた。

「止めだ。！！！」

よく聞こえなかつたが、恐らく最大技か。・・・どうする〜このまま帰るか？

「原作には関わる氣は無いしな。」

やつぱりとい、俺は、なのはモヂキに背筋を向けた。

第4話 別人だつたよ・・・なことだ！（後書き）

作者：戻せる使用の”大嘘憑き”

南：自分で言うのもなんだが・・・チートじゃね？

作者：“不慮の事故”と良い勝負だと思つよ。

星光：それは、良いんですけど・・・私は、どうなるのですか？

作者：それは、次回で！

第5話　ただの不幸な不慮の事故ですよ。（前書き）

短いですが、どうぞ。

第5話 ただの不幸な不慮の事故ですよ。

この世に必然等無い。あるのは全て偶然である。

「えやあああーーー！」

だから、今日の前で男が絶叫して地面に呑きつけられるのも、全て偶然なのだ。

「え？」

なのはモドキは、体を起しづしながら、不思議なひらめきを見ている。俺は、直ぐにそいつを抱えて近くに建物に入った。その際、なのはモドキの気配を無かつた事にした。

「どうも。良い夜だな。」

「え？・・・どうして、アナタがまさかさつきのは。」

「いいや、あんなのは、ただの”不幸な不慮の事故”ですよ。」

俺は、某超能力者風に言つてみた。因みに加負荷の方では無い。

「ちよつと、散歩をしててな。やっぱそつだつたから、顔を見せただけだ。因みにもう帰る。」「

いぐり気配を消しているとは言え、何時までもここにいる悪氣など無い。平和に来年を迎えるたいのだ。

「あつがとりへりました。では。」

「ちよい待ち。」

俺は、なのはモドキに手をかざす。

「はい。終わり。」

取り合はず怪我を無かつたこととした。そして聞く。

「なんで、戦つてんの？」

「・・・アナタなら良いですね。闇のためです。」

「闇？」

なんか、中一病ポイ単語出た！

「私の始まりであり、親の様なモノなんですよ。ですから、私達は戦うんです。」

「戦えば、取り戻せるのか？」

「・・・。」

なのはモドキは、黙つて刀を向いた。

「・・・それでも仲間は戦っています。」

「仲間？」

「闇から生まれた仲間達です。閃光や闇それに他のマテリアル達。もつほどごく消えてしましましたが。」

「…………。」

よく分からぬが、きっと、他のキャラモードキの事だらう。そうか、仲間はもういないのか。

「お世話になりました。」

なのはモードキはそういつと、俺に何も言わせないよつに飛んで行つてしまつた。

「…………。」

なんで、ここまで彼女の事を考えただらうか？まだ、出会つて1日も経つてなかつたのに……。

「…………”不慮の事故”か……。」

アハハ……本当に事故だつたな。……本当に。

「帰るか。家に。」

原作や関係者には関わらない。それが俺のスタイルだ。たとえ……彼女が死んだとしても。

「眠いな。……。」

こうして、俺は気付なかつた事故は終わつた。
遙か遠くで、綺麗な光が輝いていた。

第5話　ただの不幸な不慮の事故ですよ。（後書き）

作者：合掌。
南：合掌。

星光：・・・死にましたね・・・私。

作者：はい。消えましたね。完全に。

星光：そうですか・・・集え明星・・・

作者：バツ！

南：・・・相変わらず逃げ足だけはって！なんで、一いち方に向かつて

杖を？

星光：・・・八つ当たりです。

南：理不尽だアア！！ぎやあ

星光：スッキリしました。まあ、何かしらの救済措置があると信じますか。

では、この辺で。サヨウナラ。

闇話 とある闇の創造物（前書き）

番外編。始まります。

闇。それは、恐怖の象徴。
闇。それは、安息の証し。

「じゅぢゅ、失敗のようですね。」

暗闇の中誰かが言った。

「だが、我らのやることは変わらぬ。」

「わうわうー。」

闇の中からね、別の声が聞こえる。そして言ひ。

「我らは、闇を復活せしる。闇より生まれし者達よ闇いだ。」

「…………」「」

闇の中より大勢の声が響く。彼らの気持ちが一つのようだ。作られた気持ちであるのだが。

「では、頑とん。」健闘をお祈りします。」

誰かがさつ言つて、闇の中には、さつの気配しか残らなかつた。

「健闘か・・・そうあつて欲しいものだ。」

「”闇”。そこまで、調子が悪いの？」

「”雷刃”。あなたもコアの一端ならば分かるのでは？あの時、闇のほとんどが、あの子達から焼き消されました。」

「”星光”の言ひ通りだ。もはや我らに勝ち田など微塵もない。」

「うわー偉そうな”闇”が言ひとリアルに怖いね。」

「ですが、仕方ありません。このまま何もしなければ、私達はある女と同じ末路ですか？」

”星光”はそのまま空へと飛び上った。

「では、皆さん再び闇の世界でお会いしましょう。」

そう言ひと、”星光”は闇の中から出て行つた。そんな姿を見て”雷刃”は溜め息をついた。

「”星光”的奴かなり無理してたね。もう殆ど消えても良いく状態だよアレ。」

「奴は、我らの様に一度もオリジナルを取り込んでいないからな。力の流失も早いのだね。」

「さうか・・・ボク等に出来る事は無いかな？」

「ない。だが、奴の分も戦う事は出来る。・・・さて、逝こうか。
さらばだ”雷刃”また、闇で。」

「うん。闇で。」

二人の手前強がっていましたが、流石に力が持たず私は、一旦地面に降りた。

「やはり、もう長くは無いでしょうね。気を抜いた瞬間消える自信まで湧いてきますよ。」

そう言つて、軽く笑うと私は、一旦休める場所を探し腰掛けた。どうやら何処かの住宅の裏の様だ。

「少し休んで行きましょうか。」

遠くの方で結界が形成されるのを見ながらそう決めると、家の中から楽しそうな家族の声が聞こえてきた。

「家族ですか・・・。」

高町なのはのマテリアルである自分は、ある意味で彼女のトラウマを背負っている。自分の記憶の中の家族は自分にとつての苦しみの対象でしか無かつた。高町なのはは、子供のころ父親の入院により家族から疎外されている様に感じていた。そのことが彼女のトラウマとなっていた。それでも彼女は、仲間たちのおかげで、そんなトラウマを克服したのだ。

「・・・。」

そして、そのトラウマは今自分の中にある。何故なら自分は彼女の闇なのだから。マイナスの感情があるのは当たり前なのだ。

”星光”にひとつ思い出とは苦しみしかないのだ。

「全く。笑えませんよ。」

”星光”はそう言つとゆつと立ち上がつた。彼女にひとつは、居て良い世界ではない。
そう確信したからだ。

どのくらい歩いたのだろうか？空でも飛べれば確認出来たのだろうが、そつするるのは戦いの時位しか出来ない。

『マスター？』

自分の一部であり愛機である”ルシフェリオン”が私に声をかけてくる。

そつこえば、なんでこの子だけ名前があるのでだろうか？

『マスター』

謎である。

「なんでも有りませんよ。それよりも”闇”や”雷刃”や他の人達の魔力はどうですか？」

『あまり、減つていません。ご心配なく。』

「・・・そうですか。」

嘘をつくことが下手な子だ。私を心配させまいとして・・・ですが、貴方は私の一部なんですよ。嫌でも分かつてしまします。

「（有り得ないスピードで減つていますね。”闇”と”雷刃”は今の所大丈夫みたいですが、長くは無さそうですね。）」

私はそう悟り歩くスピードを速めると、前方からやつて来た酔っ払いとぶつかってしまった。

「すみません。」

私は、丁寧に謝ると先を急ぐため歩き出した。しかし

「待てやー、ゴーラーー。」

と酔っ払いが私の肩を掴んできた。

「人にぶつかって置いてそれだけかあ？あ”？”

「どうやらタチの悪い人に絡まれた様だ。」

「・・・。」

「黙つてないで、なんか言つたらどうだ…」のガキ！」

「全く・・・自分から絡んで来た癖にどうしてそう都合よく強気に出れるのか。理解に苦します。」

「んだと…」

酔つ払いは怒鳴つたが今の私は急いでいるのだ。こんな所で、時間を喰つている暇は無い。

「失礼。私には、やることがあるので。」

「待てや…」

酔つ払いは、突然私の肩にてをかけると力いっぱい壁に押し付けた。

「キヤ・・・・！」

弱つている私はあつせりと押さえつけられ、小むく声を上げた。

「糞ガキが！こっちが下手にでてりや調子に乗りやがつて…大人の怖さ、タップリと体に教えてやる…！」

「い・・・嫌・・・止めて下さい！」

抵抗したくて力が出ない。本調子だったなら、こんな奴など相手にもならないのに。

お酒の匂いがする息を吐いてくる酔つ払いに私は生まれて始めて恐怖を言うものを感じた。

その時だつた。突然爆音が鳴り響き酔っ払いが吹き飛んだ。そして聞こえる破壊音。

私は、気配を察して向くとそこには、眠そうな男の子がいた。男の子は、何事かを言つと、酔っ払いに手をかけた。

「……」

すると、どういう訳か、酔っ払いのケガがなくなり壊れたビルも元に戻つていた。

一瞬男の子は、何かを後悔したような顔になつたが、直ぐに気を持ち直したようで、スッキリした顔になつた。

「なんですか？アナタは。」

私がそう聞くと、男の子は待つてましたとばかりに振り返り、まことに言つた。

「南一夜。ただの超能力者です。」

その後何故か絶望的な表情になつたが。

閑話 とある闇の創造物（後書き）

星光：私視点の話ですか。

作者：はい。馱文ですけど・・・。

南：・・・・（只今、蘇生中）

作者：もう少しじだけ続きます。

星光：では、次回でお会いしましょう。

闇話 じある闇の創造物2（前書き）

番外編。
続きです。

閑話 とある闇の創造物2

南一夜と言つ超能力者に助けられた後、精神的に危なくなつた超能力者を助けた。

どうやら、高町なのはに何らかのアレルギー的なものがあつたらしい。

「マテリアル?」

「ハイ。ですから私は高町なのはとは別人と考えて頂いて結構です。」

私は、南一夜にマテリアルの事を挿い捨てで話した。別に無視しても良かつたのだが、この南一夜は、魔力は感じないがそれ以上の力を持つている可能性があるため話した方が無駄に興味をもたれるより良いと判断したからだ。ついでお腹も空いたからである。

「??？」

南一夜は、話を理解しようとしているようだったが、所詮子供の様だ。表情から、4割も理解出来ていながら分かる。

「まあ、こんなことをアナタに言つても分らないでしちうけどね。」

「まあね。」

南一夜は、ハツ当たりとばかりに私の食べかけの肉まんを奪い取りほうばつた。

「・・・。」

私の記憶（知識）が確かに、これは関節キックスと言つのではないのか？

そう思つたが、私は優しくスルーすることにした。

「では、私はそろそろ行きますね。肉まんありがとうございました。」

「

「ああ。気をつけてな。もうあんな酔っ払いに絡まれるなよ。」

「ええ。最後にちょっとだけ嬉しかったです。人になれたみたいで。」

「

そう。本当ならこんな事などせずに戦いで死んでいただろうから。最後の最期で、人の様に会話が出来た。食べ物を味わえた。助けられる事の嬉しさを知つた。

もう十分だ。私は、涙を隠せる様に空へと飛び上がった。

「さよなら。」

私はもう一度手を振つて、南一夜を見た後、自分の死地へと向かつた。

「こいつは運がいいぞ。5匹目だ。」

「焦るなよルンガ。ゆっくりと痛ぶつてやれりが。どうせ、もう殆どあのガキ共が殺つちまつてんだがらよ。」

「ちげえねえ。」

私が戦場に入り最初に遭遇したのたそんな2人組だった。見ると、彼らの背後には碎けて闇に戻っているマテリアルがいた。

「”コーン・スクライア”のマテリアル……。安らかに眠つて下さい。」

自身の本体である、”高町なのは”の師匠である”コーン・スクライア”的マテリアルがボロボロになりながら消えていく。

「じめん。なのは。先に行くよ。」

「ええ。私もすぐに行きますよ。この2人を倒したらね。」

私は、彼が消えたのを確認すると、”ルシフェリオン”を構えた。

「ヒューー威勢が良いねえ～。」

「見た感じボロボロじゃねえか。」

「すみません。アナタ達より良い方がモデルなので、問題有りませんよ。」

「・・・上等じゃねえか！俺らもガキ共からナメられるのこいつをさりしてたんだよー。」

「ああ。どうせマテリアルだ。ハツ裂きにして晒してやるつぜ！」

こうして戦いは始まった。私は、残りの力からどれだけ戦えるのかを計算し魔力弾を放つ。

2人はプロテクションを張りそれを防ぐが、残念ながらそれはフェイクだ。

「な！」

魔力弾を直前で破裂させ簡易煙幕を張る。そして、その間に設置型バインドをいくつかセットしておく。

「テメエ！！」

案の定1人が飛び出して来た。バカめ。

「かかつた。」

「なつ！……」

バインドにはまり脱出出来ない男に魔力弾を撃ち込む。本来なら、”ブラストファイアーハルシフエリオン・ブレイカー”を撃ち込みたい所なのだが、魔力の残量の関係で諦めた。

「スフィア！」

「あぶねえ！ガルン！」

と此処で、もう1人の男が出てきて魔力弾を防いだ。

「助かつたぜ。ルンガ。」

「全く簡単な罠にハマりやがつてー。」

二〇〇〇年

そんな友情を繰り広げる2人に更に魔力弾×19をプレゼントして差し上げた。

「アーティスト」

それを避ける2人。外しましたか、かなり無茶をして仕留めにかかるのですが。

「テメエ！行き成り卑怯だぞ！」

「戦場で同じ言い訳が通るとでも？」

一
ち
や
は、
残
り
カ
ス
に
は
友
情
が
理
解
出
来
ね
え
か。

ルンガと言つ男が、そつ言つて舌打ちする。 友情？ そんなものは要りませんよ。必要なのは、闇の復活です。

そう思つたその時。
”雷刃”の魔力が消失した。

— 1 —

”雷刃”逝きましたか。私は、先程”ユーノ・スクライア”的アレが消え立待と同様感情を感じた。

リアルが消えた時と同じ感情を感じた。

「サロッサ」のマテリアルだつたからだろうか。
まるで、自分の半身が引き裂かれる様な痛い様な切ない様な気持ち
がした。

「グツ・・・あつ」

その時、体中に衝撃が走つた。何事かを確認するとどうやら相手の魔力の一撃を受けてしまつたらしい。

「戦い中に考え方とは余裕じゃないの？」

「誰か死んだか？ヒハハ。」

そうでした。今は、この人達と戦つていたのでしたね。私は、自分の状態を確認する。よし、まだ行けそうです。

「すみません。ちょっと本氣で行きますね。」

そう言つと、私は魔力を中程度消費し”ルシフェリオン”の先端に魔力を収縮させる。そして相手に狙いを定め

「”ブラストファイアーハー！”

を発射する。まともに受ければ、あの程度の相手ならダウン間違い無しの攻撃である。・・・だが、運命は私に厳しい様である。
2人は、意外と高つた機動力で除けきる。

「く・・・。」

力の半分を使い切つた私は、そう呻くと

「…………。」

ルンガと呼ばれていた男がプスプスと煙を出しながら落下していった。

「バカな、ルンガは、ちゃんとよけたハズだぞ！」

「……偶然？なのですか。」

私は、今起きた現象に混乱していると、半分理性を失ったガルンと言つ男が突っ込んで来た。

「ち、闇の書の残りカスの分際で……ひとつとくたばりやがれ！」

そう言つて来るガルン。しかし元からそのつもりです。

「たとえ、残りカスであろうと、私は闇に帰ります。」

「そのまま、死んじまえよ！」

でも、今は死ぬわけには行きません。せめて、マテリアルがいたと言つ事だけでも。私達だって生きている事ででも分かってもらえない限り死ぬ訳には行けないんです。

「…………ブレイカー！」

「遅せいよースフィアーリ！」

「あう……」

私の最後の力を込めた一撃もかわされ私は地面に打ち付けられた。

「止めだ。！！！」

光の塊が直ぐ目の前まで迫っている。

「終わりですか。」

すると、生まれてからこれまでの事が蘇ってきた。俗に言う走馬燈
という奴だろうか？

大半は、”高町なのは”としての記憶だった。当然だ元は彼女の闇
なのだから。そして、直ぐ前の事件から記憶が黒く染まり
次に見えたのは影だった。どうやら、ここからが私の記憶の様だ。

「うわー暗いですね。」

凄まじく暗い色しか見えない記憶だった。まあ、生まれてから太陽
と呼べるモノも見てないから当然だが。すると、突然画面が切り替
わり、先程あつた男の子の姿が浮かんできた。

「。。。。」

たいして格好良くなれば、魅力的とも言えない男の子。そんな彼
の笑顔が、浮かんだ。

「肉まん。。。。」

そう呟いた時不思議な暖かさが体を包み込んだ。

「わああああーー！」

「え？」

すると次の瞬間には、ガルンと言う男が悲鳴を上げながら落ちていった。そして突然の浮遊感が私を襲つた。しかし抵抗はしなかつた。何故か分からぬが、とっても暖かかつたからだ。そう思つていると

「どうも、良い夜だな。」

と言つて、あの男の子が立つていた。その顔には心配そうな感じが浮かんでいた。

「え？・・・どうして、アナタが？まさかさつきのは。」

さつきの事態は・・・いや、その前の事もまさか彼が助けてくれたのだろうか？

「いいや、あんなのは、ただの”不幸な不慮の事故”ですよ。」

しかし、彼はさつと笑つて言つた。

「ちょっと、散歩をしててな。やっぱさつだから、顔を見せただけだ。因みにもう帰る。」

そんな、ふざけている様に言う彼に私はとつても泣きたい気持ちになつた。何故か分からなかつたけれど私はもう一度だけ彼に会いたかったのだ。でも今私を助けたと言う事は、下手をしたら管理局に目をつけられてしまうかもしれない。

私は、そう思ひこの場を立ち去ることに決めた。

「あつがとうございました。では。」

「ちよい待ち。」

立ち去るとする私に彼は手をかざす。何を・・・そつ聞いつとしだとき、体から痛みが引いた。いや、なくなつた?

「はい。終わり。」

彼が、そつ言ひと、痛み所か、キズすらなくなつていった。まるで最初から無かつた様に。服までも元に戻つていた。

恐らくこれは、彼の能力なのだろう。すると、彼は真剣な眼差しで聞いてきた。

「なんで、戦つてんの?」

その目には興味とかそんなお遊びの心など無くただ一心に心配が浮かんでいた。・・・言つてもいいかな・・・。

私は、全てを話す。

「・・・アナタなら良いですね。闇のためです。」

彼に全てを話し、私の心は少しだけ軽くなつた。そして私は、彼から逃げた。これ以上彼といえば、私は戦えなくなると思ったからだ。何故そう思つたのか分らな・・・・・いや、私は、彼に好意を持

つてしまつたのだ。全く我ながら単純な性格だと思つ。

「・・・一夜・・・。」

私は、自分が”高町なのは”ではなく、”星光の破壊者”として”私”として初めての初恋の相手の名前を呟いた。

「・・・全く・・・不幸な不慮の事故ですよ。」

もうすぐ私は消える。

この物語はバットエンド。

でも、私は・・・・・。

「幸せでしたよ？一夜。」

その夜は一日中赤い光が満ちていたと言つ。その光はとても力強くとても美しく、そして、とても儂い光だったと言つ。

その光は、とある少女の初恋の残滓。

その光は、闇をも照らし、とある人物に・・・・。

閑話とある闇の創造物2（後書き）

雷刃…どうでも良いけどさ、ルンガって無事なの？

作者・まあ、死者は出なかつたそつなので、無事なのでしょう。

・・・所で、何故アナタがここに？星光さんは？

雷刃：うーん、恥ずかしくなつたみたいで、逃げて行つたよ。ボク

出番か

విషయాల ప్రశ్నలు

闇：（我・・・・・結局1行も出番が無かつた・・・・・）
作者：すみません。下書きには、登場していたのですが・・・・転生者に瞬殺

される役だつたので・・・不憫で・・・。

卷之三

雷刀

閻

雷刃：ん？ ちょ！” 間” 何してんの！”

年齢：ギヤ
性別：男
年齢：一
性別：
年齢：
性別：

雷刃：ああ！作者が「ハミの様に！」

闇：フハハハ！出番が無いならば作るまで！こには、我が頂いた！

ね
！

瞬殺されたけど

闇：アハハ！もつと褒めるが良い！

作者：よろしくお願ひします。・・・ガク・・・

第6話 新しい朝の1ページ。（前書き）

投下します。

第6話 新しい朝の1ページ。

あれから、少しあたし、俺は無事に原作に巻き込まれる事無く新年を迎えた。

とは言え、家は俺一人であるため適当にデパートからオセチの小売を買って祝った。

その後、残っていた宿題を片付けテレビの特番を「ロロロロしながら見ていた。

御神籤も引いて見たが、結果は”大凶”と言うこの時期では逆に運の良い部類に入るものが出了。

なんでも、待ち人がこない上に他人がいるそつな。なんじやこりや？そんなこんなしていつもすぐ新学期が始まるので、新しい鉛筆と消しゴムを新調した帰り道俺は、アイツと最後に会った場所に自然と足が向かっていた。

「つたぐ。あの日はお前のせいで眠れなかつたんだぞ？」

「つたぐて、空き缶に花をさしてお菓子を近くに置く。

「お前の為じやねえからな。」

俺がそうつたて、外に出ると銀髪の女性がいた。

「・・・・・・。」

間違いない。あの髪色は100%原作キャラだ。何故こんな所に？

「私はどうするべきだったのか・・・どうすれば・・・。」

チャンスだ！原作キャラは只今、よくある苦悩シーンの真っ最中の
ようだ。

「今だ！」

俺は、風の様に走る。そして、原作キャラの脇を・・・

「アベシ！！」

「ん？」

抜けようとした瞬間突然動いた右腕により世界が一回転した。

「わーすまん！大丈夫か？」

「ダイビヨウブデフ（大丈夫です）。「

抜かつた。正月だったので”不慮の事故”も”反射”も切つてたんだつた。随分しさしぶりなダメージだつたりする。

「いや、そとは見えんぞ？顔面から凄まじい量の失血が・・・」

「え？ そうなつてんの？・・・本當だ！地面に血だまりが出来てる！
ヤバくね？」

「ちょっと待つてる。」

原作キャラの前でまさか”大嘘憑き”を発動するわけにもいかない
し地味に痛いし。どうしよう？

「アレ?」

「田覚めたか。」

いつの間にか気を失つていたようだ。と言つよりなんで、膝枕？

「ギャアアーー!」

原作キャラに膝枕をされているうううーー!ヤバイつうかなんで?
見知らぬ子に膝枕?

「すまない。驚かしてしまったか。」

「あ、いいえ。」

よし。クールになれ俺。この状況はまだ回避出来るレベルのはずだ。
取り合はず離れてあたりを見渡すとそこは、俺がさつきまでいた場
所だった。

「お前が、そちらが出てきたのは分かつていたからな。」

どうやら、原作キャラのスキルを甘く見すぎていた様だ。原作キャラ
は花を見て言つた。

「お前は、どうしてこんな所にいたのだ?」

「見ての通り友達の供養のためですよ。アンタこそなんでこんな所

二
?

「私は、・・・何故なのだろうな？例えるなら、自分が死んだからか？いや、姉弟が死んだからと言つべきか？」

これが、原作キャラではなければ俺は不審人物として即座に通報していただろう。

「すまない。言葉が見つからないのだ。」

— えうですか。じきあ、俺はほりで

もつこじんか所には、長居は無用だ。俺はそつと、外に出るため歩き出した。

廿二日原作廿二

「ああ、全く。お前は何が言いたかったのだ……」星光よ。

”星光”その言葉に俺は足を止めた。

「“生きて下さい”だと。全く・・・笑える。闇をまき散らし主にその友にまで迷惑をかけた私が・・・呪われた私が・・・。」

• • • • • • • • • • • • •

俺は次の言葉を待つた。そうしなければ、どうする事も出来ない。

「・・・私など早く消えてしまえば良い。あのマテリアルの様に幸せな記憶を抱えたままで。」

「・・・。」

「うかい。じゃあ・・・。」

「俺が消してやるよ。」

そう言つて、ポケットからゲームコインを取り出した。

「えつ？」

原作キャラは、俺に気付いたが。
もう遅い。高圧電流の塊が、原作キャラの腹部を貫いた。

第6話 新しい朝の1ページ。（後書き）

闇 : キサマはアホか。

南 : スミマセン。だが、後悔はしていない！

雷刃 : それにしても、管理プログラム。が言っていた、”星光”的事つて、一体

なんなの？

星光 : 次回で、分かりますよ。

雷刃 : うわゝさりげなく次回予告だ・・・。

星光 : では、次回で。

第7話 力無き強者と星の輝（前書き）

投下。

します。

どうが。

第7話 力無き強者と星の輝

最後に彼女の相手をしたのは、私だつた。

「お前で最後だ。」

「分かつていますよ。”闇”も先程消えた様ですね。」

彼女は、追い詰められているのに何故か満たされていいる顔をしていた。

闇の力のマテリアルに有るまじき表情だつた。

“闇”的いや”夜天”の管理人格。」

「今は、リーンフォースと言つ名がある。」

私が、主から頂いた名を名乗ると彼女”高町なのは”のマテリアルは深々と頭を下げた。

「失礼。リーンフォース。一つ良いですか？」

「なんだ？」

「貴方は今幸せですか？因みに私はとっても幸福な気分です。キャラを忘れて小躍りが出来ますよ。」

「私は、・・・幸せだ。主と騎士達と過ごす時間は何者には代え難い。私の宝だ。」

「そうですか。良かつたです。」

「何だと？」

私がクビをひねると、”高町なのは”のマテリアルはクスクスと笑つた。

「私は、”高町なのは”の”闇”であると同時に貴方の一部でもあるのですよ。少なくとも私の中の”貴方”は、幸せとは無縁でした。私は”過去”の”貴方”として、祝福致します。」

「・・・・・・・・・・・・」

一体このマテリアルは何を言つてているのだろうか。理解出来ない。だが、今はやることをやるだけだ。

「済まない。そろそろ終わらせてもらひつぎ。」

「そうですね。私がいると、また罪の”有る”マテリアルが生まれますから。」

「自分がどう言つ存在かを理解している様だな。」

「ええ。大体は理解出来ています。」

そう言つと、ディバイスを構えてきた。

「大人しく闇には帰つてくれないか。」

「済みません。これが、私と言つ存在なので。」

そつ言つと何も言わずに突っ込んできた。本当に突っ込んできただけだった。そして一撃で勝負が着いた。

「どうじゅつもりだ？あれでは、無駄死にではないか。」

「そうですね。別に気にしないで下さい。こんなのただの”不慮の事故”ですから。」

彼女は、そう言って笑った。幸福そうに笑った。

「一つだけ良いですか？」

「何だ？」

「”生きて下さい”私達の分も”生きて”下さい。」

「…………。」

「どうしても無理だと思ったら、”の人”を頼って下さい。きっと何とかしてくれますから……。」

「あの”人”？」

「…………アハハ…………。」

そう言つとマテリアルはゆっくりと粒子になり闇の中へ帰つて行つた。だが、私にはそれが、光の中に吸い込まれる様に見えた。

「…………。」

私は、何時までも彼女が消えて行つた、空間を見つめていた。

時が経ち今私の腹部には大きな穴が開き赤い液体が漏れ出し肉は焦げていた。

「ゴブツ・・・。」

口の中が鉄の味に染まり、赤い液体が流れ出でくる。
力が入らない。

「苦しいか？ そうだろうな。俺がそうしたんだから。」

私の体が突然浮き上がり壁に叩きつけられる。そしてそのまま手足を太い螺子で固定されてしまった。

「なんで・・・お前が・・・。」

死ぬほど痛い。だが、死ねない。苦しみの連鎖が続く。そんな私を先程の少年が恨めしそうに見てた。

一体どうやったのだ？ 私は常に主の為に辺りは警戒していたハズである。魔力の反応があれば直ぐに対応出来たはずなのだ。
しかし、少年からは魔力など感じられない。

「・・・一体・・・なん・・・。」

すると少年は、ニッコリとワラウ。

「俺は、”星光”の友達のしがない超能力者ですよ。」

』

そう言って、更に微笑んだ。

第7話 力無き強者と星の輝（後書き）

闇： 我の存在忘れられて無かつた！！！

雷刃： 良かつたね！”闇”！（でも、”星光”。ボクの時程取り乱して無かつたよね？やっぱり出会いって日が浅かつたから？）

星光： それにしても気になりますね。

雷刃： うん。”星光”的キャラを忘れたダンスってどんなのなのかな？

星光： いいえ、それではなく・・・。

ルシ：“雷刃”様。音楽プレイヤーなら内蔵しておりますが？

雷刃： 新事実！良し！踊ろう！

星光： あ、ちょ・・・！

闇： ・・・また、我だけ取り残された！・・・グス・・・では、次回で。

第8話　「これは罰ですか？いいえ嘘ついたのです。（前書き）

プロローグ編終了。

第8話　これは罰ですか？いいえ嘘つきです。

一体何をしてるんだろ？うね俺。原作キャラを磔つて。バカじやねえの？

“星光”の・・・友達？

「ああ。一田惚れしたよ。」

アー恥ずかしい！でも、本当だ。

一田惚れだつた。前の世界でもそんな事は無かつた。

「・・・でも、出会つて2時間位しか経つて無かつた。」

俺は、砂鉄を集め剣にする。漆黒の剣が俺の手に納まる。

「正直お前がなんなか知らんが。」

俺は、剣で原作キャラの腕を切り落とす。原作キャラは、少し苦しそうな表情になる。

しかし、声は上げなかつた。

「友達の事を馬鹿にしたら。」

次は、足を切り落とす。腕も足も失い原作キャラは、不様にも地面に落下する。

「俺でも切れるさ。」

そして最後に胴体へ突き刺し電流を流す。手加減無しの高圧電流だ。

「苦しいか？苦しいよな？そうだよな？これが”生きる”事だ。死にたい？良いぞじゃあ死ね！」

最早、元の姿も分からなくなるまで丸焦げにされても生きている彼女。

「このまま死ね！ 気付かれず死ね！ 惨めに死ね！ 家族や友人にも知られずに死ね！」

「あああ・・・。」

原作キャラはもう何も考へる事は出来ていないのである。

• • • o

俺は、止めを刺すべく螺子を取り出した。

手足をもがれ、体を焼かれた。
これは、罰なのだろう。
やはり、私は生きていて良いハズ無かつたのだ。

あの時。闇と共に消え逝くのが私の定めだつたのだ。

だが、私は幸せだつた。たつた一時にでも幸せな夢が見れた。
赤神寿也の力によつて、消滅までの時間が遅れたのだ。

闇の化物には、過ぎた幸せだつた。

私は、”星光”を手にかけそして、その友に殺される。
良い最後じゃないか。

本当に。

ああ。

・
・
・

『何をしているのですか』

そんな時だつた。 ”彼女” が田の前に立つていた。

「どうして、お前がここに？」

『どうしてつて? 分かりませんか? 私は、貴方なのですよ?』

”彼女” はそつと手を差出してきた。

『まあ、立つて下さい。そして ”生きて” 下さい。』

「もう、無理だ。私はお前の友に殺められた。」

『そうですか。』

「ああ。今更起き上がりつてもどうにもならない。」

すると、”星光”はクスクスと笑つた。

『大丈夫ですよ。彼は嘘つきですから。』

「嘘つき？」

『ええ。貴方が考えを改めて”生きる”選択をすれば、きっと。』

私は訳が分からずクビをかしげる。

『まあ、やりすぎた事には、いつか、O・H A・N A・S H Iとさせて頂きましょう。』

”彼女”は黒い笑みを浮かべていた。

いつの間にか私は、ソファーに横たわっていた。

『”大嘘憑き”！』

と、突然そんな声が耳元で聞こえた。私は”手”で耳を塞ぐ。

「えつ・・・？」

私は、自分の体を見た。”手”所が、”足”も”体”も傷一つ無く

”元”に戻っていた。

「さあ、俺はもう帰る。じゃあな。」

少年はやがて私に背を向けて帰つていった。

本当に何してたんだろうな俺は。”星光”の頼みを聞くとは、全く
アイツも厄介な頼みをしてくれたもんだよ。

「”生きて下さい”って、他人に言つ事を聞かせるのは、一苦労な
んだぞ？」

俺は、そう言いながら、家路についた。

その後、家に帰ると同時に口止めを忘れた事に気付き慌てたのは、
また別の話。

第8話　これは罰ですか？いいえ嘘つきです。（後書き）

南　：おい。作者、上のプロローグ編って何なんだ？

作者：はい、これまでが、プロローグです。次回より新章がスタートします。

闇　：新章？

星光：オリジナルの展開ですか。原作キャラとは、関わるんですか？

作者：…それは、秘密で。

雷刃：うわー不安要素多い！

作者：それでは、これからもよろしくお願いします。

南　：よろしくな！

30000PV & ニーク5000

突破記念 とある“雷刃”

30000PV&ニーク5000
突破しました！
皆様！ありがとうございます！！

青い髪をなびかせ、彼女は飛ぶ。

「光翼斬！つと。」

「うわあああ！」

取り敢えず襲つてきた、魔導師Aを仕留めてみる。

「よくも…ジローを！」

すると、また魔導師出現。

「電刃衝！」

「ギャアアーー！」

魔導師B撃墜。

「よくもゲーを！」

魔導師C出現。ああ、もう！

「面倒臭いよーーーー！」

一体何人倒せば終わるのさ！僕の叫びが、夜空に響き渡る。
”闇”から、うつて出て早1時間余り。ずっとこんな感じなのだ。
大きい魔力を感じて、そっちに向かったけど・・・。

待っていたのは、大したことない魔導師軍団だった。

「ヤ！」まだだ！』

「止まれ！」

「待て！」

うわあ～また出たよ・・・何なの？1人いたら30人はいるの？

「ねえ、もう止めない？キミ等じや僕には、勝てないよ？」

取り敢えず話し合いだ。まずは、それからって、”星光”も言つてたつけ？

「班長！アイツの言づ通りスよー諦めましょー！」

「ウス・・・自分も同感ッス。」

あり？なんか、様子がオカシイゾ？部下と思わしき2人が隊長にそう言つていた。しかし隊長は、ゆっくりと首を振った。

「・・・それは、出来ん。」

「何故ですかーこのままじゃ俺等・・・殺されますって！」

「そうですよ！アイツなんかアホそりですよ~手加減なんてしてくれませんよー！」

「『コラ！今”アホ”って言つたな！僕は”アホ”じゃないぞ！皆か

らは、『『雷刃』』は、馬の様に速くて、鹿の様に強いですね』とか
『『雷刃』』が風邪をひく様子は想像出来んな。』って、言われる位
凄いんだぞ！－』

エヘン－どうだ？凄いだろう－

「・・・・隊長。 アイツ・・・・。」

「・・・・泣けるッス。」

「言つてやるな。」

何故か、同情の視線を向けられている様な気がする。

「とにかくだ。ここで、奴を仕留めるべ。正直に言つと、俺等の首
が懸かってるからな。」

「どういう意味ツスか！それ！」

「まんまだ。』』PT事件』や』闇の書』の時俺達は、なにか手柄を
たてたか？」

「いいえ。」

「殆どあの子供達に持つていかれました。」

「あーそう言えば・・・。」

”フヨイト・テスタークッサ”的記憶を探ると確かに殆どの人外的
な力をもつ男の子達が解決している。

「俺・・・聞いちゃった。」

「「「何を?」」

「リングディ艦長が、もつすぐアースラの乗組員の選別を開始する。その電話を・・・。」

「「「な、何だつて!...!...!」」

アースラの乗組員の選別だつて!それつて殆ど左遷じやないか!皆いい人なのに!

「だから、俺等は、手柄をたてなければならぬ・・・。俺は、病氣の妻の為に・・・お前らだつて、守りたいモノがあるだろ?」

「「「!...!...!」」

その言葉に口の皿が開かれた。・・・そりだ。

「・・・お、俺は、生まれたばかりの子供の為に・・・。

「俺は、・・・貧しい家族の為に・・・。

「僕は・・・闇の為に・・・。

「そうだ!俺等には、守りたい家族や生活があるんだ!」ここで、手柄をたてなくていつたてる!」

「「「おおー!」「」」

そうだ！僕等には守るべきモノがあるんだ！

「行くぞ！あのマテリアルを殲滅せよ！」

「ハイツス！」

「任せてよ！」「

「了解ッス！」

さあ！勝負だ！マテリアル！そう思い振り返るが、そこには誰もいなかつた。・・・どういう事だ・・・？

その時、僕の相棒である”バルニフィカス”が反応した。

『えっと・・・マテリアルは、マスターですが・・・』

「へ？」

・・・・・・・・・・・・ そうだった！――――――――――――――

でも、妙だ・・・なんで、まだ、攻撃が来ないんだ？僕が、隊長達を見ると・・・。

「そうだった・・・。」

「クッ・・・なんて運命なんだ。」

「だが、行くしか無い！」

どうやら、僕達の気持ちは一つだつたらしい。

「 「 「ウオオオ！！」」

3人の周りに術式が展開される。これは、大きいのが来る！

『マスター。アレは危険です！一旦距離を！』

”バルニフィカス”がそう警告して来るが、僕は逃げはしない。

”力”か・・・。面白い僕の”力”とどちらが上か確かめてやる。

僕は”力”的マテリアル。”雷刃の襲撃者”だ。”理”や”闇”とは違い戦いを求める。

”バルニフィカス”セット・・・アレ行くよ・・・。

『魔力が持ちませんが？』

「構わない。僕は、僕で行く！」

”バルニフィカス”は、ため息をつく様に光ると術式を展開させた。

「 「 「協力砲撃魔法！…アラ3ーキヤノン！…」」

何だが、えらく悲しみが伝わってきそうな名前は無視して、確かに強力そうだ。”星光”のオリジナルである”高町なのは”の最大砲撃魔法並かも知れない。・・・隊長・・・皆・・・なら、僕だつて行くよ！

「砕け散れ！雷刃滅殺極光斬！！！！！！！」

『これが、僕の最大魔法だ！』

「「「「うおおおおおおおおお！」」」

「リヤアアア！！！」

凄まじい閃光が僕らを包み込んだ。

辺りが吹き飛び、隊長達が氣絶している。

「か・・・勝つた・・・勝つたよ！イヤッタ！！！流石僕！凄いぞ
強いぞカツコイイー！」

『ですが・・・もうそろそろ限界ですよ？』

「うん。分かつてるよ。・・・”バルニフィカス”・・・ごめんね。
僕のワガママで、寿命を縮めて。」

『お気になさらず。主に最後まで付き従うのが、ディバイスとして
の幸せですか？』

「アハハ！！！そつかな？じゃあ良いか！」

『ええ、マスターは、消えるその時まで、そのまままでいて下さい。』

「うん！」

僕が、そう言つと同時に目の前に2つの人影が現れた。

「時空管理執務官。クロノ・ハラオウンだ。君は・・・フェイトのマテリアルか・・・。」

「・・・・・フェイトちゃん。」

行き成り強大な魔力を持つ魔導師登場！ヤバイかも しかも2人も間違ってるし。

「違うよ？僕は、”雷刃の襲撃者”。”力”を司るマテリアルさ。」

僕は、”バルーフィカス”を構える。

「さあ、かかるべきなよ？その人達のおかげで、弱ってるから今なら倒せるかもよ？」

『スタンバイ・・・マスター・・・。』

「うん！」

2人がディバイスをセットしたのを確認すると僕は、もう一度声高く宣言する。自分の存在を知らしめる為に。

「我が名は、”雷刃の襲撃者”。”力”を司るマテリアル！”フェイト・テスタロッサ”の闇より生まれしスーパー強い最強の戦士だ

！」

うん。やっぱり僕つて・・・凄いぞ強いぞカッコイイ！

”闇”の核の内最も早く彼女は退場した。

彼女と戦った局員は、口を揃えて言つた。

強かつた。

アホだつた。

残念な子だつた。

意見は、様々だつたが、こんな少數の感想もあつた。

彼女は、誰よりも真っ直ぐだつた。

と。

30000PV & ニーク5000 突破記念 とある“雷刃”の

南：嘘……だろう……。

作者：はい、私も驚きが隠せません……。

南&作：30000PV & ニーク5000

突破！！

星光：まさか、ここまで、この駄文を読んで頂けていていたとは。信じられません。

雷刃：うん。まさか、アクセス数を帰つてから見たらこんな事になるなんてね。

闇：そうだな……これも読者様のお陰だな。……所で作者……

作者：はい？

闇：この番外編なのだが……”雷刃”が主役とはどういう事だ！また、我的出番が無かつたのだが！

星光：“闇”私の出番も有りませんでしたよ。

闇：あつたぞ！よく見ると良い”星光”の文字があるから！

南：いや、“闇”って文字も結構あつたぞ？

闇：それは、我を指していない！

”全”……！！！

闇：いや、そこは驚くべき所ではないと思つが……とにかく説明せよ！

さもなくば……。

作者：はい！説明します。今回の話なのですが、”雷刃の襲撃者”にスポット

を当てたのは、実は……かなり初期のプロットでは、南と合つたのは、

”星光”では無く”雷刃”だった計画があつたからなのです。

星・闇……！！！

雷刃：それ！どういう事？

南：あ、それ俺も聞きたい。

作者：はい。始めの段階では、南の初恋の相手は”雷刃”と言ひ事になつて

いました。

星光：・・・何故、私に？

作者：えつと・・・ぶちやけて言ひつと”雷刃”でシリアルスは・・・無理・・・？

いつの間にか、ギャグになつてしまつ・・・そんな訳で、”

雷刃”

から”星光”に変更したのです。

南：で？どうなつた？

作者：シリアルス展開が別人の如く浮かんできました。流石は”星光”さん。

星光：褒められているのか微妙ですが、どうも。

雷刃：あーあー残念だな

作者：この話は、そんな”雷刃”の追悼話と思つて頂けたら幸いです。

雷刃：うん！分かつたよ。

星光：妙に返事が良いですね。拗ねると思つたのに・・・。

雷刃：うん・・・まあ、アレを見たらね・・・。

南：アレ・・・。

闇：どうせ・・・我なんて・・・我なんて・・・シリアルスにもギヤグにも

・・・・いらない子・・・なんや・・・ウチなんて・・・。

星光：・・・先祖（？）帰りしてますね・・・。

南：作者・・・いつか奴にも・・・何かしてやれ・・・。

作者：さて、次回からは、新展開！

南 : 無視だと！

雷刃 : 4年生になる南に降りかかる不幸とは？

南 : ”雷刃”まで！？

星光 : こうじ期待。

南 : ”星光”まで！ムゴイ・・・”闇”が報われねえ！

闇 : それでは、また、会おう。

南 : 復活してる！！

作者 : これからもよろしくお願いします。

第9話 新しいクラス（前書き）

新章開始

第9話 新しいクラス

新しい年も問題なく過ぎた。俺は、今日から4年生になる。

「イエス！」

俺は、人目も気にせず大声で叫んだ。何故って？そりや・・・

高町なのは	・4年1組
その他	・4年1組
南 一夜	・4年2組

この世界の主役と思わしき連中と違うクラスになつたからだ。しかも八神妹も1組らしいので俺の安全は、確保されたも同然なのだ。アッハハハ！

「グッバイ！フォーエバー。」

そう言いながら、俺は新しいクラスへと向かつたのだった。

「・・・元3年1組 南一夜です。ようしく。」

新しいクラスおなじみの自己紹介。流石にここで目立つと何が隣に繋がるか分らないので今年も暗いキャラで通そうと考え挨拶をする。

友達？いませんよ？

「元3年4組　田野渚です。宜しく。」

そういうえば。このクラス結構見ない奴がいるな。前と同じ組の奴が数える程しかいない。

「・・・元3年3組　時田鈴音です・・・」

ふむ。こうやって見ると、1組がなんか優遇されている感じがするよな。クラスマッチとか。

「えーありがとう。俺は、このクラスの担任　甲田哲一だ。これから一年よろしくな。」

『ようしきお願いします』

取り合はず、皆『フォルトと化した挨拶をする。

「さて、早速だが、皆にお知らせだ。実はな、このクラスに3人転校生がやってくる事になった。」

すると、周りから歓声が上がる。

3人って、多くね？他のクラスには振り分けなかつたのか？

「そういえば、1組にも来るって言つてたぞ。」

とクラスの誰かが言つた。そりかい。

「フア～。」

となんか眠くなってきた。今日は早く終わるし、はよ帰つて寝よつと。

校長先生によるデススピーキークを乗り越え、生活指導の先生の決まり切つた、セリフを聞き流し、ついに下校時間になつた。

「 と言う訳で、4年生からは一時的にクラブ活動に参加しなくちゃいけないから。決めておくよ。」

『はーい。』

「ほーい。」

「じゃあ、解散。」

『起立・氣を付け・礼』

『ありがとうございました。』

俺は、一目散に下駄箱へと駆け出した。

第9話 新しいクラス（後書き）

南 : 遂に始まつたな。
作者 : はい。これから新章が始まります。
闇 : しかし、オリキャラが出てきたな。
作者 : はい。オリキャラです。どうなるのかはお楽しみにーではー！

第10話 引き籠つフレンズ（繪書モ）

続けて投下！

第10話 引き籠りフレンド

このクラスになつて、1週間が過ぎようとしていた。流石に4年生にもなると、いくつかのグループが出来ており、その人たち以外とは余り会話をしない様だ。3年から転校し出来るだけ目立たた俺もそのグループに入つている訳がなく休み時間はもっぱら眠りに専念していた。

「……………。」

そしてこの時期になると、学校へ来ない奴も出てきていた。“時田鈴音”と言つ子は、始業式の日以外来ていない。

何故かつて？知らん。噂では、変人で酷いイジメを受けていたらしい。

「全く。どの世界も暗い所も合つたもんだ。」

楽しそうな、学園ものアニメでも必ずイジメの問題がある。大概はヒロインの一人なのだが、そう言う奴に限つて、なんでイジメられているのか分らない程のスペックを持っているものだ。まあ、現実には、そんな都合の良い奴なんていないけどな。

「……………ねえ。」

「……………。」

「聞いてんの？」

「ここで誰かが話かけて来ている事に気付いた。

「なに？」

「先生から、時田さんでプリントを届ける様に言われてんの。アンタとね。」

「なんで？行くなら田野さんだけで良いじゃん。」

「私が、道を知ってる訳無いでしが！」

「いや、知らねえよ。」

「時田さんの家アンタの家の近くなのよ。道位知ってるでしょ？？」

「・・・見せて。・・・。」

「はい。」

俺は、日野さんが書いた住所を見てみる。確かに家の近くだ。徒歩5分もない。

「分かった。帰りに案内する。」

「そう。じゃあ、よろしくね。」

そう言つと日野さんは、自分の机に戻つて行った。そういえば、あの人もよく独りでいるよな。

「まあ、良いか。」

俺は、そつ言つと伸び眠りに入った。

授業も怒られながら終わり、眠さをこらえながら、帰路につく。隣には田野さんがいるが。

「全く。なんで、いつも寝てんのよ。」

「別に。眠いから眠るんだよ。」

「そんなんだから、テストの点も悪いのよ。」

「知ったことか。難しい問題が悪い。」

この世界の小学生の問題は、力を抜いて受けている為毎度点数が悪いのだ。いや、そのうちマジでヤバくなるかも知れない。

「田野さんは、常に成績が上位で羨ましいね。確か去年は学年7位だったつけ？」

「なんで、知つてんのよ。」

自然と他の転生者の成績を見てましたから。因みに1位は、”アリサ・バーニングス”だつたけ？恐らく転生者共はマジで手を抜いてやがるな。自重しろよ。他の頑張っている子供の事も考える。

「な、何よ。なんで、そんな哀れそうな目で私を見るのよー。」

「いや。ガンバッテ。」

さつといつか報われるぞ。

「さて、着いたぞ。ここだ。」

古い木造の家が田の前にあった。表札には時田と合った。

「ここ、人が住んでたのか。てっきり空き家とばかり思ってたぞ。ここにやつて来てはや一年になるが、まさか人が住んでたとは。この街は不思議がいっぱいダア。」

「アンタね・・・まあ。いいか。」

田野さんはそう言つと、チャイムを鳴らした。なんとも虚しくなる音が響いた。

『・・・はい。』

とインターフォン越しに女の子の声が聞こえてきた。

「あ、時田さん。同じクラスの田野だけビデ。プリントを届けに来てやつたわよ?」

『・・・ありがとう・・・。ポストに入れといて。』

「嫌よ。出できなさい。アンタもう一週間も休んでるじゃない。どうしたのよ?」

『何でもないよ。・・・ただ、行きたく無いだけ。』

「何でよ? アンタ自分がどうこう学校に行っているのか分かってる訳? 高いのよ? 学費とか。」

それに入学試験も大変だよ?

『・・・。』

「あ、ちゅうヒー。」

時田さんはそのまま喋らなくなつた。

「もう! なんなのよ! 」

「いや、多分田野さんが悪いと思つても。引き籠り相手にその口調は逆効果以外の何者でも無いから。」

「むひひひ。」

田野さんは、軽く唸ると、ズカズカと門を潜つて玄関まで行つた。後はプリントをポストに入れるだけだ。やつと帰れるな。

「ファー。」

軽く欠伸をして、田野さんの帰りを待つ。田野さんはポケットから何かを取り出しばだに何かをしていた。

「??」

何を……”ガチャリ”ハイ?何?さつさの音よ。

「さて、入るわよー」

「ええーーーちょっと待て!なんだそれはーーー」

「ん?万能鍵?」

なんだ?そのチートアイテムは?

「私の発明品よ。趣味でね。」

趣味でそんなもん作るなよ。匕首つかつ使つなよー。

「おい、不法侵入罪だぞ?」

「そう。ホラ。」

「あ、ちよ・・・。」

「これで、アンタも同罪ね。」

「何でだよー。」

「ホラ、行くわよ。心配しなくても、友達思いの子供の可憐に罪つて所よ。」

俺は、別に友達じゃないのだが……。

「さて、行くわよー。引き籠りちゃんの話を聞きにねー。」

日野さんの迫力に負け、俺はなし崩しについて行く事になった。
家に帰りたい。

第10話 引き籠りフレンド（後書き）

星光：また、厄介そうな方に捕まりましたね。

南：……本当に……サブを甘く見ていた……。

日野：誰がサブよ！人生皆主役！この世界に主人公なんていないのよ！

闇：ウム、確かにそうだ。良い事を言つたキサマ。

日野：どうも。

雷刃：あ、なんか仲良くなってるし……。

作者：まあ、放つて置きましょう。それでは、次

闇・日：次回もお楽しみに！

作者：取られた！！

第11話 未来予知（前書き）

じつねい。

第11話 未来予知

「こんにちは。南一夜（仮）です。
ただいま、ワタシは、他人の家に不法侵入しております。
何故ならば。

「ほら、何ブツブツ言つてゐるのよ？ 静かにしなさいよね。」

この非常識キャラに無理矢理させられているからです。

「クソ。主要キャラ以外のモブを甘く見てたぜ。」

「何ですって？」

「いいや。」

己が不幸を呪いながら家中を進んで行く。

「それにしても妙な家だな。絵ばつか貼つてあるぞ。」

「そうね。それも子供が描いた様な簡単な物ばかり。」

家の中は、そこかしこに画用紙に描かれた絵が貼つてあつた。ここが、クラスメイトの家だと知らなければ軽くお化け屋敷にでも来た気分だ。そんな事を思いながら絵を見ていると。

「ん？」

「どうしたの？」

「あ、いや……。」

俺は、白い服の人間と黒い服の人間がぶつかっている絵を見つけた。
そして、その隣には、子供？が4人の影に守られているような絵があつた。

「なんなんだろうな。この絵って。」

「そうね。ちょっと氣味が悪いわ。」

しばらく行くと俺は、足を止めた。何故ならば。

「…………そんな……馬鹿な。」

階段近くに貼つてあった、画用紙に描かれていたのは、黒い服を着た女の子と男の子だった。しかも男の子の服の模様は、あの時俺が着ていた物と同じだった。

「…………星光…………。」

そして、女の子の手には、あの杖があつた。

「どうしたの？」

「…………い…………や…………。」

なんなんだこれは！偶然なのか？それとも……見てた？あの時の事件を。

俺の頭はパンクしそうになる。そして、涙も出できそうだ。

”星光”……わざわざ来るだけで、死にやがてなる。

「捜そり。」

「え？ あ、ちよ……。」

俺は、日野さんを置いて、一階を見て回り、時田さんの部屋が無いことを確認すると直ぐに一階に上がった。
そして。

「何だ！」

「・・・何・・・・何なのよ？」

一階の一一番奥。その扉は、無数の画用紙によって見えないぐらくなっていた。

不気味だ。！」

「どうやら、ここが、鈴音ひやんの部屋みたいね。」

辺りの部屋をチラシクしたついでに日野さんが想ひ思ひ書つた。

「マジかよ。」

扉を見る限り相当病んでいる人の部屋みたいだぞ？少なくとも小4の女の子の部屋とは思えない感じだ。

だが、よく考えれば、ここにいる俺だって、自殺してたし今の時代は普通なのかもしれない。

「かなり個性的な部屋の事で。」

「これは、個性じゃなくて既に異常の領域よ。」

「日野さん。人の個性を否定しちゃ駄目だよ。」

「やつ。じゃあ、一人で行つてらしゃい。」

「いいや、日野さんがどうや。」

「流石にあそこに入るのは勇気が必要だ。俺には無い。」

「か弱い女の子に行かせるつもり?」

「安心してくれ。この時期の子供は女の子の方が強いから。」

筋力的にも強いし精神的にも男の100倍は強い。

「さあ、か弱い男の子のために行つてくれ。」

「いいや、昔からこいつでしょ?」

「レディファースト?」

「女の子は守るべきモノだつて!」

「そんなの知らねえな。」

「アンタね・・・。」

「学年最低ラインギリギリを舐めるなよ!」

「威張るとこ」。

そんな不毛な会話を繰り返してくると、音も無く扉が開いた。

「（ビクー……）。「

「・・・。」

塙田わんが、そこから、じーっと、覗いていた。

「やあ、塙田わん！」わざとよひ。

「うん・・・・。」

「鍵・・・空いてたよ？.」

「うん・・・・。」

不味い。ばれてる。うなれば・・・俺は息を吸い込み

「『金ては』のバカが悪いんだ（のよ）ー。」

田野わんと被つた。ちこ・・・・同じことを・・・なんて、汚いんだ！

「・・・入つて。」

時田わんは、と同時に、奥の部屋の中へと戻つて行った。
「・・・。」

「・・・ハア。」

俺は日野さんの眼力に負け先に部屋の中に入った。

「よひーん。私の部屋に。」

時田さんはそう言つと紅茶の入ったコップを差出して來た。

「ありがとう。」

アレ・・・なんだ?」の違和感・・・。

「・・・ねえ。なんで、この紅茶・・・温度が丁度いいの?」

同じく違和感を感じていた様な日野さんがそう言つた。そうだ。確かに。

台所は、一階だし、なんで人数分の紅茶が・・・。

すると、時田さんは、じーっとこちらを見て来て言つた。

「アナタが、南君?」

「あ、ああそりだけど?」

何なのだろうか?時田さんは、とっても言つてこにくそうに

「じゃあ、アナタが私を救つてくれる超能力者なのね!」

「ああ。つて!ええ!」

こいつ今なんて?なんでこいつが俺の力を?

「初めまして私は時田鈴音。只の未来が分かる未来人です。」

第11話 未来予知（後書き）

日野：へタレ。

星光：未練がましい男・・・（ですが、嬉しいです。）

南：うう・・・仕方ねえだろ？アレは恐怖のレベルが桁違いだつたんだよ。

それに・・・。

闇：イジメられているな。

雷刃：られるね・・・。

作者：あのままで良いでしょう。

闇：そうだな。では！はたして”未来人”とは？

雷刃：次回をお楽しみに！

第12話 未来人と超能力者（前書き）

眠いです・・・投下します・・・。

第1-2話 未来人と超能力者

「未来が見える？」

「うん。だから田野さん達が来ることが分かつてたの。」

出された紅茶を啜りながら時田さんはそんな事を言った。

「未来予知って事？」

田野さんは、怪しい物を見る様な目で時田さんの部屋を見渡しながら言つ。自重しろよ。

俺は、ため息をつきながら、時田さんに聞く。

「どうして、未来人なんだ？」

「え？ 未来が見えるんだから未来人に決まってるよ？」

いや、どちらかと言つと超能力者のカテ「ワリー」に入るんじや・・・。

「でも、『ワリ』が、鈴音ちゃんを救う超能力者って、どう言つ事？」

「イツ扱いかよ。と書つよりなんぞ、こんなに慣れ慣れしいんだ？ 友達か？違つからね！」

「そつそつ。俺にそんな力なんて無いからね？」

「そんなこと無いよ？私の夢の中で助けてくれたもん。」

ああ。確かに変人の類だこの子。・・・人の事言えねえけど。すると、田野さんは、時田さんの前に座つて田線を呑わせた。その姿まるでカウンセラーだ。いや、実際そつするのだろう。

「ねえ、鈴音ちゃん。それは、どんな夢だったの？」

「うん。私ね、昔からよく正夢を見るんだ。楽しい夢もあれば、怖い夢もあったの。中には信じられない様な非常識な夢も見たけど全部本当にしたの。」

「それって、もしかして家中に貼つてる絵の事?」

田野さんの言葉で先程の絵の事を思い出す。確かにアレは、子供の絵だった。きっと忘れない様に描いていたのだね。

「うん。田野さんが信じてないのも分かつてたよ。夢でみたから。」

時田さんは、机の中から一枚の絵を取り出して俺の前にひざつて來た。

「お願ひ。これを見て私を助けて。」

それは、黒い何かに人が食い殺されている絵だった。なんだ?コレ。

「私。今日の夜にこのままだと食べられちゃうの。」

一通り話を聞き終わり、俺と田野さんは帰路についていた。

「・・・『ハ思ひへ。」

「分からん。」

時田さんの話は、確かに滅茶苦茶だ。しかしスジは通つてゐる。そもそもからして、憑依なんぞしている上に超能力者な俺にひとつで、未来予知の存在は信じざるおえない。

「時田さんの事どうするつもり?」

「田嶋さんは?」

「明日学校に話して見るわ。」

「じゃあ、俺も同意見で。」

時田さんの予知では、今日襲われるらしい。もし事実ならば、明日ではもう遅いだらう。

行って見るかな。恐らくこれは原作とは無関係だらう。なんせ”なのは”と書つ言葉がこれまで一度も出てきていないのだから。

「じゃあ、またね。」

「ああ。」

もう一度と御免だ。やつれと真相を掴んで早く平和な日常に戻りたい。

深夜。

11時。俺は、時田さん宅玄関前付近に立っていた。因みに”大嘘憑き”により気配を無かつた事にしてるので、警察の方のお世話になることはない。

「確か。今日中に起きるんだったよな。」

やつづぶやき、時計を見るが、本日終了まであと49分しかない。

「まあ。嘘ならそれでも良いけどわ。」

そう言いながら、暇つぶしに持ってきた本を読んでいたと、前方に人影を発見した。

どうやら、辺りを警戒しながら近づいているらしく、えらいキヨロキヨロしている。怪しい。

「……。」

もし、アレが時田さんの予知の犯人の場合、”食べられる”とは…

・
・
・

止めよひ。理性が持たない。俺は、そつ考え、地鉄の剣を作る。

「……。」

そして、人影と向かい合つ。それは子供だった。

女の子だった。

知り合いだった。

日野さんだった。

「・・・・・」

相変わらずキヨロキヨロとしている田野さん。俺にぶつかると、「ヒイ！」と小さく悲鳴を上げた。

なんか、面白い。

「田野さん？」

「・・・・・」

俺を無視して田野さんは近くの壁に寄りかかった。そして再びキヨロキヨロし始めて時計を見る。

「あ、そうか。」

俺は、”大嘘憑き”を解除し語りかける。

「田野さんー！」

「…………」

突然現れた俺に驚愕する田野さん。

「あああああ、アンタいつの間にー。」

「さっきからいたよ。ぶつかつたじやん。」

「え？ えええーー！」

「田野さん、何用？」

今だ混乱中の田野さんが落ち着くまで5分弱かかつたが、どうやら彼女は持田さんが心配でやって来た様だ。

警察に見つかるリスクを侵し友達のために行動する。流石は委員長 キヤラだ。

「・・・だが、委員長は別にいる。」

「は？」

「いや、気にしないでくれ。」

2人になつたことにより多少暇を潰す事が出来た。 そうして行く内に時間は過ぎ。

「もうすぐ12時か。結局何も起こらなかつたわね。」

「そうですね。後、19秒。」

・ 4 ・ 5 ・ 6 ・ 7

3 ・ 4 ・ 5 ・ 6 ・ 7

「きやああああ！――！」

突然のガラスの粉碎音が響きわたりそれに続いて聞こえる時田さんの悲鳴。

何事だ？

「――」

「――」

俺と日野さんは、すぐに家の中に入った。どうやら鍵はかかつて無かつた様だ。

「時田さん。来るのが分かつてたのみたいね。」

「だらうなー」

階段を駆け上がり、部屋に入ると、そこには。

「・・・み・・・南くん・・・タスケ・・・。」

血まみれの時田さんがいた。そして。

「・・・・・」

普通なら悲鳴でも上げそうな日野さんは、固まっていた。当然だろう。なんせそこには。

「グルルルル・・・・・・」

真っ黒な闇より深い毛並みの巨大な犬がいたからだ。

第12話 未来人と超能力者（後書き）

雷刃：なんか出た！！

星光：何でしようか？アレは？

闇：ふむ。ヒントは章のタイトルにあると見た。

日野：はいはい、”闇”ちゃん。メタ発言は控える。

南：次回は、バトルっぽいな。

星光：作者の技量で大丈夫でしょうか？

作者：が、頑張ります。

日野：それでは！次回で会いましょう！

第1-3話 突撃となりの夜食（前書き）

投下だ！！！

第13話 突撃となりの夜食

訳が分からぬわ。何よこれ？

「グルルルル・・・。」

私はただ、鈴音ちゃんが心配で見に来ただけなのに。なんで部屋に、こんなのが居るのよ。

”食べられる”言葉どつつけない！

「早く警察・・・保健所に！」

「そんな所で対処出来るのかコレ？」

じゃあ、どうしろってのよー…そつとおつとした時

「ガアアアアアー！…！」

「イヤアアアー！…！」

犬の大きな口が開かれ中から鋭い歯が覗いた。不味い食べられる！

「突撃！隣のお夜食！」

その時凄まじい轟音と共に眩しい閃光が迸った。

「ガガガガアアアアアアアアー！…！」

焦げ臭い匂いを放ちながら犬は窓を突き破り落下していった。

何なの？何が起じたの？

「……五百円……へつ……生きてるか？」

「…………つさ。……やつぱり……助けてくれた。……夢……
……。」

「鈴音ちやん？き、救急車！」

「無駄だ。これだけの音が出たのに誰も来ないんだぞ？何か張つて
やがるな。」

南は、そう言って、鈴音ちやんに手をかざした。すると

「え？……ええーーーーーーーー！傷が……服が……治つてゐる！」

いやそれだけじゃない。部屋までもが、まるで何事も無かつたかの
ように元に戻つていた。

何なの？これは？夢？夢でも見てるの？

「さて、時田さん大丈夫か？」

「うん。ありがとう。やっぱり南くんは超能力者だったね。」

「出来れば、使いたくなつかつたけどな。」

南は笑うと窓の外に目をやつた。私もそつと、覗いて見ると先程の
黒犬が未だにウロウロとこちらの様子を伺つていた。

何よあれは、それに何よさつきのは！

「…………」

「ねえ。」

「何だよ？今考えてるんだけども。」

「アンタ何者なのよ。」

「只の超能力者だ。」

そう言つと、面倒臭そうに手の上に光……いや電気を発生させた。
そつか、最初にあの犬を吹き飛ばしたのはこれだったのね。

納得・・・

「出来るか！』

「つを！なんだよ行き成り！』

「そんなチャチャイ能力で納得出来る連つての？』

「チャチャイって……結構凄い力なんだけど……。」

「正直に言いなさい？痛くしないから。』

「何それんの！俺？』

「もつ面倒ね。……やぢやおいつかしらへ

5分後経過

「つまり、全部無かつた事出来る能力つて事？」

「他には？」

「ノーマメント。」

「・・・・・まあいいわ。それより、アレまだ彷徨いてるわよ？」
何とか出来る?」

窓の外には相変わらず黒犬がウロウロしていた。これじゃ外に出られないわ。

「俺より弱ければな。時田さんを頼むぞ。いくら“大嘘憑き”で傷を無かつた事にしても精神的にかなりキツイからな。」

「わかつた。気を付けてね。」

南は、頷くと窓から・・・ではなく普通にドアから出て行った。

「微妙・・・。」

「頑張って・・・。南くん。」

「グルルルル・・・。」

「ちつ、俺の今月の小遣いの25%を喰らってまだ元気なのかよ。」

先程のとつとの攻撃により俺の財政は行き成りピンチに陥った。でも元氣です。

ピンピンしておいます。

泣きたい！

「ガアー！」

「おわーーっと。」

とつさに紫電を辺りに走らせ犬を威嚇する。これで近付けまい。

「所詮は獣！さあ、逃げ回るが良い。」

「ガアアアアア！」

しかし、犬は紫電など気にした風もなく襲いかかってきた。最近の

獣は度胸があるようだ。

「何の！地鉄の盾！」

ぶつかる、犬ととっても薄い盾。

「つめりたー、アリヤが、町中だつた……」

川原や砂場などなら砂鉄も豊富なのだが、ここは整備された町中である。悲しい事に砂鉄は少ない。

なんと云つ悲劇！町の発展がもたらした悲劇の結果だった。

「グラアアアア！！！」

「レポート用紙」

肩の肉が抉れ、血が吹き出る。しかも無茶苦茶痛いと来た、気分は最悪だ。

「畜生！痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！」

肩を抑え何か血を止めようとすると、がるがる止まらぬ血が溢れる。俺は、あまりの痛みの地面を「ロロロ」と転がって痛みをまぎらすしかなかつた。その時。

「何やつてんのー。わざの奴やればこでしょうがー。」

田野さんの声が真上から聞こえてきた。　・　・　さつきの奴？

「ああ！これが！」

俺は、”大嘘憑き”で傷を無かつた事にした。ナイスだ！日野さん。俺より能力を分かつていてる。

「グルル・・・・。」

「へへ・・・。さつきは、よくもやりやがったな。かく　　。」

「ガアアアアア！！」

「はや！でも同じ手は食つかよ！”反射”！」

俺は、”反射”を使い犬を弾いた。犬は、コンクリートの壁に激突し赤黒い血を吐き出す。動物愛護団体が見たら訴えられかねない光景だった。けれども俺に手心を加える義理はねえ。

「こいつで、終いだ！」

俺は、犬に駆け寄り頭を抑える。そして繰り出すは、ある意味殺人技の一つ。

「日野さんー目瞑つてろよ！”ベクトル”逆流！」

犬の体内を流れるあらゆる液体を逆流させる。どうなるか？

「ボバババアア！－！－！－！」

正解は、犬の頭が破裂するでした。グロ！

自分でやつてなんですが、無茶苦茶グロイ。しばら肉はこのだらう。

「でもまあ・・・アレ?」

見ると犬の姿は薄くなっていた。なんだコレ?

「・・・」

「犬はどうなったの!って、何よコレ?」

どうやら、これは、俺の目がおかしくなった訳じゃないらしい。そう考える、と同時に犬は、闇の中へと消えて行つた。
氣のせいか、薄らと辺りに冷氣が漂つている様な氣がした。

「・・・痛つ!何?」

とある所で人影がそんな事を言つて自分の指を舐めていた。

「”ダークネス・ハウンド”がやられた?ウソ!」

人影はすとんきょくつな声を上げ驚いていた。

「何で?なんで?(@_@)?まさか、転生者に氣づかれた?」

声の主は、本当に訳の解からないと言つた感じに頭を抱えた。

「・・・それは、無いか。だってアイツ等、原作キャラに付きつきりだしね。でもそつだとしたら・・・。」

人影は、一つの水晶玉を取り出した。そして・・・

「あーダニダ～ 結界が邪魔だつたらこんな事なら貼るんじゃ無かつたよ～。」

水晶玉の中は砂嵐の様に濁っていた。殆ど自業自得である。

「・・・・・アリ?」

しかし、結界が解除すると2人の男女が映った。恐らくこの内の片方もしくは両方が”ダークネス・ハウンド”を片付けたんだろう。

「・・・・ムウ・・・。」

人影は一つ唸ると、ポンと手を打つた。

「こには、セオリー通り女の子を当たつてみるかね～。」

当たりなら上等。外れでも上等。どちらにしても・・・。

「アタシの殺人を邪魔する奴は生かしておけないしね そうでしょう? ”マッド・ブッチャー”。」

人影の背後にまた別の人影が現れる。それは、答える様に手に持つていた肉厚の肉切り包丁を掲げ呻き声の様な咆哮をあげた。この場所には、まるで冬の様な冷気が漂っていた。

第1-3話 突撃となりの夜食（後書き）

星光：・・・日野さん。貴女は一夜に何をしたのですか？行き成り震え始めました
けれど？
南：（ブルブル・・・・・・）
日野：気にしない 気にしない
雷刃：うわ～黒い・・・。
闇：うむ。闇より深いな。
日野：何か？
闇・雷：いえ。何も！
日野：そう・・・それにしても、なんか最後ヤバそうのがいたわね。
雷刃：そうだね。敵みたいだつたけど・・・。
闇：何気ナギサを狙う様な事も言つておつたし・・・用心はすることだな。
日野：そうね・・・ここしか出られないなんて嫌だもんね。
星・闇・雷：！
南：ん？どうした！皆！日野さん？
日野：あ、じゃー皆さん次回で！
南：3人共？デイバイスを下ろして・・・って、日野さん！な
んで逃げるんだ
！責任を・・・あつ・・・・・・・・・・。

第14話 夜の課外授業（前書き）

いつもより長いです。

第14話 夜の課外授業

「どうして……。」

彼女は、悲しそうに俺を見ている。

「違う！アレは……。」

俺は、必死に首を振り否定するが、彼女は

「どうして、私を使ったの？アナタの25%だったのに……。」

「違うんだ！聞いてくれアレは！」

「サヨウナラ。私達はもう出会えない。」

そう言ひついと、彼女は深い闇の中へと消えた。

「待ってくれ！！カムバック！」

「五月蠅いわ！」

「ブホ！」

俺が昨日永久に失った、五百円を追つていると急に顔面に衝撃が走つた。痛い。

「アガガ・・・何をするんだ！日野さん！」

「アンタよく、そんな大声で寝言が言えるわね！五月蠅くて集中出来ないでしようが！」

場所は時田さんの家2階の部屋。あれから、しばらく俺と日野さんは交代で外を見張っていた。また、あの犬が襲つてくるかも知れないとからだ。警戒するに越した事はない。

「それにして何だつたのかしらねアレ。」

「知らない。なんで、あんな事になつたんだろうね？」

あの犬が消えてから気温が急に下がつた様な寒気が走り一戸家の中へと避難した。その後再び外に出ると、俺との戦いの跡が、まるで何も無かつた様に消えていたのだ。砕けたコンクリートの破片や紫電の焦げ跡すら無かつた。

「まるで、アンタの力ね。アンタ以外にそんな事出来る奴なんていふの？」

「う・・・とな・・・。」

確かにアレは”大嘘憑き”を使った様な感じになつていた。そういえば、ヤマダさんもこの世界のには、他にも転生者が数人いるとか言つてたしな。案外この力は俺だけの物じや無いのかも知れない。

「多分、結構いるんじゃねえかな？」

「は？」

「いや、俺なんて、結構弱い方だし。」

転生者の中では、恐らく最弱クラスだろう。自己防衛第一だし。

「アンタで、弱い方なの！」

田野さんの驚き声が耳に刺さる。申し訳ない。

「ああ。俺なんて、電撃を操つたり、ベクトルを逆転させたり、水中でも生活出来る位の力しかないからな。」

「・・・十分凄いんだけど・・・。何なの？超能力者って。」

知らない。

「じゃあ、俺寝るわ。お休み。」

「待ちなさいー。」

「何？もう朝まで3時間切ったんだけど？実質俺の睡眠時間が20分に成ってるんだけど？」

「そんな話を聞かせて、私に一人で見張れと？」

「うん。大丈夫死んでもパーティが全部あれば何とかなるから。」

”大嘘憑き”ならば、多少の欠損位軽いだろ？精神的には保証しかねるが。

「田野さんの鋼の精神を信じじる。だから田野さんも俺を信じてくれ。

」

「…………歯あ食一縛れ！」

本日2度目の衝撃が顔面に走った。超痛い。

「うわああ。

「血で部屋を汚しちゃ駄目よ。

鬼だ……鬼がいるよ。……アレ？

「ねえ、もしかして田野さん……怖い

！？」

本日3度目の衝撃が全身を走った。その時本棚が碎け散った。

”不慮の事故”である。反射的に使わなければ俺の体はあんなつていただろ？。恐い。

「おまよづ。

「あ、鈴音ちやん、おまよづ…？」

「うん。・・・」めんね。見張りなんかせぢやつて・・・。」

「良いのよ～その位。」

女性陣2人の会話を聞きながら俺は、何とか意識を保ち辺りに警戒を張り巡らせていた。恐らく大丈夫だろうが一応の警戒は必要である。

「おはよっ。時田さん。」

「うさ。おはよっ。昨日はあいがと。」

「良いって。アンナの。」

その後もつとおつかないのに襲われたし。俺が、笑つて話すと時田さんは表情を暗くした。

「どうしたの？」

日野さんが心配そうに近寄ると、時田さんは紙に何かを書き始めた。
・・・まさか。

「・・・。」

「・・・今日ね・・・こんな夢を見たの。」

絵には、恐らく学校だろ？か。空には満月が昇つており、女の子が
巨大な人（？）によつて、ズタズタされている絵だった。
正直言つて、見ていて気持ち良い絵ではない。

「「」の女の子って……時田さん？」

しかし、時田さんはフルフルと首を振った。そして、とある人物を指差した。それは・・・

「わ、私? なんで?」

「・・・分らないの。本当に分からないの。」

「「」の夢は、大体何日後に本當になるんだ?」

「早くて、1日遅くても3~5日後だよ。」

「月から見て、満月の夜か・・・アレ?」

「どうしたの?」

「おかしいぞ? 満月つて昨日じゃないか?」

昨日の夜空の事は、結構覚えていた。しかし、それに口野さんは反論した。

「何言つてんの? 満月は10日前でしきうが。ちやんとカレンダーに載つてるでしきう?」

「は? 10日前?」

どうなつてゐるんだ? と、言つ事は次の満月まで20日以上もあることにならないか? いやそれ以前に確かに昨日の月は満月だったんだけどな。

「鈴音ちゃん。本当に空には満月が昇つてたの？」

「……うん。とっても寒くて空気が澄んでたからよく覚えてるよ。

」

「と、いつ事は、後ろ口は安全といつて訳ね。取り合はずは一安心か。」

日野さんはいつと時田さんを拘束し始めた。なんだ？

「わい。学校に行きましょうか？ 時田さん？」

「え、あの……。」

「南一カバンに必要な物を詰め込みなさい。学校に連行するわよ。」

「ええー。」

流石は、日野さん凄まじい行動力だ。俺には真似できない。

「で、でも……。」

「安心しない。鈴音ちゃんの席は私の前だから、何かあつたら助けてあげるわ。ねー南？」

「何故、俺が……。」

「ね？」

「サーイエッサー。」

俺の平和な日常が音を立てて崩れ逝く音がした。

取り合はず、俺達は自分のカバンを取りに一回家へと戻る事になつた。もちろん時田さんは捕獲中である。

「ふーん。ボロいアパートね。」

「失礼な！アンティークな物件と呼べ！」

築25年のアパートを呼ぶときはそつ呼ませ。因みに風呂・トイレは、別である。

「じゃあ、とつて来るな。」

「400秒以内にね。」

「はいはー。」

取り合はずそつ言つて部屋に入りカバンを掴む。そして、冷蔵庫の中から惣菜パンを取り出し昼飯を確保。水筒に茶を注ぎ、制服を着て鍵を閉める。その間実に

「635秒！235秒も遅いわよー。」

「イツ。カウントしてやがった。」

「悪いな。じゃあ次行くか。」

クック・・・復讐してやるよ。

「ううう。

俺の家から徒歩30分の所にそれはあった。

「へ？」

「なに・・・うう・・・。

そこにあつたのは、高層マンションだった。まあ、それなら別に良いのだが。

「”日野”家専用マンション?」

と自動ドアを潜りポストを見るとこう書いてあつた。

「うん。だいたい20階から上が私の部屋ね。下は、その他の人達の部屋や仕事場。」

「か・・・金持ちか・・・。俺らの敵だったのか！」

「まあね！・・・じゃあ行つて来るわ。1200秒以内には帰つて来るから。朝食は、もう電話で頼んでるから直ぐに来るわ。」

田野さんはそのまま、エレベーターに乗り、上へと上がり、上へと行った。

「失礼致します。」

その後直ぐに朝食らしきモノが乗つて、カートと椅子とテーブルが運ばれて来た。最早俺らは啞然とするしかなく大人しく椅子に座つた。

「・・・凄いね。」

「予言には出なかつたのか？」

「うん。私の予知はね。大きな出来事しか写さないの。」

これを小さな出来事と申されますか。時田さんは、ベーコンエッグをフォークで食べながら言つた。この人結構度胸が据わつてゐる。俺なんてドキドキして手が出せないのに。

「それにしても、まさか、日野さんが・・・でもさ、”日野”なんて言う有名な会社なんてこの町にあつたか？」

少なくとも俺には、見た記憶がない。”バーニングス”だったら、何回か見たことがあるが。

「さつと、別の町で有名なんぢやないかな？日野さんのためだけにここを買つてるとか。」

「なるほどな。」

まあ、”バーニングス”家の令嬢や”月村”家の令嬢が普通の私立の小学校に通っている（しかもバスで）時点でこの世界は、色々おかしいからな。そのくらい何ともないか。

「まあ、良いやアイツが帰つてくる前に平らげるか。」

そう言つと、俺はフォークを手に取つた。

「お帰りなさいませ。お嬢様。」

私の部屋がある階ににしつくと、一人の老人がうやうやしく頭を下げていた。

「相変わらず、準備が良いわね。ジイ。」

「ハイ。お嬢様の事ならば、毎日の体重の変化から下着の好みまで熟知しておりますゆえ。」

「・・・いつもながら一言多いわよ。」

私はジイが用意してくれていた、学校のカバンを手に取り中身を確認する。そうしなくては、たまにどんなモノが紛れ込んでいる事があるからだ。

「・・・よし。異常無し。」

「ホツホツホ。ジイが信用出来ませんかな？」

「3割方ね。・・・他に何か無かつた?」

「はい。昨夜遅くに、お父様から、お嬢様の保有している株式を譲つてほしいとの連絡が御座いました。」

「・・・・・・・・・」

私は、やつと制服を着るために部屋に入った。

「どうなさいます?一応お嬢様は眠っている事にしておきましたが・・・。」

「大方、”バニングス”からの圧力でしょう。」

「そのよつで。」

鏡の前で服のシワを確認しながら、顔をしかめる。

「分かっているのかしら?今渡したら、待っているのは破滅のみよ?」

「そうでしょうね。ですが、相手は”バニングス”家そう簡単には行きますまい。」

ジイの声はいつもと同じだが、状態の危うさはヒシヒシと伝わって来る。

「何とかするわよ。後8年・・・いや5年耐えたら。それまで、絶対に渡しちゃダメよ?」

「分かっておりますとも。ナギサお嬢様。いや、”バーニングス家”分家”日野家”の跡取り様。」

「どうしたの？えらく説明口調じやないの。」

「いいえ、分かりやすくしましたまでです。」

時々ジイの事が分らない事があるんだけども・・・まあ良いか。

「とにかく。本家になんか絶対に負けないんだから。”日野”をつぶさせるもんですか。」

その後気付けば1200秒を軽くオーバーしており、南に怒られながら学校に向かつた。結果としては遅刻手前であった。

ポツカポツカの日差しの差し込む窓際。うん最高の寝る場所だ。

「NNNNN。」

「南！起きんか！」

なんだらうか？今頭の上で何かが音を鳴らしたけど？気になつて目を開けると甲田先生が俺の頭に手を乗せていた。いや、恐らくチヨップでもしたのだろう。だがご生憎さま。”不慮の事故”によりダメージ〇である。

「・・・なんですか？今結構いい感じで現実と言つ怪物から決別出来ていたのに・・・。」

「お前な・・・学校は寝る場所か？」

「ハイ。自由時間や自習中は大概寝てますよー。」

「・・・はあ・・・南、放課後お前の為に先生方が特別課外授業を儲けて下さった。有り難く思え。」

「そんな・・・横暴です！先生！寝る子は育つって言ひじやないですか！」

先生オールスターだと！なんて地獄だよ！それは。ていうよりなんで行き成り？

「それはな・・・今日職員会議で決まったからだ。そんな訳で、寝ても良いぞ？多分夜までかかるからな。」

「夜まで課外授業だと！冗談じゃ・・・。」

アレ・・・・・？なんだ？この違和感？

「今日のMILテ스트で8割取れなかつたら・・・。」

先生の言葉も聞き流し考える。

”大きな黒犬”

”満月”

”冷氣”

”何事も無かつた様な現場”

そして、”夜の課外授業”

・・・・・・・・・・・まさか・・・・・・・・・・・敵は、転生者
?しかもアノ能力を貰つてゐる。

だとすると・・・まともにぶつかる訳には、行かない。

”月”はあてにならない。

”予知”は、大きな出来事しか予知しない。

だとすると・・・。

「・・・ヤバイ。多分今日だ。」

この日俺は、初めてテストで満点を取った。

第14話 夜の課外授業（後書き）

南：日野さんが・・・敵だった・・・。

日野：どうして、そうなるのよ！

時田：・・・でも、ビックリだよ。日野さんって、あの”バーニングス”の

分家だつたんだね。

日野：・・・まあね。でも本家の令嬢が同じ学校にいるからあんまり知られて

いないけど・・・。

闇：何か、色々大変そうだな。相談なら乗るぞ？

日野：ありがとね。でも、まだ良いわ。

星光：さて、標的も時間も分かつた訳ですし、次回は、またバトルですか？

作者：いいえ、少し短めの話を入れたいと思います。・・・本当に短いです。

雷刃：うわ～不安～。

時田：・・・それでは、また次回で。

第15話 一夜のイジメ撃退法（前書き）

短い話です。

第15話 一夜のイジメ撃退法

い、今俺の目の前で起こっている事を説明するぜ。

俺は、いつも通り、ミニテストの採点をしていたんだ。そして気がついた。

これは、6年生用の問題だと言つ事に。

当然、誰も答えられる訳がない。なんたつて、受験生用のミニテストだからだ。

恐らく、1組のアリサ・バーニングスでも不可能だろう。

で、だ。

俺は、あの優しい篠山先生でもサジを投げた、出来の悪い生徒と噂をされ。

何故、聖杯小学校の編入試験をパス出来たのか、最近7不思議にも追加されつつある、南一夜の答案を採点したんだ。

結果は、

・ · ·

満点だった。

最初は、夢だと思った。そういうふう？成績は常に低空飛行。授業態度は最悪のあの南が、満点だと？

取り合はず顔を洗つてやり直すが、そこには全問正解の丸だらけ。クソ、これで、37回顔を洗つたんだぞ？夢なら覚めろ！覚めてくれ！

「あ”あ”あ”～！～！」

「どうしたのかしら？甲田先生。もう30回以上も顔を洗つてるけど？」

「きっと、色々ストレスが溜まってるのよ。そつと、しどきましょ
う?」

俺が、この事実を認めるまで、後5時間。

何か、俺の知らない所で、未知の戦いが繰り広げられている用な気がするが、無視しこうか。時は昼頃。
俺は、”高町なのは”出現ポイントである屋上を避け体育館裏で朝の惣菜パンをほづばつていた。
最近タマゴサンドにはまっています。

「こ」のマヨネーズがまた・・・。」

体育館裏と言えば、学校の不良の3大溜まり場の一つに数えられるが、幸いこの学校で、不良と言う存在は、余り見たことがない。なので、ここはジメジメするだけの場所であり、光の道を歩む主人公勢は勿論の事、一般生徒も滅多に訪れない俺のいこいの場と化しているのである。

「アムアム。あー美味かった。さて、昼はどう時間を潰すかね。」

1・教室に帰り寝る

うん、良い案だが、確実に日野さんに絡まれるからバス。

2・”高町なのは”及び転生者の調査

俺は、自爆するほど、アホじゃない。

3・学校の施設を見学する

4段前を参照してくれ。

4・ここで、時間を潰す

これしか無いか。

そんな訳で、俺は余り湿つてないコンクリートの上に横になつた。
もし濡れても”大嘘憑き”があるから大丈夫だ。
小鳥の囀りや微かに届く太陽の光が眠気を誘う。このまま寝るのも
悪く無いのかも知れない。

「ファアアアつと。」

一つ大欠伸をして、体を伸ばすと、誰かが、やつて来る足音がした。

「ちい、折角のリラックスタイムを・・・。」

一瞬、気配を無かつた事にしようかと思ったが、学校で無闇に力を
使う訳にもいかない。何が原因で厄介フラグが立つか分らないから
だ。

やるなら、始業前に限る。奴らは授業に行くから。

そう思い、部室塔の影に隠れる。『聖杯ファイト!』と書かれた旗
を横目で見ながら、訪れた者の顔を見る。

数は3人。女2人男1人、歳は、俺と同じだ。何故わかるつて?2
人は隣(3組)の奴らだし、1人は俺のクラスメートだからだ。つ
と言つより時田さんだったからだ。

「何しこきたんだ? もしかして、もつ友達になつたとか?」

流石は、小学生…とい、思つたのだが。

「キヤ・・・。」

じつせり、違う様だ。男の方が時田さんを突き飛ばしたからだ。

「キモ田なんぞ、お前学校に来てんだよ。お前がいるだけで、学校の品格が下がるだらうが!」

「わうわう 死んじやつた方が良いよ?」

「・・・・・・・・・・。」

そう言えど、時田さんイジメが原因で学校に来なくなつてたんだつけ? と、言つ事はアイツ等がその一因なのか?

と、言つて口野さんはどうした?

「全く、田野つて奴になんて言われたのか知らないけど、お前なんて、只のグズなんだから分かれよ。」

「アハハ~ そうだね。みーんなそう思つてるよ? 知らなかつた?」

さて、まあ、それは、置いて置くとして、どうじよつか?

「まあ、良いや一度良いし。これ以上つきまとわれるのも嫌だしな。

」

と、言つて俺は。

「失礼。」

介入することにした。

「ん？誰かと思えば、2組の暗い君じゃないか。そいつ継ぐグズが何の用だ？」

「あ、友達にしたくないランキング上位の人だ！何？正義の味方取り？ウケんるんですけど。」

俺、そう思われてたんだ？へえ～知らない事が多かつたんだな。案外。と言つた、そのランキング、誰が集計してんの？

「一夜・・・君・・・。」

時田さんが、暗い表情で俺を見ている。俺は、軽く笑うと元気を出すように言った。

「安心しろ。田野さんの約束は、守る。」

「ハア？何言つてんの？バカじやね？」

「ヴァイ」

俺は、振り向かざまにチョキでヴァザ男の目にフレンチキッスをプレゼント。

「ギャアアーー！」

「 ヴザ男絶叫。 ヴザ・・・・。 」

「 ちょ・・・・大丈・・・・。 」

続いて、 素敵（笑）な彼女にも同様のプレゼント。

「 キヤアアー！ー！」

眼を押さえて転げ回る2人が面白い事。 アツハハハーー！

「 ついでにもう一つ 」

視力を無かつた事にしてあげましょ。 イツツ” 大嘘憑き” ！

「 め、 眼が見えないよ。 」

「 い、 嫌あーーーー。 」

「 大丈夫ーきつとこの先も上手くやつて、 行けるぞ。 ー」

「 昼休み終了まで、 そのままでいてもらおうか？

「俺の仲間に次、 手を出したら、 殺すから？いや、 半殺しだから、 注意せよー。」

今だに泣きじゃくる2人に背を向け時田さんの手を引いて体育館裏から脱出する。

「 ・・・ あの人達大丈夫なの？ 」

時田さんがオズオズと聞いてくる。まあ、なんと優しい。

「心配無用。後遺症すら残らんよ。所で、なんで、1人? 日野さんは?」

「うん・・・パンを買いに行つてくれて・・・。」

ああ、納得。そう言えば、朝の拉致の時、弁当を作らなかつたんだつた。・・・日野さん・・・なんて、バカな事を・・・。

「時田さん。」

「・・・何?」

「学校に来なかつた方が良かつた?」

「・・・・・うん。」

「・・・・・。」

「でもね。・・・楽しい。」

「は?」

意味が分からぬが? 因みに俺のアナザーマインドは、学校=地獄と直つ認識なので、更に解からない。

「・・・これからも守つてくれる?」

だが、僅かに笑うこの表情は、解る。そして、このセリフの真意も。つまり、条件付きか。それなら。

「血口防衛程度にならね。」

「こつ答えるのがベストだろう。」

第15話 一夜のイジメ撃退法（後書き）

闇：ふむ。どんな所にもいるものだな。

星光：人とは、そんなモノですよ。

日野：でもさ、なんで助けたの？力を使つたらバレるかもじやなかつたけ？

南：いやーあまりにも、”南一夜”だった時の記憶が反応したもんで・・・。

日野：ナニソレ？・・・まあ、良いか。じゃあ、次で会いましょう。

第1-6話 下校時間の対策（前書き）

短い話
続けて投下。

第16話 下校時間の対策

「だから、悪かつたって言つてるでしょう？」

「・・・へえー。」

「・・・私は、もう気にしてないよ？」

下校時間。そして、下校風景。大勢の生徒が帰りPTAのオジサンやオバサンが旗を持つて笑顔で声をかけてくれる、いつもの風景を3人並んで歩いていた。まさか、俺が別の誰かと並んで帰るとは、夢にも思つてなかつた。

しかも、女の子となんて、絶対になかつた。これが、アニメの中だけで実現していると言つ伝説のシチュエーションか。まあ、嬉しくはないけどさ。

「がつ！」

拳が飛んできた。なんで！

「むかついたから。かつ！となつてつい。」

「そんな、少年犯罪的動機で殴られたの！」

「・・・大丈夫？」

時田さんに貰つたティッシュで、鼻を抑える。今度から”不慮の事故”を常時発動状態にしておこうか？

そんな、殺意を表していると、分かれ道がやって来た。

「じゃ、私ここちだから。また、明日ねー南へ鈴音ちゃんは、縛つてでも連れてきなさいよー。」

「俺が？」

人に見られたら、大問題なんですか？」

「大丈夫よ～多分。罪はアンタがかぶってくれるから。」

「何も大丈夫な要素が無いんだけど？」

「じゃー。」

シユタツと手を上げると、田嶋さんは、マンションの方角へ走つて行つた。・・・さて。

「時田さん？」

「・・・うん」

俺は、時田さんから、一枚の紙を受け取つた。それには、朝見た絵と同じモノが描かれていた。

「やっぱ、そうか。これ以外は？」

「・・・『めんなさい』。分からなかつた。」

時田さんは申し訳なさそうに頭を下げるが、これだけあれば十分である。

「ありがとう。これで、確信が得られた。」

「……でも、どうして？」

「それは、秘密と言つ事です。まあ、一つ確かなのは

「……日野さんが危ないって事？」

「ああ。しかも今夜だ。」

俺は、もう一度絵を見る。その中で、日野さんは赤い肉塊と化していた。こうなるのに俺の予測だと5分もかかるないだろう。あの力ならば、尚更だ。しかも、あの力は、俺にとっては天敵と言つても良いだろう。

「まだ、転生者共と戦つた方がマシだっただろうな。」

敵が異能だったら、右手で打ち消せる。チートなら”反射”や”不慮の事故”で対応出来る。だが、俺の予想が正しかったら。

相手が悪夢なら？

「勝てるのかね？俺の力で？」

なんで、こんな厄介な事に首を突っ込んだのかね？俺も。

「・・・絶対に生きて帰つて来てね。」

そう言つてくれる、時田さんの言葉が重かった。その後、時田さんを家まで送り一人アパートへと戻る。

時間は、多少ある。取り合はず、寝といふか、夜は長くなつそうだから。

第16話 下校時間の対策（後書き）

雷刃：みじかっ！

作者：だから、短いって言つたでしょ？

星光：ならば、続けて書けば良かったのでは？

作者：前の話は、時田さんの話だつたので・・・。

闇：成る程な。新キャラを田立させたかつたのだな？

作者：・・・。

日野：所でさ、アンタ、鈴音ちゃんに何を吹き込んだのよ？なんか確信を得たみた

いだつたし。

南：直ぐに分かると思つ。ヒント・・・時間。

雷刃：？？？・・・まあ良いか。じゃあ、今日はこの辺で！

第17話 グレーフヤードヒューリー（前編）

投下しますーーーーー！

第17話 グレーフヤードによりんか！

「ん、ん、ん、ブハー！ ああ、やつぱ風呂上がりは、牛乳よね。」

「ホホホ。左様でござりますか。ですが、まだ就寝の時間は早いですぞ？」

「分かつてゐるわよ。ジイ、宿題の準備をして頂戴。」

「ハイ。では、勉強部屋にて、用意させて頂きます。」

ジイは、そう言つて風呂場を出て行つた。あのジジイいつか解雇してやる。そう心に誓うと私は身体に巻いていたタオルを取つて、服をきた。そして、メイドに夜食はいいと伝え勉強部屋のある階へと移動する。

「ハア。」

「お嬢様。シユレッターです。」

「ジイ。」苦勞様。でもいいわ一応田を通すか。」

「左様でござりますか。」

私はそつと、ジイと共にエレベーターへと乗り込み手紙を開く。内容は、まあ、予想通りだつた。

「また、”バーニングス”の事ですか？」

「ええ。私を養子に取りたいそつよ。大事な娘の影武者にでもするつもりなのかしら？」

「でしような。または、下手な事をする前の人質か・・・どちらにしろ信用なりません。」

「全く。いつまで、家に2年前の誘拐事件の犯人疑惑が付き纏うのかしらね？」

「まあ。あの”バーニングス”と”月村”的ご令嬢様が2人揃って誘拐されましたからね。内部犯疑いが強いのでしきつ。」

ジイの言葉に私はウンザリすると、勉強部屋の階へと到着した。

「はあ、じゃあ、今日の宿題を終わらせて来るわ。」

「家庭教師の宿題もお忘れなく。」

「分かつてる。ジイも迷惑な電話やメールの処理をお願いね。」

「ハイ。では、お休みなさいませ。」

恐らくまた、2時間後辺りに背後から現れるのだろう。

「さて、始めますか！」

腕をまくると私は、机に向かった。

一時間後。

「ふむ・・・サトルは、きっとハシコが憎かつたのね。きっと、この後惨劇が起るわ。」

国語の問題をとき終わり、一息付くと、私は、机に突っ伏した。もう今日は動きたくない。時計を見ると、11時を刺していた。予定より少し遅く終わつたらいい。

「ファアアア～ねむ・・・。」

静かな室内を歩き近くの電話を取る。

「・・・もしもし、トメさん？ 部屋に毛布持つてくれる？ なんか寒いわ。」

何故か、今日はとっても冷えるわね。もうすぐ夏のはずなのに・・・。息も白くなつてゐし。

そう、思つてみると、違和感を覚えた。

「もしもし～トメさん？ 聞いたるへトメさん～。」

いへり、呼びかけてもトメさんの返事は、帰つて来なかつた。

「故障？」

いや、それは無い。ここメンテナンスは週1でやつてもらつてゐる。どうなつてゐるの？

「ジイ！いないの？」

呼べばいつでもやつて来るジイすら来ない。私は、怖くなつて、部屋を出た。すると、

「なに・・・・。」

田の前には、学校にグラウンドが広がつていた。・・・確か、勉強部屋はマンションの23階だつたはず・・・。

「今晚わ～。」

そんな、声がしたので上を向くと、一人の子供が、笑つて木の枝に腰掛けっていた。そして、私は見た。

「なんで・・・どうして？」

冷たい空にはどつとも透き通つた星々と輝く黄金色の月が浮かんでいた。

月は、少しも欠けていない見事な満月だつた。

そんな、私を見て子供は笑う。両手を広げ楽しそうに言つ。

「よつこー墓地へ！グレーブヤードへ！アタシは、ここ管理人兼葬儀人。さて、お前もここで、人生を終了しましょ～？」

すると、どれと同時に暗闇から、昨日の黒犬が2匹も現れた。

「ヒイー！」

私は、悲鳴を上げると、学校の中に逃げ込んだ。何なの？一体何だつて言ひのよー。

「逃げた？」

少女は、そう言つて、首をかしげると直ぐに納得した顔になつた。

「つて、事は、もう一人の方だったか。・・・まあ、良いや。アタシの殺しの邪魔をしたのは変わりないしね。」

そう言つて、残酷な表情を作つた。さて、今回の獲物ちゃんは何分もつかな？

そう小ちへ啄くと楽しそうに女の後を追つた。

第17話 グレーブヤードによりしやー（後書き）

闇　：敵が出てきたな。しかも、厄介そうなのが。

雷刃　：で？ アイツの力って結局何なの？

？？　：アタシの力は、”ナイトクラス”って言つ小説の力よ。

作者　：今までのヒントが分かり辛くて、ごめんなさい。

南　：悪夢を操る力・・・果たして田野さん大丈夫だらうか？

日野　：・・・・・・どう言う意味よそれ？

南　：では、次回で。

第18話 超能力者推参（前書き）

遂に主人公推参？

投下します。

第18話 超能力者推参

「そろそろか。」

俺は、日野さんのマンションの前で、その時を待っていた。
時田さん予言が正しければ、これから三分以内に何かが起ころう。

「・・・」

時計を見ながらマンションを見上げると、心無しか肌寒くなつてき
た。

「来た！」

俺は、全力で走りマンションへと突撃した。

「ハアハア・・・・・・もう嫌だ。帰りたいよ。」

私は、教室の中の机の下に隠れてそう呟いた。そして

「ソレは向處なのよ。」

この机の大きさは、どう考へても小学生のサイズじゃないのだ。つまり、ココは聖杯小学校じやない。
いや、それ以前に現実かどうかも怪しい。なんで、今日が満月なの

よー

「「んなことなら、鈴音ちゃんも南も家に泊まつてもりつてれば良かったわ。」

きっと、南だつたら、いち早く氣が付くに違いない。でも、所詮後の祭りなのだ。

ここには、自分の味方はいない。いるのは大きな黒犬と変な子供だけだ。

「いいや、きっと大丈夫よ。冷静になれ私！鈴音ちゃんの絵を思い出せ！」

あの絵には、満月の夜にハツ裂きにされる私が描いてあつた。でも、その隣には大きな人影が、描いてあつたのだ。
あの子供も犬もそれには該当しないはずである。つまり、この場はなんとかなるかもしれない！そうよ！なんとかなる！

「グルルルル・・・・・・」

すると、私の教室に黒犬がゆつくりと入つてきた。私は息を潜める。鼻の良い犬にどれだけ使えるか解からぬけれど・・・。

「・・・・。」

「グルル・・・・。」

「・・・・。」

「グルルル・・・・。」

頼むから、そのまま・・・・・。

「・・・・」

「グルル・・・。」

私の祈りが通じたのか、黒犬の足音が遠ざかっていく。助かった・・・。

「見つけた～！」

助からなかつた。行き成り子供が「ひきをしやがんで見ていたのだ。何？」「レなんてホラー？」

「ああああああ～！」

「アハハハ～待つてよ～！」

子どもを突き飛ばし、また走る。

「アハハハ～待て！～」

しかしこどもは、まるで私の居場所が分かつていてる様に先回りしては、追いかけて来るのだ。

そう。まるで、私の考えが詠めるのか、それとも瞬間移動でもしている様に。

「なんなのよ～あの子～！」

そう叫びながら、走っていると前方からあの黒犬がゆっくりと歩いてきた。私は、直ぐに方向転換するが。

「グルル・・・。」

「つてー」しちも。なら。」

また、別の方向を見るが、

「グルルル・・・。」

「ガルル・・・。」

どうやら、全方位を囲まれていたらしい。詰んだ！
このか弱い美少女小学生に何とか出来る状況じゃない。

「アハハ～もう終わり？残念だな～もひ終わっけやつなんて。」

「嫌・・・何なの・・・アンタ・・・」

でも、子供は、そんなことを話す必要が無いとばかりに獰猛な笑みを浮かべた。

「グレーブヤード。かつて、雪の女王が行つた、殺し合いの舞台。
一年をとうして、まるで冬の様な気温。そして、この場所で最も恐ろしいのは、その世界の事柄は全て作り出した者が支配出来る事だ。」

その代わりに、今この場で最も聞きたい声が聞こえてきた。

「

「南一・どこへ・どこにいるの？」

辺りを見渡せど姿が見えない。

「「」こっちだ。こっち！」

と、声は、私の下から聞こえてきた。・・・下?

「おーい！」

見ると、手の平サイズの南が手を振っていた。え?何コレ?

「ちっ、ヤッパ、こっちじゃこのサイズが限界か。」

「アレー誰かと思えば本物じゃんー」こにどりやつて来たの?

子供が、黒犬近付きながら南に聞いてくる。それに対し南は、笑う。

「なーに・・・俺は、南一夜。只の超能力者だよ。」

そして、何故か子供も笑った。

「アハハ～そなんだ。アタシは余世夢。只の殺人鬼伴超能力者だ
よ。」

何?こいつも超能力者なの?しかも殺人鬼?

「落ち着け。こんな奴、現実じや敵じやない。」

「現実？どうこう」と？」

南が、何かを言おうとした時。余世が腕を振った。それと同時に4匹の黒犬が私に飛び掛つて来た。

「わあああーー！」

「田野さんー左腕を突き出せーー！」

「え？」

そう言われ、私は、腕を突き出した。すると・・・。

「「キヤンーー！」」

偶然当たつた、2匹が碎けて消え去つた。

「な！」

「え？」

私はともかく余世まで驚いていた。これは予想外だつたらしい。

「却本作り”夢の中だから充分じゃねえが。”幻想殺し”と”超電磁砲”が使用可能になつてる。流石に”不慮の事故”と”大嘘憑き”は無理だつたけどな。」

「夢つて・・・じつて夢の中なの？」

私の言葉に南は、「クリとうなづいた。そして、私を見る。

「田野さん。悪いけど俺は今、田野さんを抱えて逃げてる最中だから、加勢が出来ない。だから、アイツを口野さんが倒すんだ。」

「は？ どうした事？」

「”脚本作り”は、ちょっと発動条件がショックギングでな・・・只今ショットガンやらを持ったメイドさんや黒服のお兄さんに追われてる正直キツイ。」

手の平サイズの南は、チョ「チョ」と走つてojiiマネをして言つた。
「ちょっと可愛いかも。

「のわ！ 掠つた！！ 嘘・・・実弾！」

「当然でしょう？ アンタ誰を誘拐してると思つてんの？ 因みに誰一人傷付けたらダメだからね？」

「難易度ハード？！」

まあ、こいつなら大丈夫でしょう。私は、そう考えると笑つて余世の方を見た。余世は、先程までの笑顔ではなく、怖いくらい慎重な表情になっていた。

「ハア～まさか、アタシの能力に干渉出来る奴がいたとはね・・・。
良いわ、かかるべきなさい。全力で潰してあげるから。」

「それは、じつちのセリフよ。超電磁砲少女イマジンナギサが成敗よー」

「「ダサ！」」

よし、この超能力者共後でコロソウ。

第18話 超能力者推参（後書き）

南：よし！次回は、バトルだ！ガンバレ日野さん！

全員：・・・・・・・・。

南：ん？どうしたんんだ？

雷刃：ねえ・・・キミって主人公だよね？

南：ああ。一応。

日野：なんで、私が”殺人鬼”をと戦う流れなのよ？

南：え？そりゃー相手は夢の中だし・・・俺に何が出来る？

星光：それでは、アナタは何をするのですか？

南：今の所は、逃げる。正にタイトル”自己防衛”に徹する。

闇：・・・作者・・・。

作者：次回。日野さんと余世が激突する！お楽しみに。

日野：私が、戦う事は決定なんだ！

作者：では、次回で。

第19話 激突！殺人鬼VS超能力者（仮）（前書き）

主人公不在のバトルスタート！

投下デス！

第19話 激突！殺人鬼VS超能力者（仮）

学校の中を強烈な電光が駆け巡り、闇に包まれた校内を照らし出している。

いま、この場に対峙する2人の人間。

1人は、小学校低学年程の子供にして殺人鬼。“余世夢”別名。夢の殺人鬼。敵を自分の夢の中へと引きずり込み仕留める。完全犯罪者である。

1人は、小学校4年生の同じく子供にして超能力者（仮）。”日野ナギサ”

別名。委員長。厄介事を人に押し付ける厄介なお人である。

「なに？なんか、すごく失礼な事を言われた様な気がするんだけど？」

「アハハ～何余所見してんの？」

私が、油断している隙に余世は、次々と黒犬を召喚して私を襲わせる。流石にこの数は右手じゃ捌ききれず辺りに紫電を放つて、牽制する。実に不思議な事に能力の使い方が頭の中に流れ込んで来るのだ。

おかげで、次にどうすればいいのかよくわかる。

「ちい、アンタ！そんな遠くからじゃなくて、近くに来なさいよー！」

「嫌だよ？その力アタシの能力をあんまり寄せ付け無いんだもん。

近付くだけ危険よ」

余世は、そう言ひと、次は炎を繰り出した。なんでもアリですか？

「でも、その程度なら！」「イツで十分！“超電磁砲”！」

「甘い！“不鬪”！」

すると、どういう事か、余世の炎の勢いと威力が段違いに上がり、“超電磁砲”を軽々と貫いた。

「嘘！クツ・・・・！」

右手を突き出して炎を防ぐが、それが、駄目だつた。

「アハハ！隙アリ！“呪われた双剣”！」

突然現れた、双振りの双剣が私の鎖骨から胸にかけて皮一枚を切り裂いた。

「痛つ！切られた！痛い！」

「アハハ！」

「・・・でも・・・。」

私は、素早く相手の腕を掴む。ただじゃやられないわ。

「最大電流！！！！！」

直接電流を相手に流し込む。舐めんじやないわよ！

流石に、電流を直接流した影響で、余世の体が、プスプスと煙を上げて、焦げ臭くなる。

・ 『ア
・ ”
・ 』
・ 『ア
・ ”
・ 』
・ 『ア
・ ”
・ 』
・ 』

正に電気椅子。
しかも正面から見ている
もう限界かも。

- 11 -

腕を放し余世を放り投げる

卷之三

ピクリとも動かない余世を見ていると、何もこゝまでする必要があつたのか?と思わなくもない。

・・・まあ、良いか。早く本の世界に帰してよね」

その時、ポンという音が聞こえ下を向くとミー南が出現した。

「ハアハア・・・あのジジイ・・・だだもんじやねえ・・・。田野さん無事・・・ヒトハ」

「何よ？文句あるの？私だって、見てよー。こんなにやられたのよ？」

私は、自分の傷を示す。コレ治るの？まあ、いやとなつたら、南にやつてもらえば良いか。

「・・・コルサナイ・・・」

「「ーーー」」

その時、完全に枯れ果てた、声が聞こえてきた。私もミーー南もそちらを見ると、そこにはプスプスと最早炭人間と化した余世がいた。

「キヤアアー！」

「ホラーダね。てか、アレやつたのは田野さんなんだから。悲鳴はないと思つぞ？」

「いやー！いやー！嫌アーーーー！」

「ア”・ア”・ア”・・・」

更に電撃をぶち込む。悪即滅。

「ひ、田野さん！それぐらいに・・・せめて原型を残さないと・・・

」

「ハアハアハア・・・」

煙が、辺りに漂い炭臭い臭いが鼻を付く。殺った？そして、煙の中に一つのシユルエットが浮かび上がる。

「・・・ハ？」

「・・・來たな。日野さん勝負はこれからだ」

それは、2メートルは超える大男だった。片手に肉厚の肉切り包丁を持ち、濁つた眼でこちらを見ていた。

「アカカカ・・・」「ロシテヤル・・・」「ロシテ・・・」「ヤル・・・」「マジド・ブッチャー」アノ、オンナラコロセ・・・

「フシユ、・・・」

大男は、ゆっくつとでもとても早く私に近づいてくる。なによ・・・この人？

「ま・・・マジかよ・・・」

すると、ミー南は、見当違ひの方向を向いて眩いでいた。

「・・・テメエ・・・寄つにも寄つて、いつに元ライもん召喚しやがつたな」

「・・・じつしたのよ?」

「悪い。ちょっと不味そつだ。そいつが現実世界でも召喚出来る事を完全に忘れてたわ」

ミー南の声は、本当に不味い事を知らせていた。本当に何があつたのよ。

「アハアハ・・・ミコナ・・・シロジヤヒ・・・ミトカニ・・・」
ナゴロシテ・・・アハ

狂氣に満ちた、余世の声に背筋が凍り付しつくなる。すると、ミミ
南がとんでもない事を呟いた。

「田野さん。悪いけど、追つては一回殺しておくよ」

「は？」

「南まで何を言つてんの？馬鹿になつた？」

「じゃなこと、正直再生が出来ないうちにグチャグチャにされかね
ない」

ミミ南のひつじの体を握り潰さんばかりに握るが、反応一つしない
と言つ事は本当にヤバそつた奴がいるのだらう。

「・・・好きにしなや。ただし・・・」

「分かつてゐる。『無かつた事』にするだけだから。とにかく」

「うさ。分かつてゐる。絶対に・・・」

「勝つてやね」

やつぱりと、ミミ南はポンと消えた。
れへ・・・・・

「フシコ・・・。、」

「あなたの相手は私ね。叩き潰してあげる」

さあ、戦闘開始よ。

第19話 激突！殺人鬼VS超能力者（仮）（後書き）

闇　：・・・コレ、別に南がいなくともやつて行けるんじゃないかな？
日野：“超電磁砲少女イマジンナギサ”で？確かにね。・・・殺つ
ちゃう？

南　：怖い事言つなよーまあ、とにかく日野さんは、よくやつたよ。
・・・状況は、悪化したけどさ。

日野：一体何が起こつてのよ？

南　：それは、次回で・・・。

第20話 伝説の巨人”ヨトゥン”（前書き）

少し時を遡ります。

どうぞ！

第20話 伝説の巨人”ヨトゥン”

場所は、聖杯小学校。俺は、マシンガンメイドさんやハンドガンの黒服さん。そして・・・

「ホホホ。逃がしは致しませんよ?」

「・・・化物め・・・」

執事服を着込んだ、老人を相手に鬼ごっこをしていた。前者2名ならばまだ良かった。問題は、老人である。

この老人、全てに置いて厄介なのだ。まるで時田さんと同じ能力を持つているのではないか?と思えるほど先回りしていくのである。

「お嬢様を帰して頂きますよ?」

「だから・・・無理だつてー・むつきから言つてんだろが!」

「いいえ。この歳で駆け落ちなどこのジイの旦が青白いつちは、許しませんよ!」

「駆け落ちじゃねえーつづか、何だよー青白いつて」

「ホラ」

「本当だー青白いーカラー『ンタクトをしてるし』

この、ジジイこれをやるためにタネを仕込んだいたな。侮れん。

「執事流拳術5の型”残砂磁双”」

ジジイが投げた石に拳をぶつける。その瞬間、石は閃光に包まれ音速で飛んできた。

つうか、それ”超電磁砲”じゃね？？？いや、石でやつてるから、それより上かも・・・しかも・・・。

「のわ！」

これは、何故か”幻想殺し”が通用せず、一回腕が爆散した。なので、避けるしかない。

「ホホホ。避けるのだけは、達者ですな」

「どうも。それなり、止めてもうえませんかね？お嬢様が死にますよっ。」

この間も田野さんを抱えているので、下手に戦えば田野さんに被害が及ぶ。おかげで、さつきから田野さんのいる夢の世界に干渉出来ずについいるのだ。

「田野家の令嬢たるもの何時死んでも良い位の覚悟はござります。下手に生き、辱めを受ける位ならば死を選ぶ。それが、田野で御座います。まあ、お嬢様だけですが

「・・・・・クソ」

「ハハハや、田野さんを盾に出来ねえか。”大嘘憑き”を使えば楽なんだが・・・どうやら、”却本作り”の発動中は、能力が低下する

へじく

相当不意をつかなくては”無かつた”事にならない。このジジイならば尚更だ。

隙アリ。執事流拳術1の型”背後取り”！」

「クッ・・・！！」

まるで、瞬間移動の様に俺の背後に出現するジジイ。正に名の通り
背後を取られた。不味い。

「さて、いのまま、その首落とすのも軽いですが・・・如何したも
のか」

首筋に冷たい手刀の感触が伝わる。明確な死のイメージが頭を巡る。こいつ、・・・マジで俺を殺す気だ。

一
む
?

—
•
•
•
•
•
•
—

俺は、精神力をフル活動させ”大嘘憑き”で自分の気配を”無かつた事”にした。精神的にはかなりの負担がかかるが、この場合仕方が無いだろう。

「姿は見えるが気配が分からず。奇つ怪な技ですね」

卷之三

“こいつ、俺の姿が見えるのかよ。”星光すら気が付かなかつた程の技なのに・・・このジジイ本当に人間なのか？

まあいい。行くか。

「ハアアアアアアア！」

「ム？」

一面を巡る電流の嵐を発生させジジイとの距離をとった。そして、手短な教室へと逃げ込む。

「ハアハア・・・ちくしょう・・・なんつう奴だよ。とにかく何とか早く終わらせて貰わねえと」

そんな、訳で教卓の下に潜り込み、“幻想殺し”で日野さんの頭に触れる。

奴の能力は、夢の中に相手を引きずり込み自分の有利なフィールドで戦う某殺人鬼的な力である。その間、対象の意識は、相手の精神世界に引き込まれており脱出は不可能なのである。ならば、どうするか？・・・簡単だ入れば良いのだ。

俺には、異能を打ち消す“幻想殺し”といかなる状況でも生きて行ける”ライフオジオ”がある。これらを利用し、更に日野さんに”却本作り”で道を繋げれば何とか入ることは可能になるのだ。

「よし！行くか」

そして、夢の世界へ・・・。

そこには、惨劇が広がっていた。

まあ、それはいい。それより不味い事になりつつあった。

「アカカカ・・・コロシテヤル・・・コロシテ・・・ヤル・・・
マツド・ブツチャー” アノ、オンナヲコロセ・・・」

「アハアト・・・ミヒナ・・・シヒジャヒ・・・ヨトウン” ミン
ナゴロシテ・・・アハ」

殺人鬼・余世月が言つたその言葉。そして、現れた”マツド・ブチ
ヤー”。

そして、昨日現れたのは”ダークネス・ハウンド”それは、夢の世
界ではない現実に現れた。つまり・・・。

「オオオオオオオオ！————！」

「————！」

突然の咆哮が、俺の意識の一部が聞いた。そして、少し意識を戻す
とそこには・・・。

「・・・テメエ・・・寄りにも寄つて、二つちにエライもん召喚し
やがつたな」

白い布をまとつた、禿げ頭の巨人がそこにいた。その身長十メート
ルは下らず、ビル4階程の高さがあつた。

表情は魔王像の様に凶悪で、腕や足に付いている筋肉は底知れない
パワーを感じさせる。

その昔、雪の女王が自らの血から創り出した、頑丈で怪力をもつ巨
人の一族。

伝説の巨人”ヨトウン”それが、俺の対戦相手となる。

第20話 伝説の巨人”ヨトゥン”（後書き）

南：何だよ・・・何なんだよ！あのジジイ！

日野：？ジイは、昔からこんな感じだったわよ？

闇：人外がまた1人・・・。

雷刃：まあ、それよりなんか、大きいのが出てきたね。

星光：ビル4階って・・・最早”ロボット”とか”光の巨人”的出

てくる

レベルなのは？

雷刃：うわ～カッコイ！

作者：・・・残念ですが、出できませんよ（”光の巨人”か・・・）。

余世：ミンナ・・・ゴロズ・・・アカカカカカ！！（約・それでは、次回で！）

第21話 燃え上がる火の（日野）意思（前書き）

夢の中の戦い。

決着。

第21話 燃え上がる火の（日野）意思

「うわあああ！死ねえ！！！」

「フシユ・・・・」

私の地鉄剣を肉切り包丁で受け止める殺人鬼は、流れる電流もなんのその。遠慮なく私を切りつけてきた。

それを紙一重でかわし、再び切りつける。今度の狙いは、殺人鬼の上にいる余世だ。

「死ね！――！」

「ケケケ・・・ムダ・・・・」

しかし、殺人鬼は、巨体を動かしてかわす。見かけによらず俊敏なので気持ち悪い。

「ハアハア・・・チイ、ちゃんと当りなさいよ。悪は滅びるのよ？」

「フシユ・・・・」

さつきからこのやり取りをずっと続いているものの、事態は全く進展していなかつた。いや、長引けば、体力の減つているこっちが不利だ、それに外で戦っている南も負担が大きくなるだろう。なんとが、早く終わらせないと。

「ねえ、一つ良いかしら？アンタ、なんで人を殺したりしてんの？」

「ドウデモイイコト……」

「いや、気になるわね。そんな力が有れば、たくさんの人人が助けられるんじゃないの?」「

「……オマエニハ、ワカラナイ。……アタシノジンセイハ、最アクダつた」

すると、余世は、ゆっくりと”マッド・ブッチャー”の上に立った。見た感じは完全に焦げ付いていて、不気味だったが、その目には、どうしようも無い憎悪が浮かんでいた。見た感じは、私より年下の子に一体どれだけの憎しみが渦巻いているのだろうか?

少なくとも私は、分からなかつた。

「騙サレ、ステラレ、また、騙され。サイアクだつた。死んだトキハ、ココロからヤスラゲた。ナノニ・・・また、人生が・・・シカモわけのワカラナイトカラをモラッテ・・・キモチ悪がられて・・・憎い・・・皆憎い!」口ロシテヤル・・・コース・・・あああああ

”…………”

一つ分かつた事がある。超能力者つて、ヤツバリ解からない。でもこの子の人生が最悪だつた事は理解出来た。

この子は、未来の私の姿なのかも知れない。”日野”も”バーニングス”から裏で大きな被害を受けてきた。分家と言う事で本家を守るために盾になり、他の家を攻撃する矛にもなつてきた。その為”日野”は、多方面から怨みを買い様々な攻撃を受けてきた。裏の”バーニングス”家の事を知らない奴らから、悪の象徴としてまるで、身代わり人形の様に。

「口ロシテヤル・・・口ロシテヤル・・・口ロシテヤル・・・ああ

ああああ”――――――――

この子の人生もそつだつたのかも知れない。他の人間の盾になつて、利用価値が無くなれば捨てられる。

捨てた奴は、平然とした顔で生きて行く。最悪な世の中で生きてきたのかも知れない。そして、訳が解からないけど、また、やり直そうとした時に超能力に目覚め、周りから拒絶され完全に狂つたのかも知れない。

私も今は夢の中だとは言え、南の力の一部を使って戦つているけど、この力は、はつきり言って怖い。人間をたつた一回で丸焦げに出来る電流を出せるなんて、本当に恐ろしい。もし、南の事をよく知らず、この力の発動を見ていたら、恐らく絶対に避けていただろう。漫画などで、過ぎた力は人を孤独にする。と言つ言葉があるけれど、まさにその通りである。

「ねえ、ちょっと良いかしら? アンタのその絶望の一息には、その超能力が関わつていてるよね」

「ああああ”――――――――

「今、外で戦つてる奴。南つて言つんだけどさ、アイツも超能力者なのよね。知つてる? アイツ今でこそ私や鈴音ちゃんと話してると聞いた話じや、転校してきて一年間ずっと、一人で誰とも関わらずにいたらしいのよ」

「ダカラ・・・ドウシタ?」

「・・・アンタと同じなんぢゃないのかなと思つてさ。大きな力を持つてゐるから孤独で誰とも関わらない。いや、怖いんだと思う。拒絕されるのが、奇異の目で見られるのが・・・。」

「アイツとワタシはチガウ。絶望シタモノがチガウ……」

でしょうね。でもさ、もしさイツがアンタと同じ理由で暴走でも起こしたら、最悪な事になるわ。全身から電流を流す奴にこの国の法律で対応したら一体どれだけの被害が出るんでしょうな。……だからさ、私は……。

「アンタ程度の奴に負ける程情けなくないし、絶対になんとかなるって思ってる。アンタは南の反面教師よ」

「ソウ。ナラドウスルノ?」

「アンタを倒して更生させる。超能力者だから、気持ち悪がれつて言う幻想をぶつ壊してあげるわ」

「アハアト……所詮はワドモのカンガエね……」

「笑うと良いわよ。でもね”日野”はね結構約束は守るのよ?」

私は、そう言いつと心の底から念じた。最強の奥の手を出せと。南ならそのくらいの武器ぐらい持つているだろうと念じて。すると、何かが現れた。それは、一枚の鏡だった。そして、その中にあるのは1本の螺子。

”却本作り”その知識が脳内を駆け巡った。本来なら絶対に出せる訳もない物。何故出たのかは分からなかつたけど。

「使わせてもらひやうよ?」

「ナンデ……タイヨウノ……鏡が……あノワドモにアタシが

共感したとデモ・・・「

余世が、何かを言つてゐるが、空氣を読まない事に定評のある私です。

「フシユ・・・」

自らの主の危機に動いた”マッド・ブッチャ”的肉切り包丁を恐れずそのまま突っ込んだ。最初は、左腕が私から切り離された。激痛が走ったけど関係無い。所詮は夢なのだ。次に、胸に包丁が食い込んだが構わず。進む。そして・・・。

「そんな・・・」

私が真っ一つになるのと同時に”脚本作り”の螺子が余世に食い込んだ。

「やつた・・・」

薄れゆく意識の中では私は理解した。つまり今本体の方にはあの太さの螺子が突き刺さっている状態なのだろう。・・・

そりや、ジイも怒るわ・・・。そうして笑つと同時に今度こそ意識は消えて行つた。

第21話 燃え上がる火の（日野）意思（後書き）

雷刃：遂に！決着ウ！

闇：ふむ。遂に”夢夜の殺人鬼編”終了か。

日野：そうね。皆！ありがとう！

南：いや！チョイ待て！まだ、俺の活躍が残ってるぞ！

雷刃：あ、そうだったね。影が薄かつたから、気づかなかつたよ。

星光：そうですね。まさか、転生者の相手を一般人に押し付けると
いう

前代未聞な事をしでかしましたからね。

闇：正に”不慮の事故”だな。

南：ううつ・・・。

星光：しかも、思いきり誤解まで、されてますからね。

南：自分から1人になつてただけなんだけどな。

闇：まあ、そう思われているのなら仕方が無いな。

日野：何の話？

全員：いいえ、なんでも。

作者：次回は、遂に南が活躍・・・する？ お楽しみに？

第22話 破壊と自己保身（前書き）

主人公。やつと活躍！

第22話 破壊と自己保身

さて、俺の目の前には、まるで、某光の巨人が出てくるべきクラスの敵が立っている。”ヨトウン”雪の女王の切り札にして、一般的な人間には手出しも出来ない、絶対的な力の塊である。

「さーて、日野さんには、強がつたけど・・・どうするかな?コレ体の巨大さは元より俺の力は元々自己防衛第一。その上どうにか出来る有一の能力である”大嘘憑き”は、使用不可に等しく”不慮の事故”は・・・・・・とある理由により使用出来ない。

「せめて、日野さんを消せれば・・・」

俺は、両腕で抱えている日野さんを見た。腹部には太い螺子が食い込んでおり、獵奇殺人の被害者の様な感じになつていて。まあ、そのおかげで、黒服や武装メイドさん、バケモノ爺さんに追いかけられた訳だが。

「オオオ!!!」

突然”ヨトウン”は、俺の体より太い腕を俺に向かい振り下ろしてきた。巨大だが、動きはけして緩慢ではなく、むしろ速い程だ。

「クツ・・・地鉄の盾!」

そう言つた瞬間、黒い塊が盾の様に広がつた。前回と違い今回は、砂場のある学校である。厚さは、昨日の比じゃない。だが・・・それは甘い考えだった。

「オオオオオオオオ！－！－！」

”ヨトウン”は、すぐさまに反対側の腕で再び殴ってきた。そして、また殴る。

「オオオオオオオオ！－！－！（僕は、コレが壊れるまで殴るのを止めない！－）」

まるで、そんな声が聴こえる。幻聴か。

「”ヨトウン”って、ここまで、頭が良かつたか？」

俺が知っている”ヨトウン”は、少なくともここまでじゃ無かつたはずだ。つまりこの”ヨトウン”は、俺の能力と同じく強化されたモノと言つ事か。厄介な。

「だが、所詮は、力押し第一主義の巨人だ。このままガードしていればチャンスはある」

そう。いくら、殴るスピードが上がり腕が何本に見える様になつたとしてもだ。怖いよ。

「オオオオオオオオ！－！」

すると、”ヨトウン”は、突然殴るのを止めた。

「なんだ？知能が付いた分諦めが早くなつたのか？」

だが、それは甘い考えだった。突然、地鉄の盾が何かに吸い寄せら

れる様に引っ張られた。そして、俺から完全に引き離されどこかへと飛んで行った。その先には黒い球体が浮かんでいた。って……。

「”欲望”だと！」

俺は、啞然としてその球体を見上げた。バカな！有り得ない！って、言つよりなんで”ヨトウン”がそんな能力を使うんだよ！

”欲望”その力は、ズバリ、相手の能力をコピーするモノである。しかもその方法は、あの球体に吸い込むだけと言うチートな力だ。と言う訳で、アイツは今から”超電磁砲”的が使える訳なのである。アハハ・・・笑えねー。

「オオオオオオオー！！！！！」

そして、”ヨトウン”は再び咆哮を上げると、空が消えた。その代わり見えるのは、大量の銃器。

「・・・・ガンズウォール」

ガンズウォール。読んで字の如く、銃の壁が一斉に対象に向かい発泡すると言つ荒技である。原作では、確かにこの100分の1位の規模で”ヨトウン”の頭を消し飛ばしてたつけ？

「・・・・・・・」

しかも、”超電磁砲”的力を加算しているので、銃口は皆青白い光を放っていた。単純計算にして”超電磁砲” $\times 10000000$ 位か。

アンナのをまともに食らつたら、体すら消し飛ぶだろう。原型すら残るのか怪しい位だ。いや、無理だろ？

「ホホホ・・・お困りのようですね」

絶望的な状態に浸つていると背後から聞きなれた声が聞こえてきた。ジジイである。

「うん。正直ピンチです」

「そうですか。それはそれは。流石のジイもあのクラスの巨人は骨が折れますぞ」

ジジイは、ホホホと笑うと巨人を見上げた。つうかアンタ、アレをどうにか出来るのか？

「無理ですね。被害ゼロと叫ぶのは、不可能です。少なくともお嬢様が死んでしまつてしまつ」

「やうだよな・・・まるで、被害を出せば、アレを倒せる様な言い方だけぞ・・・」

「ですが、アナタには、それが出来るのでは？」

「どうして、やう思つんだ？」

「勘で御座います。昔から言つてしまつ?女と爺さんの勘は鋭いと。何か出来る事は御座いませんか？」

「その、とんちんかんな格言は放つとくとして、一つ頼みたいこと

「ある」

俺は、そのまま田舎さんをジジイに渡した。ジジイは直ぐ様田舎さんの脈を取ると安心した表情になつた。

「生きておつとおむすな。」この繩子は?

「その螺子は絶対に外さないでくれよ。日野さんが死ぬかも知れないからな。日野さんを抱えて、出来るだけ遠くに逃げてくれ。良いか絶対に遠くだ。じやないと即死するかも知れないからな」

ほん分かりましたては「武運を」

ジジイはそう言つと、明らかに人外のスピードで直ぐ様小学校から出て行つた。本当にあの人は人間なのだろうか？・・・まあ良いか。今は、あの巨人が先決だ。

「わーて・・・チヨツトばかり本氣で行くから覚悟しりよ~」

どうやら、やつきの会話の時間でチャージが完了したらしく、空全體が、まるで朝の様に青く輝いていた。これだけの事が起こつてゐるのに誰も来ないと云つ事は、やはり結界の類が張つてあるのだろう。

「才才才才才才才才！」

! ! ! ! !

名付けるのなら、”超電磁砲包囲壁”と言つた所だろつ。まさに破壊の境地いや、消滅の形と言つた所か。空が降つて来る。そんな感じだ。

最早、触れた場所は破壊ではなく消滅してゆく。単純に力の破壊が

そこについた。・・・だが、俺の能力は自己保身の為にある力だ。

「墓穴を掘つたな。・・・学校が消滅してくれたおかげで、狙いが絞れたぜ。」

”大嘘憑き”に継ぐ俺の能力の中でも上位の力”不慮の事故”。実は、この力はまだ、コントロールが不十分だった。それ故、日野さんを近くに置いたまま発動すると、最悪の場合、日野さんは昨日の本棚の様に碎け散る可能性があったのだ。まあ、それだけなら別に良かったのだが、今回日野さんは、夢の中で戦っていた。つまり本体が死ぬとどうなるのか分からなかつたのだ。それ故戦闘中も日野さんを

”大嘘憑き”で消すことが出来なかつた。どうやら、俺の力は、仲間がいると効果が半減する仕様らしい。

「だけどな、日野さんがいなくなつた、おかげでやつと本気でやれる。それにお前は、学校を消した。どう言う事が分かるか?」

光が俺に近付く。だが、これは俺の勝利の光だ。”不慮の事故”は対象を選べない。でも、対象が一つしか無かつたら?簡単だ・・・。

「自分の力で消し飛べ! ”不慮の事故輝めきバージョン”! !

全てが終わつた後には、その場には、一人の少年しか残らなかつた。本当に。たつた、一人しか。
そこについた建物は消え失せまるで、空き地の様な虚しさを醸しだしていた。

こうして、殺人鬼との戦いは、完全に終了した。

第22話 破壊と自己保身（後書き）

南：終わった……勝ったぞ！！！

星光：うるさいですね。……ですが、流石です。

南：……。サンキュー……。

雷刃：うわあー入り辛い。

闇：……そうだな。……そういえば、この作品のヒロインって誰なんだ？

日野：私？

闇・雷：ナイナイ！！

日野：作者……？

作者：えー次回は、エピローグになります。

日野：作者？……

闇：不味い！ナギサを押され

（ドムツ）。

雷刃：闇イ！！

第22話 完全終焉（前書き）

夢夜の殺人鬼編

終了！！

第22話 完全終焉

あの事件から6日経つた。翌週の月曜日、俺は久々に小学校へ来ていた。とある理由によりしばらく学校を休む事になっていたからだ。もうこの際、一生来なくとも良いか、と思ったが、日野さんに連れてこられたのだった。と言いつつ休んだのは、日野さんのせいだ。

「…………」

「ホラ、起きなさい」

「…………」

「蹴られても、踏まれても起きないとほね……疲れているのね。
・・夢ちゃん」

「ハイ（^○^）／＼

「ギャアアアアアアアア…………

俺は、夢のから田覚めた。悪夢から田覚めた。

「あひ、おはようもう朝よーじつかしらっ！」『気分は？』

「最悪だよー最低だー！」

分かるか？いい夢を見てたら、途端に悪夢になつた。この『気分が？』

「アハハ～一夜オモシロ～

「・・・」

そんな夢をプレゼントしてくれた張本人である余世は、大爆笑していた。

その後、日野さんの意識が戻りそれと同時に瀕死の余世が現れた。とは言え出現場所は、かなり遠くだったが。

恐るべきは日野さんの搜索網であった。なんだらうね？個人衛星つて。

まあ、そんな事は別として、止めを刺すか迷っていた時に思いも寄らなかつた、事を言われた。

『「この子を助けてやつて』

と、日野さんから頼まれたのだ。なんでも、余世はとんでもない人生を歩んできて、それ故に狂つてしまつたそうなのだ。

『アンタにだつて、分かるハズよね。その気持ちが・・・』

日野さんの目が何故か俺のことを同情的に見ていた。一体俺に何があつたと思っているのだろうか？

まあ、断る理由もなかつたので、色々な条件を付ける事で、復活させた。

1・記憶の消去。

文字通り、記憶を書き変えたのである。とは言え、流石は転生者であるだけあり、完全消去は、不可能だつた。“いくら”大嘘憑き”とは言え、色々工夫しなくては、ならなかつたので、時間がかかつてしまつたのだ。

因みにコレ。完全に洗脳である。

2・能力の制限。

初めは、消してしまおうと思っていたのだが、やっぱり不可能だつた。原理は分からぬが恐らく”禍負荷”と同じだからだと思う。生まれついての力は、完全には”無かつた事”には出来なかつた。

だが、何とか以前の10分1位には出来た。誰か褒めてほしい。

3・余世の面倒。

日野さんの調べによると、彼女の両親は既に・・・・。
なので、日野家に引き取つてもらつ事になつた。
お幸せに。

等の理由により俺は、学校を1週間位休む事になってしまった訳である。皆勤賞が・・・まあ、良いか。

「・・・・・・」

「ナニ? 一夜?」

今、余世は、俺の目の前にいる訳だ。偽りの記憶を持った、偽物の人生に俺はした・・・。果たしてこれで良かったのだろうか? 時々・・・と言うよりここ毎日悩んだ。今の余世は、言わば1年前の俺と同じだ。目覚めたら・・・別人・・・。

「ゴメンな

「??」

俺は、余世の頭に手を置いて言った。俺は、これからこの罪を背負つて生きていくのだろう。こんな俺を見て”アイツ”はどう思つのだろうか?・・・下手したら、焼き殺されるかもな・・・でもまあ、一応は。

完全決着だよな。

第22話 完全終焉（後書き）

闇　：ふう。何とか無事に終わつたな。

作者　：はい。何とか・・・。

雷刃　：どうしたの？元気ないじやん？

作者　：はあ、実は、リアルの方が大変な事になつてて、しばらく更新を

ストップする事なりまして・・・。

闇　：・・・・・戻つて来るんだろうな？

作者　：はい！必ず！

日野　：なんか、向こうは、大変そうね。

時田　：そうだね。・・・所でさ、夢ちゃんの事なんだけど・・・

アレで良かつたの？

日野　：洗脳？・・・そうね・・・今は、これしか無かつたから。で

も、いつか。

南　：夢！止め・・・

余世　：アハハハハ！！

南　：うわああ！

時田　：・・・南くんも苦労が増えるね。

日野　：じゃ！また、会いましょう！

番外編 とある悪意のナイトメア（前）（前書き）

久しぶりに投下しますが・・・。

この話は、結構ダークです。

番外編 とある悪意のナイトメア（前）

「おや？珍しいですね。ジーの部屋に客が来るとは」「ん？迷った？そうですか。では、出口まで」案内いたしましょう」「おや、その本は？」
「拾つた？」この部屋で？ホツホツホ・・・そりですか」「では、お読みになるとよろしくですよ。なに・・・時間はたっぴり」とぞいります」「え？なんの物語かつて？」
「ホツホ・・・なに」とある“殺人者”にまつわる物語ですよ・・・」
夜の裏路地を女は、走っていた。
既に靴も脱げており、足の裏がボロボロになりながらも。「はつはつは・・・嫌あ・・・」

女は、絶望的な表情になり止まつた。

「グルルル・・・」

目の前には、死が牙を？いて唸つている。

どんなに叫んでも。

どんなに否定しても。

目の前の死からは、逃れられない。それが、女の運命だった。

「ガウ！！！」

体を食いちぎられ悲鳴にすらならない声を上げる女はそのまま、もの言わぬ肉片に変わり果てた。

夏の暑さも酷くなる8月の中盤。そんな中でも俺達警察は、休みもせずに働く。

ブルーシートに覆われたテントの中に入るとそこには無惨に殺された死体があった。

「うへ～酷いですね。また、これですか？」

「今月で8件目か・・・」

新入りを押しのけ害者を観察する。

「まるで、デケエ犬にでも食い殺されたみたいな傷だな・・・」

「ですね。一応、保健所や役所に該当する犬を調べて貰つてますけど」

「それで、見つかれば苦労はしねえよ」

俺は、ため息をつくと鑑識に後を任せテントを出る。外に大勢いる野次馬を押しのけ車に乗つた。そして、手帳を開く。その中には、これまでの被害者の名前が書き込まれている。

「・・・これで、69件目・・・どうなつてやがるんだよ」

そもそも、この事件の起こりは、約1年前だった。

最初の被害者は、40代男性だった。死因は、出血死。大型の犬ら

しきものに噛まれた様な後があり、血塗れの状態で裏路地に倒れていた所を発見された。

警察は、何処かの犬が脱走し被害者を喰い殺したと言う方向で捜査を開始したのだが、それから僅か、2日後、今度は、20代女性が同じ状態で死体で発見された。

そして、その後もそれが続きこれを連續殺人と断定し捜査が開始された。

だが、1年経つても今だに犯人への手がかりすら掴めていないのが実状だが。

俺は、手帳を閉じると新入りに指示をだす。

「新入り。ここへいけ」

「へ？ 病院？ 先輩のご友人でもいらしゃるんですか？」

「そういえば、お前には、言つてなかつたか？ 実はな、この事件には生き残りがいるんだよ」

「・・・生き残りですか？ 聞いたことがないんですけど」

「だらうよ。生きている事が分かれば、犯人から狙われかねんからな」

俺は、ため息をついて懐から一枚の写真を取り出す。そこには、一組の家族が写っていた。

この事件の6件の事件の被害者である家族。

「余世一家の一人娘。夢ちゃんだ」

全ての事件の鍵は、彼女が握っているに違いない。
新入りに車を操作させながら俺は、窓の外を眺めた。

病院の受け付けで面会希望の書類を提出しコーヒーでも飲みながら
待つこと20分。

うんざりした顔の看護師が近付いてきた。

「加藤さん。また、貴方ですか？」

「はは、江頭さんは相変わらず綺麗なお肌で・・・」

「どうも・・・いい加減にして貰えますか？夢ちゃんは、ただでさえ精神的に厳しい状態になつているんですよ～もう、そつとしてあげてください」

「・・・私は、事件の真相を知りたいだけですよ。案内お願いします」

「・・・」

まるで、汚物を見るように俺をもう一度見るが、残念ながら帰る気などせぬひびきない。

「・・・先輩・・・嫌われてますね・・・」

「ひっせー」

エレベーターに乗り込み、江頭さんが8階のボタンを押す。上へと上がる起動音を聞きながら、売店でかつたお菓子の袋を見る。

「一応分かっているとは、思いますけど、夢ちゃんにお菓子を上げる事は出来ませんからね」

「ち、なら、江頭さんから渡して下せこよ」

そういっていいる内に、8階につき、フロアに出る。そして一つの個室の前に案内された。部屋の前のプレートを確認すると、”余世夢”との文字があった。

「・・・」

「邪魔するよ~」

病室のベッドの上に一人の女の子が座っていた。そして、じらりと睨みつけていた。

「やあ、久しぶりだね。元気だった?覚えてるかな?」

夢ちゃんは、首を少し縦に振った。どうやら覚えてくれていたらしい。

「3日」一回は来れば、嫌でも覚えるわよ・・・」

今の汗頭さんのセリフは、無視の方向で。

「えつとな・・・今日は、ちよつと話を聞きに来んだけど・・・いいよね?」

「・・・やつてない・・・」

「ん?」

「アタシは、やつてない!びつして、誰も信じてくれないのよー。」

突然夢ちゃんは叫びだした。俺達は、直ぐに部屋を出ることになった。

「アタシじゃない・・・アタシじゃないのよー。」

そんな、叫びが、俺の耳に残っていた。

あの日から、夢ちゃんの病室は、出入り禁止となつた。聞いた話によると、再び状態がおかしくなつたそつだ。

「畜生・・・いまの手掛かりは、あの子しかいねえんだぞ!」

あの日以来未だに犠牲者が増え続けているのだ。この1週間だけで

も、既に3人殺されていた。このままでは、犠牲者ばかりが増えてしまう。

「とにかく何か手掛かりでも掴まねえと……。何か……」

俺は、パソコンに向かい合い画像ファイルを開く。映し出されるのは、この事件の被害者達。全員無惨に引き裂かれこと切れている。

「…………」

つい目を逸したくなるような写真を食い入る様に見つめる。

これまでの被害者は、全員共通点など無かつた。つまりこれは、無差別殺人の可能性が高い。犯人は、犬を使い被害者を追い回し、そして、犬に食い殺せる。今分かつてている事はそれぐらいしかない。

「だとすると……犯人は、愉快犯なのか？……いや……だつたら……」

あそこまで、無惨に殺すのか？この事件の6件目の被害者である余世夫婦の死体は、無惨にも原型を止めていない程ズタズタにされていた。夢ちゃんは、その中に埋まっている形で発見された。一体誰が彼女を埋めたのか、それは未だに分かつていな。

「そういえば、この事件は、他と違っていたな……」

他の事件は、外で行われていたが、この事件だけは、家の中で行われていた。

「ふむ……」

「」の事件には、何かとんでもない“悪意”を感じられる。

「とにかく、」の事件の鍵は、確実に夢けやんこある。何とかしな
くちやかな

“悪意”に先を越される前に。その時俺の携帯電話が無機質に鳴つ
た。

「ん？」

俺は、それを取る。

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

「それは、本当か？」

『・・・・・・・・・・・・』

電話の相手は、ある事を言いつとわかつて電話を切った。

警察署から病院までは、車で約1時間程かかる。俺は、クーラーを
ガンガンかけながら熱い夜の町に車を走らせる。

「流石にこの時間は、不味いかな……でも良いか」

そう独り言を言いながら車を走らせる。田舎すべき病院を田舎して。

番外編 とある悪意のナイトメア（前）（後書き）

闇：復活！

作者：いや、まだ復活出来て無いから。

星光：リアルが地獄ですもんね。

雷刃：よく投下出来たね～。

闇：ウム久々に出番があつて嬉しいぞ！

南：キヤラが、ぶれてる？

日野：所で、今回の番外編って、夢ちゃんの過去ってわけ？

作者：あ、はい。余世夢の過去話ですね。

余世：？

南：こっちの話。向こうで、遊ぶか？

星光：私も行きましょう。

余世：うん！

日野：行つたわね・・・。

闇：そうだな。今の夢に過去の話は分からんだろうからな。

雷刃：過去なんて・・・知らなくても良い事だらけだよ・・・。

闇・日：雷刃がシリアルスだ！

作者：そんな訳で次回もよろしくお願いします！

番外編 とある悪意のナイトメア（後）（前書き）

後編投下！

番外編 とある悪意のナイトメア（後）

「『世の中に』はさ、2種類の人間しかいないんだとボクは、思つんだよ。」

そこには、さう言ひと私の両親を踏みつけた。既にグチャグチャになつていた両親は、軽い水音しか出せなかつたが。

「『わで、じや問題だ。キミは、どひか側かな?』」

「『ボクと同じかな?それとも違うのかな?』」

「『まあ、良いや。』」

「『答えば、今度聞くからぞ』」

俺が、病院に到着すると、院内は、真っ赤に染まつていた。一体何があつたなんて分かる訳もない。

「なんだ、じりや……。」

俺は、拳銃を抜き中に入る。既に入口の自動ドアは、開きぱなしになつておひ、まるで化物の口の中に入つていく感覚がした。

「…………」

2日に1回は、お世話になつてゐる受け付けカウンターに進むとそこも真っ赤に染まつてゐた。そして、その近くには、何かの塊が転がつてゐる。

「…………」

俺の中の感覚がそれが何かを伝えた。

「死体か……」

殆ど人間としての原型を止めていなかつたが、香る内臓の臭いと刑事としての感覚からそう判断した。被害者は、女性。死因は、何かに食い殺された用だ。

「ツ…………夢ちゃん！」

俺は、急いで、エレベーターに向かうその間にも同じような死体が、転がつていた。間違いない。犯人が、ここに来ているんだ。エレベーターに到着しボタンを連打するが……。

「クソ!」

配線が切られているのか、全く反応しなかつた。

「階段を……」

俺は、急いで非常用の階段を目指す。真っ赤な水溜まりを踏みながら非常階段の前にやつて來ると少し笑いたくなる光景がそこには、

あつた。

「グルグル・・・」

「ガア！」

テレビでしか見たことの無いような巨大な黒い犬が、何匹もそこに
はいた。口からは、真っ赤な何かを滴らせ何かを貪っている。

「うつ！…！」

その何かを見て一気に吐き気がこみ上げて来た。

『また、アナタですか！いい加減にしてください！』

『全く最近の刑事さんは・・・』

そんな言葉を毎回かけて来た江頭さんは、物言わぬ肉塊に成り果て
ていた。彼女の近くでは、小さな肉塊が転がっていることから恐ら
く最後まで子供を守っていたのだろう。全く彼女らしい最期だ。

「畜生！くたばれ！…！」

犬に向け5発の銃弾を浴びせる。

「キヤン・・・」

「ガ・・・」

犬は、頭を砕かれ動かなくなつた。俺は、死んでいる事を確認する

と新しく銃に弾を込め階段を駆け上がった。

結果的に言つとあの犬は、まだまだいた。あの銃の音に感付いたのか集まってきた犬を8階に到着するまでに7匹も仕留めた。全く間に合わなかつたらどうするんだ？

「待つてろよ。」

俺は、ゆつくりとした足取りで夢ちゃんの病室を目指す。拳銃の中の弾は、後1発しか無いからだ。

「ゲームじゃあるめえし・・・・・まつたく・・・・」

残念ながら、現実にはそこら辺の箱に弾は入つていない。

8階も真っ赤に染まつておりナースステーションや病室には、食い殺された亡骸が転がつていた。恐らく犯人は、この病院の配線を切り外部との連絡手段を断ち切り出入口を封鎖した後大量の犬を送り込んだのだろう。

「どんな手際のよせだよ

外部に一切気付かれずそんな無茶苦茶な事が出来る。

「ん？」

そんな事を考えていると、夢ちゃんの病室の前にたどり着いた。俺

は、拳銃を構えゆつくりドアを開いた。

「ジーー。」

「夢ちゃんー良かつた無事だった」

病室の中のベッドに隠れる様にしていた夢ちゃんを見つけた。俺は、安心するように声をかけようと近付く。

「大丈夫だよ・・・もつ安心していい」

「駄目・・・来ちゃ駄目・・・」

しかし夢ちゃんは、何かに怯える様にそつと呟いた。

「？」

そんな時だった。突然背中に熱が走ったのは。

「ガツ・・・何だ？」

身体に力が入らず、逆に抜けてゆく。そして、振り向くと・・・。

「まさか・・・お前が・・・」

犯人は、ニタリと笑いつた。

「そうですよ“先輩”」

新入りは、そう言つと更に銃弾を打ち込んだ。どうやらサイレンサ

ーでもつこてこるのか、音は全く聞こえない。

「え、うーん、だ・・・・・え、うーん、お前が！」

「どうして？決まっているじゃないですか？ 可愛い犬達の餌の時間ですからですよ？」

「犬？」

新入りは、軽く笑うと狂った様に言つ。

「知つてます？古代では、犬は人肉を喰らう時代があつたそうなんですよ？人の身体つて実は、栄養価が高いんです。戦時中でも犬は人肉を喰らつて生きていたぐらいですしね。古文などでもよくあるでしょう？」

「・・・狂つてゐるがお前・・・」

「いいえ、僕は狂っていませんよ？だってそうじゃないですか。」

そう言うと新入りは、ぐにやりと表情を歪めた。

「だつて。僕は“人間”なんですよ？欲望に従うしかない！そんな正直な生き物なんですよ？だつたら、自分のワンちゃんに良い物を食べさせたい！そう思うのも当然じや無いですか！アハハ！」

笑い
笑い 笑い 笑い 笑い 笑い 笑い 笑い 笑い 笑い 笑い
笑い 笑い 笑い 笑い 笑い 笑い 笑い 笑い 笑い 笑い

狂った様な笑い声が響く。

「と言う事は、これまでの事件も・・・。」

「さあ？これからエサになる動物に話すことなんてないですよ。」

新入りは、そう言って何かを吹いた。すると周りにいた犬たちは、一斉に俺へと群がつて来た。

「う・・・うわあああ！――！」

肉を食い千ぎられる感覚を感じながら“俺”は死んだ。

きっかけは、とある占い師に出会ったことだった。

その占い師は、出会った瞬間俺を虜とした。

絶対的何かがそこには、あつた。

「『好きな事をすれば良いよ。』『君は、人間なんだから、悪意に逆らうなんて無理だよ。』」

人は人を殺す事をよく考えるが、実際に使うものは少ない。
人を喰う事を考へる事は少ないが、緊急時には、喰らう。そこに悪

意は無い。

矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾
矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾
矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾
矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾矛盾

そんな、事の答えをあの人は、教えてくれた。

単純だつたよ。僕は、犬が好きだ。人が嫌いだ。なら・・・犬の為に人を狩ろう。栄養満点の嫌な人を。

肉が喰らわれる音を聞きながら僕は、今回の事件の生き残りである女の子を笑つて見据えた。女の子は、怯えもせずただただ僕を見ていた。

「・・・。」

「アハハ！！やつぱりあの人の言つた通りだつたね。わざわざ最期まで生かしておいてあげたのにその目には、希望すら映らないみたいだ。」

「・・・どうして・・・どうしてそんな簡単に人を殺せるの？」

「ん？ そんなの決まつてるだろ？ 人なんて僕にとつては、エサ以外の何者でも無いからだよ。君は、自分の食べる肉や魚に同情でもするのかい？ しないよね。僕にとつて人間なんてそんなもんなんだよ。」

子供は、アリを殺す。虫を殺す。そこに罪悪感など無い。只の興味だけがある。

大人は、害虫を殺す。動物を殺す。そこに罪悪感など無い。目的だけがある。

僕は、人を殺す。罪悪感なんて無い。あるのは満足感だけだ。

「そう……。」

「一応は、最初は、吐いたよ？ 同格だと思つていた同類を食わせたからね。でももう慣れた。所詮は死んだら只の肉でしか無いからね。そこの先輩みたいにね。」

未だに喰われている人間に目を向ける。相当旨いのか犬たちはまだ離れない。

「さて、無駄話もここまでにしようかな。一応僕は、逃げるからね。」

「逃げられるの……？」

「アハハ！－！逃げるさ。証拠は、残していないよ。一応は僕は用心深いからね。」

後は、ワンちゃんに夢ちゃんを食わせるだけだ。

「さて、フィナーレと行こうか？ 君を食べる為に死んでいった人達と仲良くね。」

「……………」
シナ・・・
「……………」

何か言つてゐるが、僕は、彼女を食わせる為に犬笛を吹く。

「グルル」

「グルル・・・。」

その音に反応して、2匹の犬がやつて来た。他の犬はまだ先輩を喰つている。全くしょうがない奴らだ。

「さあ、食べてもいいよ。」

「「グルガアー！！！」」

犬は、同時に飛び掛つた。

僕に。

「？」

「アツハハハ……！」

痛みの中夢ちゃんを見ると夢ちゃんは笑っていた。その笑顔は、まだ、小学校入学前の子供の様に愛らしいものだつた。そして、どこか残酷な子供のものだつた。

「そうだよね！アタシと他人は違うんだ！アハハ！馬鹿みたいそんな事で5年も！5年間もアイツ等から気持ち悪がられたり避けられたりしていたなんて！その事で泣いたり……アハ！」

狂つた笑い。

「・・・もう『ロシティイイヨ？』『ダークネスハウンド』。」

「ガウ……！」

そんな声と共に黒い犬が僕の頭に食らいついた。ミリミリと音を立てて頭蓋が碎ける音が聴こえた。

殺した・・・初めて人を・・・。

「アハハ・・・なんだ。人つて簡単に死ぬじゃん・・・」

前の人生で出来なかつた事。どんなに望んでも行え無かつた事が簡単に出来る。

「アハハ・・・最高じゃない・・・復讐してやる・・・こんな人生にした。 アイツを・・・幸せそつた奴らを・・・。」

と、ここで迷いが生まれた。 果たして自分にこれからも人を殺せる覚悟があるのか？

「このゲスは、殺されるべき相手だつた・・・。」

果たして、私は、何も罪のない人を・・・。

「『へえー。』『キミつて殺す相手を罪の重さで決めるんだ?』」

「！！」

そんな時だった。 そんな声が私の耳に届いてきた。

「『いやあー見てたけどさ、結構グロイ殺し方だよね～』『頭を噛み砕くなんてさ』」

声の主は、大量の犬の中から現れた。

「なに・・・これ・・・」

その人物の体の肉は、削げ落ち骨が露出しており首は有り得ない方向へ曲がっていた。いや・・・皮一枚で繋がっていると言った方が正しい。

「『うん。』『人を食べる犬って美味しいね』」

ムシャムシャと“犬”を食べながら私を見ている。首は後ろだけぞ見ている。

『『さて、キミの“悪意”は見せてもらつたけど』『足りないよ
ね～点数的には80点って所かな?』『うん～追試にしては、良い
方だけどね』』

「追試?何を……」

「『アレ?覚えていないのかな?』『ボクだよー.』」

ぐにやりとその人物は、姿が変わる。アタシのよく見知った刑事さんから・・・アタシの忘れた事の無い“アイツ”へ。

「うわあああ……！」

グチャグチャになつた両親。血塗の私・・・そして、それを引き起
こした張本人。

『世の中にはも、2種類の人間しかいないとボクは、思つんだ
よ』

『さて、じゃ問題だ。キミは、どっち側かな?』

『ボクと同じかな?それとも違つかな?』

『まあ、良いや。』

『答えは、今度聞くからだ』

「『あ、思出した？久し振りだね。で、結局キミは、どうなのかな？』『ボクが思うにキミは……』」

「うわああ……”マジド・ブッチャー”“ダークネスハウンド”……！」

アタシの今持てる全ての悪夢をぶつけやる……！

「『まだ、補習かな？』」

「『全く。酷いよね』『行き成り襲い掛かってくるんだから』『だからや、今キミがそんなになつてこるのは、ボクのせいじゃ無いよ』」

「『だから……』『ボクは、悪くない。』」

「『ボクは紙より弱いんだよ。』」

「だと、思つのなら、少しほ、自重してくれ。」

血塗の病院の談話室にて、2人の人物が話していた。両方ともまだ、10にも満たない子供だった。

「全く。今回は、長い遊びでしたね。殺人鬼まで作り上げて遊ぶなんて・・・」

「『アハハ』『良いじゃん♪ 楽しかったしね』」

「こちらは、大変でしたよ。あの男を見つけたり、刑事を分らない様に葬つたり」

「『情報を操作したり』『病院の監視カメラや警報システムを止めたり?』『流石の手際だと思つたよ』」

血塗の子供の笑いに無表情な子供は、ため息をつくと立ち上がった。

「さて、もう行きましょうか?この町にアナタの望む“悪意”は、有りませんから」

「『そうだね』『行こうか!』」

血塗の子供は、嬉しそうに窓に駆け寄る。そして、そのままガラスへと走る。

「『アハハ!』

ガラスが、碎ける音が辺りに響く。ここは8階である。

「・・・全く・・・アナタも厄介な方に目を付けられましたね?」

無表情の少女は、部屋の隅に転がっていた肉塊に声をかける。その肉塊は何かの音を発しながら少しづつ動いていた。

「全身を串刺しにされても回復する・・・私も悪夢を使いますが、アナタ程ではないですね・・・。」

少女は、肉塊にカーテンをかけた。

「余世さんでしたか？“悪意”が有る限りまたお会い出来る機会があるでしょ。その時は、アナタの“悪意”がどの程度成長しているのか楽しみです。」

そして、少女も窓へと向かう・・・ハズもなく普通にドアから出て行く。

「“悪意”と“罪”は、無限に成長します。“無かつた事”には、なりませんよ？どんな“転生者”的力でもね」

ゆっくりと音を立ててドアが閉められた。その音は、悪夢の少女の未来を闇ざす音のようだった。

「許さない・・・」「ロシティヤル・・・ミンナ・・・。」

アタシは、余世夢。只の殺人鬼。

これから、何人でもコロシテヤル・・・そして必ず“アイツ”に合う。

この事件より1年と少し後。殺人鬼は、他の転生者とぶつかり“自己”を書き換えられる事となる。それと同時にこの事件の真相は一時封印される。“悪意”この意味を理解するのは、いつの事になるのかそれは、誰も知らない。

「おや？ もういいのですかな？」

「ホッホ・・・そうでござりますか。では、出口は、そちらで御座います」

「ん？ また、来ても良いかと？ ホッホ。私めも部屋に再び入って来れたらよいですよ。では、またいつか。」

番外編 とある悪意のナイトメア（後）（後書き）

闇　：また・・・厄介そうな者が出でてきたな。

日野　：うん。なんか、怖いわ。

雷刃　：“悪意”・・・一体なんだらうね？それに夢ちゃんやられてたし。

作者　：一応彼等も後から登場予定です。何時登場するのかは、お楽しみ。

時田　：・・・コレ・・・南くんに対処出来るのかな？

余世　：うわー早い！早い！

南　：そうか！じゃあスピードアップ！

余世　：ワーイ！

星光　：フフ。

全員　：（心配だ・・・。）

雷刃　：ま・・・まあ・・・そんな訳で、9月頃には再開すると思つからよろしくね！

ハリウッドの話（前書き）

何とか復活できたりです。
ハリウッド

心でもいい話

「クツクツクツク・・・遂に完成した・・・」

薄暗い部屋の中その人物は呟いた。

「苦節8年と6ヶ月・・・遂に！遂に！完成した！」

周りには多くの薬品が転がっており、怪しげな煙と異臭を放つていたが、この人物は、一切気にしない。

「これで、僕の長年の夢が現実になるわけだ・・・。本当に長かった」

人物は、何かに思いを馳せる様に上を見上げた。そして気付く。

「・・・ヤベ。」

薬品が上げていた煙に火災装置が反応し天上から豪雨の如くスプリンクラーが作動した。

「冷たつ！・・・おつとー！」

人物が声を上げた瞬間、この研究所のセキュリティが作動し侵入者を知らせるブザーが鳴り響いた。

「しまった！こりゃあ逃げなきや！」

人物は、慌ててドアに向かうが、そこには、何時からいたのか、武

武装したお兄さん方が沢山いた。まさに絶体絶命の大ピンチである。

「動くな！」

お兄さんの一人が手に持つたガトリングガンを構えながら言った。
それに対し人物は、冷や汗を流していた。

「なんで、そんなもん持てるんだよ！人間か？本当に？」

お兄さん方が持っていたガトリングガンは、ゆうに30キロはつきり言つて、武装ヘルリに装着する物である。たまに映画などで、撃つているシーンもあるが、現実に出来る可能性は0だ。反動で脱球確定である。なので、人物の突っ込みは正しかつたりする。

「掃射！」

「早っ！なんで！」

人物の言葉など、なんのその。数千発の弾が撃ち込まれる。

「止め！」

普通の人間なら、跡形もなく消し飛ばされるだろう。・・・しかし。

「危な・・・何すんのさ！」

人物は、無事だった。なぜかって？そりや・・・そう言つ事だから
だ。

「ふう。」

人物がそう言って、息を付いたのは、あれから15分後の事だった。
その後ろには、赤黒い何かが山を作っていた。

「分れよ？お前らが悪いんだぜ」

実際は不法侵入した、アナタが悪いが、そんな事は気にせず、人物
は、立ち上がった。そして時計を見る。

「・・・ヤバ！早く帰らねえと“ロリタマ”の時間に間にあわない
！」

そして、赤黒い山を見る。

「・・・仕方ないか。オプションサービスだ。」

そして、自分の武器をクルクル回し呪文を唱える。

「ぴぴるぴるぴるぴるぴー」

瞬間、研究所内は、光に包まれた。

とある研究所にて侵入者があつた。そこで戦闘が行われたが、死者数は、〇だつたそうだ。また、侵入者は、研究室にて、何かを作つていた形跡があつたが、それが何なのかは、不明であつた。

「さーーと、これをどこで試すか？」

人物は、薬品の入つたビンを見ながらカレンダーを見る。

「よし！決めた。ここでいいのか。」

カレンダーには、赤丸である文字が書き込まれていた。

「海鳴」と。

ひつでもいい話（後書き）

闇：復活！・・・でいいのだろうな？

作者：恐らくは・・・。

南：えらく弱気だな・・・。

作者：色々あります・・・とにかく何とか次の章のプロローグが投下できました！

星光：今回の敵（？）の能力って・・・前回と比べると分かりやすいですね。

雷刃：分かる人には、分かるね！まあ、とにかく頑張って。

作者：はい。頑張ります！つと言つわけで、これからもよろしくお願いします！

全員：よろしく！

第23話 銀色の襲来者（前書き）

新章開始！

第23話 銀色の襲来者

「部活に行くわよー。」

「は？」

朝の悪夢を振り払う為に清眠を貪っていた所、放課後突然 M 田野が、そんな事を言つた。

「何言つての？俺は、部活になんて入つてねえぞ？」

「アンタねえ、随分前に先生が言つていた事忘れたの？」

先生が・・・？

「夜の課外授業？」

「・・・4年生になつたら、一時的に部活に入らなくけやいけない。つて言つてたでしょ？」「

ああ、やつぱり、そんな事も言つてたつけっすつかり忘れてたわ。

「取り合はず、皆アンタが休みの間に部活を決めちやつたわよ。」

「・・・・・誰の所為だ。」

「夢うせんよー。」

「少しげは誤魔化せよー。」

駄目だ、この人は本当に駄目だ。きっと敵も多いぞ。

「と、言つ訳でアンタは、本日より我が文芸部に所属よ！」

「はいはー・・・って！なんでもう決まってるんだよ！」

「部員は、今の所6人なのよね。」

駄目だ、もう話が先に進んでる。この人には、最早何を言つても無駄だろ？。自信がある。チヨイマテ・・・

「・・・我が部？」

「ん？ああ、文芸部には、部員が一人もいなかつたのよ。だから、私が乗つ取つたって訳」

学校側！何故早く潰さなかつた！悪魔に乗つ取られてるぞ？日野さんに任せたらどうなるのか分かってるのか？

そう心で叫ぶが、言葉にする勇気は無かつた。

「よーし、早速シユパーツ！」

ズルズルと引きずりながら、俺は考えた。早く辞める方法を。

日野さんに連れられてやつて来る事約6分。場所は、学校の3階にある図書室の隣の小さな空き室。そこが、文芸部の部室だった。

何のための教室なのかと思つていたが、まさか部室だつたとはな。

「まあ、とは言え今日来るのは、一人なんだけどね。」

「一人？ 時田さんか？」

「うんん、鈴音ちゃんは、先に帰つたわよ？」

「は？」

「こいつは、前回の教訓を生かしていないのだろうか？」

「なんでも、この間何かあつたらしくてね。苛めていた主犯格2人が、鈴音ちゃんに土下座して許しを来いて来たのよ。それからは嘘の様に周りの見る目が変わつたわ。」

「…………。」

「ああ、あの時のバカツブルか。どうやらあの時割り込んでいて正解だつたみたいだ。・・・1組にはバレてねえだらうな？」

「じゃあ、誰だ？こんな物好きな部活に入る命知らずは？」

「ほう・・・。」

「「」のよつな、素敵な部活動に入った、聰明な方はどのよつなお人で御座いましょうか？」

すると、日野さんはニタリと不気味に笑つた。

「フフフ・・・よくぞ聞いてくれたわね・・・。」

「部長。失礼しました。コレ安物ですが。」

俺は、売店のチョコレート（10円）を渡し去りゆく。

「待ちなさい。」この部活は、アンタの為でもあるのよ？」

「どう言う事だらうか？俺がそう聞く前に田野さんは、語り出した。

「夢ちゃんの事で、超能力者が、どれだけ孤独だったかが、分かつたの。あの子だって、友達さえいれば、あははならなかつたんじやないから。アンタも友達がいなでしよう？だから、偽善と思われても仕方が無いけど、せめて友達の一人や一人作つて欲しいのよ。」

「

田野さんは、俺の目を真っ直ぐ見つめてきた。ビックり俺と余世の人生を似たようなものだと思つてゐるらしい。

「えつと・・・。」

無茶苦茶違つが・・・気持ちはチョット嬉しい。この1年間俺はずつと、”高町なのは”を避けるために目立たず、友達も作らなかつた。お陰で、学校のグループ作りでは、いつも余る存在だ。・・・もう1年経つた。・・・もう良いのではないか？友達を・・・仲間を作つたつて・・・。

「田野さん。」

「なによ？」

「ありがとう。」

「……うん。でも作れるのかはアンタ次第よ？安心しなさい。この中にいるのは、アンタが休みの間に入ってきた、転校生だから。ハンディは無いはずよ。」

「転校生？いたつけ？」

「アンタは、今日は寝てたからね。気付かなかつたのよ。」

そうだったな。 そう言えば、机が増えていた気がする。 俺は、そう思つと気分一転。 文芸部の部室のドアを開いた。

「失礼しマース！」

第一印象が大事だ。
そう思い笑顔で入ったのだが、その瞬間全身が
フリーズした。

部室には、一人の女の子がいた。

「やあ！リンちゃん、お待たせ！南、この子が転校生の”八神・リーンフォース”ちゃん！1組の八神兄妹の親戚で・・・。」

最早、日野さんの言葉は、耳には入つて来なかつた。

お互いに、どうやら何をするのか分かっていぬようだ。話が早い。

「南?...ビーハー? あ、まさか...コンサルタント見とれ」

瞬間、無数の螺子と幾つものバッタのよつた壁が発生した。

じつて、俺は、あの時の原作キャラと再開を果たしたのだった。

第23話 銀色の襲来者（後書き）

闇　：・・・原作キャラとエンカウンタしたな。

南　：・・・そうだな。

日野　：なんでアンタからそんなに暗いのよ？

南　：日野さんにはわからんよ。

日野　：？まあ良いわ。・・・所で作者？

作者　：はい？

日野　：なんで前回私が出なかつたのかしら？

作者　：忘れてました！テヘ・・・（メキッ・・・）

闇　：作者！

日野　：悪は、滅びたわね・・・次回もヨロシク！

第24話 魔導師登場！（前書き）

原作キヤラ襲来！

第24話 魔導師登場！

「『やあー。キミがリーンちゃんだネー』『ボクは、南一夜。って言つんだ。ヨロシクネー』」

「…………」

「何やつてんのよー！」のバカが！……！」

「ガツツ！」

原作キャラ似の女の子を磔にして挨拶をしていたら、日野さんに殴られた。

でも仕方ないじゃないか！俺の体は、考えるより先に動くんだから。

「リンちゃん大丈夫？ああもう一匕つして、こんなに深く刺すのよ！」

太い螺旋が、身体に刺さつている時点で大丈夫じゃないと思つけど？・・・まあ、日野さんにツッコムだけ無駄か。

「日野さん。そいつに近付いちや駄目だ。色々問題になる」

「・・・アンタのこの行動が問題よ」

「もつともで。

「とにかく、この部屋を元に戻して、リンちゃんを開放しなさい」

「へいへい・・・そいつは後回しなのか?」

「早くー。」

やはり、この娘分らない。

「では、改めて。私は、八神リィンフォースだ」

「俺は、南一夜だ」

「・・・なんで、南はともかく、リンちゃんまで普通に会話してんのよ・・・」

「ナギサから、部員の名を聞いた時から、こいつなのではないかとは予想していたからな」

「成る程。だから、あの光の壁が出てきたのか」

「ああ。だが、無駄だつた様だな」

「当然

まあ、俺には”幻想殺し”があるしな。
取り合はず、元に戻した部室の椅子にかけて、置いてあった菓子を
摘む。すると、日野さんが、言つた。

「そうよーそれーさつきも思つたけど、アレは何なの?もしかして

アンタも超能力者?」

「あ・・・それは・・・」

原作キヤラ。リインフォース。略してリンは、困った様な表情になつた。どうやら、どう説明するか悩んでいるらしい。
アレか?一般人には、話せないとかか?・・・しゃあない。

「ソイツは、超能力者じゃないぞ。魔法使いと言う奴だ」

「正確には、魔導師だがな」

良いのか?そこ補正しても?

「魔導師?なにそれ?」

「自分の固有のチカラを自分で使えるのが、”超能力者”」

「ならば、それを道具で補い強力なチカラを使うのが、”魔導師”
と言つたところだ」

どうやら、このリンと叫ぶ魔導師は、自分を追い込むのが好きなようだ。すると、日野さんが興味津々な目を向けてきた。
ヤバイ、下手に動けなくなつた。

「へえー超能力者以外にもそんなのがいるのね。この世界は不思議
が一杯ね」

”超能力者”も”魔導師”もそんなもの扱いですか。流石です。日野様。

「ところで、アンタ、どういっての関係？なんで、南が先制攻撃を加えてんの？」

随分軽口風だが、言葉の節々に色々と探る様な雰囲気を感じる。恐らく余世の事もあり口野さんなりに心配してくれているのだ。しかし、有り難い。・・・しかし、どうしたものか。どういう関係？うんー・・・別に特に・・・強いて言つなら、一度殺そうとしただけだしな・・・。

初恋の子を殺されただけだし・・・ふむ。

「・・・・・・」メン・・・答えにくになら別に良いわよ？」

いかんー！で、言わなければ、恐らくあのジジイが動くだらつ。となれば、不要な秘密まで日の出を見る気がする。

「あー別にたいした関係じゃねえぞ？ただ、初恋だった子が、ソイツに殺されて、俺がソイツを餐肉にしかけただから！なー！リンク！」

「ああ、その通りだ。本当に大した関係ではない」

「イヤイヤー！なんかスゴイ」とせりつと言わなかつた？殺された？餐肉？どう考へてもまともな関係とは思えないんですけどー！」

うん。自分で言つのもなんだが・・・その通りです。

「・・・でもまあ、夢ちゃんの事もあるし・・・気にするだけ無駄ね」

本当にこの人の器は桁違いだ。ホレ見ろ、リンも啞然としていらしゃる。

「でもまあ、仲良くな。これからは同じ部のメンバーなんだから。それに喧嘩しない！部屋がそのたびに壊れるなんて、冗談じやないわ。良いわね？南！」

「ハイ！」

「良いわね？リンちゃん！」

「あ、ああ」

”超能力者””魔導師”。異端者2人をも黙らせ従わせる日野さんが、実は一番の異端なんぢやないかと思う今日この頃である。

「ほら、握手！握手！仲直りしなさい」

互いの手を取り、日野さんは強引に握らせる。俺は、どうしようか頭を悩ませる。このままだと原作キャラと同じ部活になっちゃう。俺の回避生活は？この2年間は？？いや待て、まだ手はある。

「日野さん、俺やつぱり

「はい！却下！じゃあ、この部の説明を始めるわよ？」

俺は、原作キャラ以上に厄介な人物に見つかった事を今更ながら後悔した。

第24話 魔導師登場！（後書き）

闇 : . . . おい作者。

作者 : なんでしょう？

闇 : 原作キャラが普通に部活に入っているのだが . . . 。

作者 : . . . 。

闇 : ! 消えた！相変わらず逃げ足だけは速い！

南 : ん？ 何か落ちてるぞ。なになに？ 「実は最初から原作キャラを巻き込むつもりでした」？ はい？

闇 : あの塵芥が！ 原作回避は、どうした！

闇 : イヤイヤ。まだ、巻き込まれてねえから . . . 。

闇 : . . . 頑張れ。

南 : . . . 何故そんなに優しい目をしてんだよ！

南 : では、次回も会おう！

： おい！

番外編 学校に吹く幸福の風（前書き）

番外編始まります。

番外編 学校に吹く幸福の風

「ズリー私も学校に行きてえ！」

主はやでが、小学校に通つ事が決まつた口、ヴィータが突然そんな事を言い出した。

「私も、はやでや翼兄ちゃんと同じ学校に行く！」

まあ、気持ちは分からなくもないが、それは無理だろ？。

「ヴィータ。あまり翼達を困らせるな。我々はこれまで通り陰から主を守護していれば良いではないか。」

「ああ。そうだぞ。」

私にシグナムも賛同してくれて、ヴィータを諦めさせようとするが。

「それ、面白そうやな！」

「「へ？」」

主はやはては、ポンと手を打つて悪そうな顔をした。

「兄ちゃん。何とかならんかな？」

その問いに、主はやはての兄であり私達の恩人の一人である八神翼は腕を組んで言つ。

「うーん……寿也に頼めば何とかなるとはおもつねえけど……。」

「じゃあ、せっかく電話やー、ヴィータ。受話器を持ってきて。」

「おうー。」

眼をキラキラさせて、ヴィータは受話器を取りに行つた。

「じゃあ、早速3人分用意せな。」

「主。1人分の間違いでは?」

「うんん。3人分やで。ヴィータにシグナムにリーン。」

「「はい?」」

「シャーマルとザフイーラは今まで通りでとして、皆で行こう。」

「しかし、ヴィータならともかく我々では、見た目とかが問題なのでは?」

「フフフ……その点は寿也君に頼めば問題無い。ダメなら、兄ちゃんも居るし晴樹君も居る。」

「しかし……。」

「ああ、楽しみやな……学校。」

こうして、我々の説得は主に届く事無く消えて行つた。

あれから、しばらく。私達は、主と同じ聖杯小学校へ通うことになった。体のプログラムを少々書き換え、主と同年代の外見になる。これで大丈夫のはずだが・・・。大丈夫だよな？

「ウガーなんで、はやて達と同じクラスじゃねえんだよ！」

私の隣では、調節の心配無用な騎士の一人がそう愚痴をこぼしていた。

「ヴィータ。仕方無い、主のクラスは、テスター・ロッサや主の編入が決まっていたのだ。我々が入れる可能性は低かったのだ。」

「うう・・・でも・・・。」

「シグナムが同じクラスになつたのだ、我々の目的は達成出来ると言つものだ。」

目的。それは、主はやてに何かあつたとき、直ぐに駆けつけると言うものだ。私とシグナムは、これで無理矢理納得したものだ。

そう、しみじみ思つていると、大人1人と子供1人が、やって來た。

「えっと、ハ神ヴィータさんとハ神リインフォースさん？」

「はい。」

「俺は、2組の担任の甲田哲一だ。で、この子は、今日一緒にクラスに入る後藤君だ。」

「後藤聖一だ。気軽にコッチャンとでも呼んでくれ。」

「後藤は、さう言つて手を差出してきた。

「よろしく。」

「…………フフ…………。」

後藤は、何が可笑しいのか、小さく笑った。

「じゃあ、教室に案内するから付いてきて。」

私達は、甲田先生の後を付いて行つた。

「「おおおおおおおお……」「

2組の隣の1組から大歓声が上がつていた。何があつたのだろうか？
? そう思いながら、先生の合図で教室に入る。
教室の中には約40名近くの人人がいた。ここまで、多くに注目されたのは初めてなので、少々緊張する。

「えー前々から言つていたと思うが、今日からのクラスの仲間に
なる。じゃあ、挨拶を。」

先生に促されるまま私は言ひ。

「えっと・・・ハ神リィンフォースです。よろしくお願いします。」

こんな所だろうか？その後も同じような挨拶が続き、最後に先生が、

私達の偽造情報を口にする。主と私達が親戚と言つものである。しかし、そんな中、後藤と言つ少年は。

「僕は、後藤聖一と言つます！好きなものは、幼女……みうしくな！」

と我々以上に目立つていた。目が限りなく本気を物語つており皆ドンビキだった。

「え・・・個性豊かな子達だが、皆仲良くな。」

後藤と同格なのか？私達は。

「はーい！」

主に私とヴィーダに向けて、クラスの声が集まっていた。

噂には聽いていたが、転校生の質問攻めは厄介だった。ヴィーダも随分苦労していた様で、昼休みは走つて、主達との待ち合せの場所である屋上へ行つた。私も後を追うとするべ。

「ちよっと、八神さんだけ？良いかしら。」

突然知らない子供から話しかけられた。

「あ、ごめん。私は、日野渚。」

「あ、ああ。なんだ?」

しまった。主からは、もつ少し子供の様に振舞えと言われていたのに・・・いつもの喋り方で話してしまった。

「えっと・・・何かな?」

「あ、良いわよ? 素で喋つても。私は別に気にしないし。」

「・・・やうか。」

「えっとね。大した要件じゃ無いんだけどね。先生が、八神さん達の入る部活の既望を聞いてくれって頼まれたからや。」

部活?・・・ああ、そういうえば、主も何か言つていたな。

「済まない。まだ、決めていないのだ。」

「そつか、まあ来たばっかりだしね。色々クラスの人には聞くと良いわよ。因みに私は、文芸部。」

我々の入る部活は、主はやてと同じになると思うが、一応聞いておく。下手にあしらえれば、主に余波が及ぶかも知れないからだ。

「今の所。部員は、私と時田さん。あと、南だけね。」

「へ? 南?」

今、一瞬かつて、私の目を醒さしてくれた、超能力者の事を思い出した。

「南一夜。色々あつて、今は休んでるわ。来週くらいには、登校すると思ひうけど。知り合いで？」

「あ・・・いや・・・。」

名前まで、同じ・・・偶然か？闇のカケラに恋をして、それを私によつて碎かれた。哀しい少年。そして、カケラの死後も願いを聞き届けた、律儀な者。・・・確かに歳は主達と同じ位だった。

「そいつは・・・。」

不思議な力を使うのか？とバカな事を聞こいつとした時。

「文芸部！僕も入れてくれ！」

後藤が、割り込んできた。しかも、頭から。

「却下。」

瞬殺！？

「何故！」

「だつてね・・・。」

「頼むつて、運動系の部活は全て断られたんだ！ただ、幼女が動いているのを見て愛でたいと言つただけなのにー。」

世の中には、変態と言つカテゴリーがあると言つが、この男がその

見本なのだらう。ある意味初めて見た。

「アンタを入れたら、身の危険を感じるわ。」

「安心しろ。俺が好きなのは、汚れなき純粹な幼女だけだ。アンタや転校生その1の様な歳離れをした奴には興味がないから。」

何だらうか？今、一瞬イラッときた。

「・・・OK入れてやるわ・・・・・・。」

何だらうか？今、猛烈に寒い。

「おー本当か！」

「・・・(1)の一撃に耐えたりねえ！……」

田野の振り向き様の右ストレートとそれとほぼ同時に放たれた、キックの一撃を受け後藤は・・・飛んだ。

「・・・！」

・・・何だ？今の違和感は？

「イチチ・・・耐え切つたぜ？」

「チイ・・・OKよしつゝ文芸部へ。問題起こしたら、消すからね。」

「

「ああ。」

・・・ 気の・・・ せいか?

「八神さん・・・あーもう一メンディー・

と、突然日野が、叫んだ。

「同じ苗字が5人つて、面倒よ! 今度から、リンフォース・・・長い。リンちゃんで良いかしら?」

「あ、ああ問題無い。」

主からもそう呼ばれるし・・・それにたまに『なんで、こんな長い名前にしたんやろ?』と言っていたからな。

「せう。じゃあ、リンちゃん。仮が向いたら文芸部に来てね。」

「ああ。せうかる。」

「ヴィータちゃんも連れてきてね?」

「黙りなさい。変出者。」

「口コ「ン」と呼んでほじー。」

「黙れ!」

明らかにオーバーキルなダメージを後藤に『え、田野は、死体を引きずつてどこかへ行つた。

「・・・ 文芸部・・・ それに・・・ 南一夜か・・・。」

興味が無いと言えば嘘になる。・・・行つて見るか・・・文芸部へ少なくとも、”南一夜”の真相を確かめるために。

こつして、闇の化身は、自らの意思で初めて動く。この先の事など考えずに。ただ、一つの真相を確かめる為に。

番外編 学校に吹く幸福の風（後書き）

日野：と、言つて、リンちゃんが文芸部へ入った話でした。

闇：……相変わらず、容赦がないな……。

日野：変態に情けは無用よ。

後藤：ロリコンと呼んでくれ！

闇：……確かに。

日野：ね？？？それじゃ！次回で！

第25話 人外集団（前書き）

部活始動！

あの衝撃の再開から1日が経過した。

「わあ、もう諦めなさい。やつら行くわよ。」

「イヤだーい！俺は、帰つて寝るんだ！」

こんな事で原作キャラと関わるなんぞ冗談じゃ無い！下手をすると死亡フラグの可能性すらある。

「ほら、ワガママ言わないの」

そんな俺の抵抗を力でねじ伏せる日野さん。

「くそ・・・仕方ねえか・・・”
大嘘”

その時、首筋に何かが当たられた。ヒンヤリする。
う音が聞こえたと同時に俺の身体に電流が走り
”カチリ”と言

「ハサヤあああああ――――――――――――」

「五月蠅いわ」

更にもう一本追加と言つ地獄を与えられ俺は意識を失つた。

「つたくよ・・・なんで、私がここにいなくちゃならねんだ」

私は、文艺部の部室にて、そう呟いた。

「前にも言つた通り、主の所に行けば良かつたのではないか？」

「テメエを一人にする訳にはいかねえだろうが」

全ての元凶である”元闇の書の管理人格リインフォース”がそう言ったので、私はそう返した。

「ハア・・・」

私の主である”八神はやて”とその兄貴”八神翼”。そして、その他の仲間たちは、別の部活にまとめて入つていた。私もはやてと同じ部活に入るつもりだつたのだが、リインフォースがこの部活に興味を持ち入つてみたいと言い出したのだ。それが、問題だつた。リインフォースは、私たち闇の騎士（現・蒼天の騎士）の中では、管理人格だつただけはあり、トップクラスの知識を持つのだが、あくまで知識だけであり時々とんでもない事をやつて退ける事があるのだ。そんな、奴を一人で歩かせるなど問題を起こして下さいと言つているようなものだ。誰かが、近くにいて、見張らなければならなかつた。そして、それが出来るのは、まだ、部活の届けを出していなかつた私だけ・・・そんな訳で、私はここにいる。

「フムフム・・・なるほどな・・・ウヒヒ・・・」

「スヤスヤ・・・ZZZ」

そして、今この部屋には、リインフォースの他にも二人いた。

一人は、同じ日に転校してきた、後藤聖一と言つ男だ。あの日以来クラスメイト全員から、真性の変態と言われる奴になつていた。幼女好き。幼稚園を覗いていたり、低学年の教室を覗きに行つたりして、私の知つているだけで、8回は、職員室に呼びされていた。そんな、後藤は、カバーの付いた本をニヤニヤして読んでいた。時々カバーの隙間から、”神体幼女”やら”18”やらの文字が見えていた。なんとなくコイツには近づかないようにしようと心に決めた。

もう一人は、時田鈴音と言う女の子だ。基本的に寝てゐる事が多い奴だ。とは言え授業は、ちゃんと聞いている様で、質問されたら、答えると言つ器用さも持つてゐる。そんな、鈴音は、やつぱりスヤと寝息を立てていた。

「つづかよ、部長は、まだなのかよ」

「恐らく一夜を連れて来ているのだろう」

「お待たせ~」

「ホラ来た」

すると、部屋のドアから、この部の部長である、ナギサが、入つていた。・・・謎の肉塊を引きずつて。

「遅かつたな。ナギサ」

「いやー『ゴメン』『ゴメン』。コイツが駄々をこねてた」

ナギサは、肉塊をベチャリと投げ捨てて言った。・・・「レ・・・

人間か？

「フアア～ん？あ、ナギサちゃん。おはよ～」

といひで、鈴音が目を覚ました。

「いい匂いだね。お肉？」

「南よ。コンガリ焼いてみたの」

「へえ・・・」

なんだ？」の風景は？これが、日常なのか？

「おこ・・・リンフォー」

「さて、そろそろ始めよう」

リンフォースは、肉塊を椅子に乗せながら言った。その光景を後藤は、少し困惑氣味に見ていた。

すると、ナギサは、頷いて言った。

「さあ、ようやく全員集まつたわね。よつこぞ文芸部へ。私が、部長の日野渚よ。そんじや、知らない奴もいると思うから、南から自己紹介宜しく！」

「人を氣絶させた上に焼却炉に放り込んで置いてよくそんな口が聞けるな・・・」

「！！！」

私は、その声が、聞こえた、方向に目を向けると、そこは、肉塊では無く一人の少年がいた。

「俺は、南一夜。ただの超能力者だ。よろしく」

南はそう言つと椅子に座つた。

「OK、じゃあ、次は、鈴音ちゃん！」

鈴音は、ゆっくりと立ち上ると

「時田鈴音です。只の未来が分かる未来人です。よろしくお願ひします」

なんだ？超能力者つて？未来人つて？名乗るのが流行つてんの？

「じゃあ、次は、リンちゃん！」

「ああ」

次は、リインフォースだ。皆からはリンと呼ばれている。私もそう呼ぶかな？

「八神リインフォースだ。私は、元管理人格をしていた時代がある。以上だ。よろしくな」

つて！おい！良いのか？バラしても？仮にも一応は、秘密事項なん

だぞ！

「・・・・後藤は・・・良じとしと

「おい！無視するな！」

後藤は、勢い良く立ち上がり

「僕は、後藤聖一。好きなものは、美幼女！な只の天使だ。よろしく…」

「ここの脳内を一度見てみたい。

「天使つて・・・ウハ・・・・

止める。私も吐きそうだから。

「じゃあ、最後にヴィータちゃん…」

「ここ、私の番が回って来た。えっと…。

「八神ヴィータ。えっと…。只の…騎士です…」

「こんなもんで良いのかな？すると、ナギサが、髪を撫でて來た。何だろつか？」

「ヴィータちやん。無理しなくても良じのよ

「？」

そして、落胆した様に言った。

「何？この人外集団は！」

それは、私が聞きたい。

第25話 人外集団（後書き）

南 よ。コンガリ焼いてみたの。

闇 …この言葉に恐怖しているのは我だけか？

日野 …アハハ、もしかしてやりすぎた？

星光 …明らかにオーバーキルです。

南 …全くだ！危うくショック死寸前だつたんだぞ！

闇 …生き返るけどな……。

南 …そこ……黙れ……。

時田 ……でも、一つ分かつた事があるよ。

星光 …それは、なんですか？

時田 …南くんは焼いたらしい匂いがする。

全員 ……。

日野 …まあ。それが分かつただけで南を焼いたかいがあつたわね。

南 …あるか！

闇 …では、また次回で！

第26話 復讐者（前書き）

シリアルス突入？

父が死んだ。その時一緒に母も死んだ。
許さない。俺達は、決して許さない。

”闇の書”必ず復讐してやる。

「よーしー今日の部活終了ーーー！」

「ハーハー！」

「アーアイ。」

個性豊かなメンバーを新たに加え、1週間も経つた。そろそろ順応してきている自分が怖い。

「つて、いかんいかん！相手は、原作キャラだ。」

原作キャラと仲良くなるなんて、死亡フラグ以外の何者でもないからな。

取り合はず今の所は、完全に無視している。もちろん全員にだが。原作知識が無い以上どいつも敵なのか分かつたもんじゃない。

「なぎさお姉ちゃん！迎えに来たよー！」

と、そんな声が、聞こえたので顔を向けると、一メートルはあらうかという大きな黒犬にまたがつた、余世がいた。

彼女は、殆ど毎日、日野さんを迎えていた。最早完全にボディガードの様な存在とかしていた。

これが、元”殺人鬼”の末路だと思うと泣けてくる。因みにこの町には、コレと同等の犬がいるらしく人並に驚いたのは、後藤だけだった。

「あ、夢ちゃん待つて、じゃ！ 南 鍵よろしくね！」

田野さんは、そう言いつと素早く荷物をまとめ、余世と学校を出て行つた。

「じゃあ、私達も帰るか。一夜。鈴音。また、明日。」

「じゃあなー！」

「さよなら。」

リン、ヴィーター、後藤は、そう言いつと教室を後にした。

「アイツら・・・そんなに鍵を返すのが面倒臭いのか？」

「・・・職員室まで行くのが、面倒なんだと思つよ。」

「さうかい。じゃあ、こつもどり下駄箱の前で待つてて。」

「うん。」

時田さんは、そう言つと荷物をまとめた。

何故俺が、こんな事を言つているかと言つと、女の子を送つていくのが、男の常識！と言つ口野さんの発言によつて、家の近い者同士が、一緒に家に帰る事になつたのだ。なので、家が近い俺と時田さん。後藤と八神×2。が一緒に帰つてゐる訳だ。

例外は、日野さんのみだが。

「ハア・・・でもまあ、原作に關わるよりましか。」

俺はため息を吐くと、鍵を返しに職員室に向かつた。

「オーライ！急いでくれ2人共。早く帰らなければ、ロリタマを見逃してしまつー。」

「ああ。分かつてる。」

「ヘイヘイ。」

明らかに焦つてゐる後藤を先頭に私達は、帰路についていた。ナギサの提案から1週間経ち最早日常の一部と化している。傍から見れば仲の良い小学生の下校風景だつ。

「フフ・・・・。」

「ん？何が可笑しんだ？」

「いや・・・何でも無い。」

こんな風景に紛れ込めるなんて、前の私は、考えもしなかった。 ”
闇”と言つ鎌に囚われ自由を忘れていた。いや、そもそも自由など
知らなかつた。・・・本当に私は、幸せモノだ。

『ウェーン』

そんな時だつた。そんな泣き声が聴こえてきたのは。

「む？」の声は・・・。

「知り合いか？」

「小学校低学年。身長は、前から数えた方が早い女の子の・・・幼
女のものだ！」

後藤が、吼えた。相変わらずの言葉に私もヴィータも引いていた。

「アハハードーコーカーナー？」

後藤。パーティを離脱。あの動き恐らくテスタロッサ以上だ。

「ヤベエ！ 女の子が危ねえぞ！」

「ああ。奴の底が知れない以上放つておくわけにはいかん。」

我が部活から犯罪者を出す訳にはいかん。

「アイゼン！ 今すぐ奴を探せ！」

『ハイ。』

「待て！・ヴィータ。こっちの方が早い。」

私は、主から頂いた、ケータイと言つ通信機器（＊ナギサ・カスター）を取り出しパスワードを入力する。すると、画面に後藤の現在位置が表示された。

「・・・なんだ？それ。」

「ああ、ナギサの所有する個人衛生からの映像だそうだ。何でも赤外線や未知の技術が使用されていて、たとえ家の中にいたとしても、何をしているのかが分かるらしい。」

「・・・プライバシーって知ってる？」

「急ぐぞ！奴め、もうすぐターゲットと遭遇しそうだ。」

私は、そう言つと走った。ヴィータもため息を吐きながら眩いでいた。

「なんで、まともな奴がいねえんだ・・・。」

それは、私も同感だ。まさか、ヴォルケンリッターより特殊な人間がいるとはな。

「ハアハア・・・オジョウチャン・・・ダイジョウブ？」

「ウハ・・・・ヒイイー！…！」

着いた時には、犯罪一步手前な発言をする後藤を発見した。明らかに狂気に満ちた顔をした男に怯える女の子がそこにいた。

「テメハー…その子から離れやがれ…！」

「ぐわやああ…！…！」

しかし、後藤はヴィータによるドロップキックを喰らって、ハロハロと転がつていった。

「クハハ…！」『で滅びよつとも口つは不滅なりいー！』

かなり見苦しかった。私は、後藤を放つて置いて、ヴィータの所に向かった。

「おい。ヴィ…・・・。」

「リンクフォース！来るなー！」

「は？・・・わ…！」

ヴィータに突き飛ばされ、私は、地面に手を着いた。すると、世界が歪んだ。

「バカなー！」『れば…』

「クソー！」

「ん？ なんじや こいつやー。」

空の色が紫色に変色し、迥り見えない壁が張り巡られる。“結界”である。文字通り世界を隔離するもつ一つの世界。しかも、かなり強固な物だ。

そして、もう一つ。ヴィータと後藤を捕獲していた、光の輪。“バン”つまり……これは。

「 ”魔導師”ー。」

「正解だ。闇の騎士ー。」

すると、何もない空間から2人の男女が出現した。

「何者だ。」

私が、言ひと男は、地面に足をつき、先程の少女の頭に手を置いた。

「「うわ。危険な事をさせてしまつたな。」

「うん。それよりもあの人達なの？」

「うわと言われた少女は、不思議そつとうひうを見ている。すると、女の方が言った。

「ええ。こいつらこそ、私達の仇。”闇の書”の元凶でよ。父さんと母さんの仇。」

「・・・仇・・・だと？」

・・・これは、まさか・・・。

「さうや。俺等は、復讐をしに来たのさ。安心しろ。主には興味は無い。俺が殺したいのは”本体”だけだ。」

私には、その言葉が日常の崩壊音に聞こえた。

第26話 復讐者（後書き）

雷刃：うわ～想像以上だね・・・後藤。

星光：・・・そうですね。声だけで普通分かるものなのでしょうか？

日野：分かるんじゃないの？後藤だし・・・。

雷刃：どういう事？

日野：転校してきて1週間でアイツの事がよくわかったわ・・・。

星光：大変でしたね・・・。

闇：おい・・・お前達・・・。

星光：なんですか？“闇”？

闇：何故、最後に出てきた奴らの事はスルーしているのだ？

全員：・・・。

闇：いや、話題に上げろ！明らかに私達（闇の書）関連の被害者

だろうが！

日野：「うわちやんが無事で良かつたわ。

闇：それだけ！！！

星・雷：では、次回で！

闇：おい！

第27話 ザンゴク 無双（前書き）

久々に投下します！

第27話 ザンゴク 無双

『あ、もしもし？鈴音ちゃん』

「え？ 濑ちゃん、どうしたの？」

『今、南と一緒にいる？』

「うん。ちょっと、スーパーで買い物してるよ。お一人様1本の醤油と卵が欲しいんだって。2人で行つたらお得でしょう？」

『うん。自分で言いだしといて何だけど、随分適応してきたわね。・・・って！ それは良いんだった！』

「どうしたの？」

『実は、さつきからリンちゃん達の反応が消えたのよ』

「？」

『とにかく南と代わつてーなんか、嫌な予感がするわ』

「主には、興味が無いだと？」

「ああ」

「どう言つ事だ？」

「ストライクゾーンを逸脱したからじゃない？」

「テメエは、黙つてろー。」

ガシガシと後藤を踏みつけるヴィータを背に私は、男に聞いた。

「簡単だ。お前らの主も俺等と同じ被害者だからだよ。調べたぜ”八神はやで”。随分と不幸な星の下に生まれたもんだ。親と死別しお前らに目を付けられ、危うく死にかけた上に氷漬けにされかけた。これを不幸以外の何つて言つのさ？」

「コイツ・・・主の事や”闇の書事件”の裏側まで、知つているのか。それも、こんな短期間で。

「成る程な。詰まりお前達は、私とヴィータを殺しに来た訳か

「理解したか？」

「まあな。なら、場所を変えないか?一二三で、戦つても余計な被害を生むだけだぞ?」

私は、ヴィータによつてグリグリと踏まれてゐる後藤を見据えた。一応奴は、無関係だ。

「いいや、そつちの変態にも話がある

「僕に?」

「目撃者の処理方法についてだ」

「・・・6時までは終わる?」

「終わるかー! テメは空氣を読め!」

「口リは、僕の嫁!」

再び激しい打撃音が辺りを包んだ。アレは別に手を下さなくとも勝手に殺されるだろう。

しかし、本当に殺させる訳にはいかない。いつもなつたら・・・。

「おつと、”念話”は、この中じや使えないわよ? 因みに”携帯”もね

「仲間を呼ばれる訳には行かないからな」

やはり、先手を打たれていたか。

「・・・やるしかないか」

私は、臨戦体制に入る為に魔力を貯めるが・・・。

「は?・・・魔力が拡散してゆくだと!」

貯めた魔力がまるで、ストローに吸われる様に拡散してゆく。これでは、空すら飛べない。

「アツハツハツハツバーカ! ランクSに近いアンタ達相手に何も対策を立てこないとでも思ったの? 残念ね。この結界内では、アン

夕達の力だけ無効になるのよ

「何だと！何だその力は、聞いた事がないぞ！」

特定の人物のみに特化した結界ならば知っているが、特定の団体に特化した結界など聞いた事がない。

私の知らない未知の技術なのか？

「さてな、一体どんな原理なのか俺達も知らない。これは、情報を売つてくれた奴がくれた術式だからな。インスタントだが」

「インスタント？・・・そんな技術がか？」

「さて、無駄話もここまでだ。これで、お前達は只の子供も同じだ。安心しろ騒り殺しは、しない」

「時間をかけずに一気にコロコロシテヤル・・・」

2人から、凄まじい殺氣が迸った。私は、思わず後ずさる。そして、何とかならないかと辺りを見渡す。

「クソ！」

ヴィータは、何とか”バインド”から脱出しようとがいでいた。

「持つてて良かつた～テレビ電話」

後藤は、携帯電話で、テレビを見ていた。

打開策は、無い・・・・・つて！

「アンタ！なんで、携帯なんて使つてるのよー。」

私のソシ「ミ」の前に女が突っ込んできた。そつ。今マイシは思いつきリテレビを見ていた。“念話”も通信も通じないこの場所で。しかも”バインド”を外した状態でだ。

「は？ ちょっと、静かにしてくれー今、ロコタマの神〇ヤなんだかうー。」

「何だと？」

「ちーーあくたつてーだーいじょづぶーイヤーーイヤーーふんふんふーふん~」

「マイツ・・・ナメやがつてー。」

巫山戯た歌を熱唱している後藤に女は、切れたらいへ、自分のマイブイスを構えた。

「おーー！ランー！待てー！」

男は、止めるが、女は止まらない。

「くたばれー！」

「ふーんふふふーんふ~ふふふふふふふふふふふふん~ヘイー！」

瞬間。赤い血飛沫が、辺りに散らばった。そして、首の無い死体が、重い音を立てて、地面に激突した。

「ハニー。」

「ぴぴるぴぬぴるぴるぴ～」

男の悲鳴と後藤の妙な擬音が重なった。後藤は、女の頭の中身が、へばりついた、釘バットを降ると、男に向かた。

「分かれよ？ 悪いのは、お前だ」

氣のせいか、その言葉にすら寒いものを感じた。

『・・・それって、どうした事？』

「そのまんまな意味だよ。もし俺の予感が正しければ・・・むしろ危ないのは、リン達を襲つた方だ」

『それにしても・・・本当にいるの？・・・天使って』

「アイツが、そう言ったからな。とにかく・・・天使の怒りを買つと厄介だ。"皆"危ない」

第27話 ザンコク 無双（後書き）

星光：一夜。貴方は、いつから後藤が本物だつて、気がついていたんですか？

南：いや・・・いつからと言われてもな・・・強いて言つなら、初めて合つた時からか・・・。

星光：はあ。

雷刃：そう言えば、リンも何か変な感じがした。って言つてたしね。闇：ふむ。さて、後藤は敵か？味方か？どちらなのだろうな・・・。

雷刃：そうだね～（章タイトル参照？）

星光：では、今回は、この辺で。

第28話 残酷な天使（前書き）

ロリコン始動。

投下。

第28話 残酷な天使

「分かれよ？悪いのは、お前だ」

「ラン！」

男は、ランと呼んだ女の死体に向かつて来る。後藤は、それに向かい釘バットをフルスイングした。

「危ねえ！」

ヴィータは、叫ぶと男はそれに気付き間一髪で難を逃れた。

「ヴィーたん。邪魔しないでよ～」

「ヴィーたん言つないや、それよかテメヒ今何しようとした？」

「ん？ 排除だけど？ あと、ハツ当たり」

後藤は、そう言つてニシコロと笑つた。私は、先程と同じ寒気に襲われた。

「お姉ちゃん！」

すると、「ウと呼ばれていた少女が姉に近づいてきた。後藤は一タ
りと笑つ。

「どうぞ」

そして、あっさりと少女を通した。少女は、姉にすがりつき泣き始めた。

「お姉ちゃん～！」

しかし、頭の粉碎された姉は、何も言わなかつた。当然だ死人は何も出来ない。

「ああ、やっぱり小さい女の子は心がキレイで素晴らしい！－こんな汚れた世界の住人とは思えない！－」

後藤は、そう呟つと少女に抱きついた。

「キヤア！」

突然の事に私達は、何も反応出来なかつた。しかし、兄は違つた。

「「ウから離れろー」」の変態が…」

「チツチ・・・ロリコンと呼んでくれ」

次の瞬間、男の身体に何かが巻き付いた。それは、有刺鉄線に見えた。そして、その先は、後藤の手の中だった。

卷之六

まるで、軽い運動をするよつに有刺鉄線を引き寄せる後藤。それに引き寄せられる男。

「やつー恥ずかしがり屋さん！」

そして、凄まじい回転をする釘バット。

「ゴブ・・・ア”ア”ア”ア”ア”！」

男の悲鳴が結界内をこだました。そして、肉を搔き乱す音も響渡る。グチャグチャ・・・ネチャネチャ・・・。思わず私もヴィータも顔を背けた。それだけ直視出来るものでは無かつたのだ。

いや・・・嫌

「アハハハハ！！！」

少女の悲鳴を嘲笑うかの様に未だにバットを掻き回す後藤に

「後藤！もうやめろ！」

「そうだ。もうやめてくれ。見るにたえない！」

「アハハハハ！！！エイ」

男は、それだけ声を上げると動かなくなつた。・・・つまり・・・

「お兄ちゃん？・・・お兄ちゃん！-！」

コウと呼ばれていた少女が、兄に駆け寄り体を揺する。だが、兄は

動かない。

死んだのだ。誰が見ても完全に死んでいた。

「後藤・・・テメエ！-！-！-！」

ヴィータが、怒りの声を上げる。そして、自分を拘束していた”バインド”が術者の死と共に解かれた。

「オラア！」

「わ！何すんの？」

ヴィータが後藤に殴りかかるが、後藤はそれをヒヨイと避ける。

「なんで、殺した！殺す必要があつたのかよ！」

「え〜? だって、アイシングル僕達を殺そうとしたんだよ? 正当防衛だと思つ」

確かに後藤の言つている事は一見正しい。
死んでいたのかも知れない。・・・だが。
もしかしたら、今頃全員

「だからって、こんな残酷に殺すのは酷過ぎる……」

過去。私達が”闇の書”と呼ばれていた、時代でも、このような殺し方は滅多にしなかつた。

前の様に感情なく殺して退けたのだ。

子どもが虫を殺すよつて・・・ただ、無邪気に・・・。

「お兄ちゃんとお姉ちゃんを返して！－！」

ただ一人残された少女が後藤をポカポカと殴るが後藤は、それを楽しそうに見ていた。

「返してあげたら何かしてくれる？」

「なんでもする・・・何でもするからー！－！」

「本当？・・・ウヒヒ・・・」

もし私の電話が繋げたら即座に通報していた事だろ？。・・・だが、返すなんて、出来る訳がない。一人は完全に死んでいるのだ。しかし、後藤は、一タリと笑うと持っていた、バッドを手の中でクルクルと回転させ・・・

「ぴひるぴるぴるぴひるぴ」

と、摩訶不思議な呪文を唱えた。

「「－！－！」

突然だつた。碎けた骨が、飛び散った肉が、元の持ち主の元に戻つて行く。まるで時間を巻き戻している様に。

その光景を私も他の二人も啞然として見つめていた。何なんだ・・・
これは。

「少なくとも・・・魔力は、使っていない・・・」

「じゃ・・・何だよ・・・翼兄ちゃんだけ、こんな魔力無しじ

や無理だぞ

確かに・・・この力は、どちらかと言えば、一夜に近いのかも知れない。

「う・・・え？」

「・・・なんで・・・？」

そう考えていた内に死んだ一人は生き返つて来ていた。そして、一通り辺りを見た後、後藤を見て後ずさつた。

「なんなんだよーお前は！」

男が、自分の妹達を抱き寄せて後藤に言つた。その瞳には最早怯えしか見えなかつた。

それに対し後藤は、相変わらずの笑顔で言つ。

「俺は、後藤聖一。只の天使だよ」

これは、とある天使の夢のある物語の始まり。

第28話 残酷な天使（後書き）

闇 : 死者を生き返らせる力か・・・恐ろしいな。

星光 : 珍しくシリアルスですね。

闇 : 何だ？ その我が普段は何も考へていないと書いた言葉は？

雷刃 : アハハ・・・。

闇 : ?

星光 : それにしてもやはり後藤は・・・変態でしたね。余計な能力を持つている分厄介そうですね。

雷刃 : そうだね。でも魔力が使えない場所でどうやって行きかえらせたのかな？ 普通いるよね？

闇 : そのへんは恐らく・・・後藤の能力の出典に関係している。

雷刃 : またメタな発言を・・・。

星光 : では、この辺で・・・(それでも一夜は、いつまともここまで出てくるのでしょうか?)

闇 : ウム！

第29話 永遠の少女を求める天使（前書き）

後藤のターンは続く。
投下！

第29話 永遠の少女を求める天使

「南は、まだなのー！」

『「じめん・・・道が分からなくなぢやつて・・・』

「・・・今、何が見える?」

『えつと・・・翠屋つて店が・・・』

「逆方向じや無いのーああーもひー！」

『・・・え?ねえ、今どこにいるの?南くんが、もし消えた地点にいるなら、夢ちゃんだつたらどうにかなるつて言つてるんだけど?』

「夢ちゃん?」

「?」

誰も逃げられない結界の中に三人の兄妹と一人の変態がいた。

「さあ、お兄ちゃん達を生き返らせてあげたよ・・・言つ事を聞いてくれるね?」

「「ウに近付くじやねえー!」

「お前には、聞いてねえよ

「なつー。」

男の身体に再び有刺鉄線が巻き付いていた。後藤は、それを興味なさそうに無視し目当ての少女に迫る。

「つー。」

が、こじで、少女の姉が、立ちふさがる。一度自分の頭蓋を碎いた相手に恐怖しながら妹を守るために立ちふさがる。

「邪魔・・・」

後藤は、持っていた刺バットを振り上げ再び顔面を抉る為に振り下ろす。・・・が。

「止めやがれ！」

「ゴバー！」

それは、ヴィータの飛び蹴りにより阻止された。後藤は見事な曲線を描きながら文字通り吹き飛ばされた。

「リンフォース！」

「ああ。分かっている。"バインド"」

未だにピクピクと痙攣している後藤を光の輪つかで拘束した。いくら、魔力が拡散すると言つてもこれだけ時間があれば、この位は出

来る。

「取り合はずこれを解いて貰おつか。お前達もこのままじゃただ殺されるだけだぞ！」

「そりだー早く解きやがれー！」

奴を抑えられるのは、もう1分もない。魔力も拡散のお陰でな。だが

「・・・出来ない。」この結界は、後2時間はしないと外には出れない使用になつていいからな

「は？」

「・・・アンタ達を確実に殺る為よ。・・・まさか、墓穴を掘る事になるなんて」

「「んな！バカな！ー！」」

じゃあ、私達は、後1時間以上もここにいなくてはならない訳なんか？しかも・・・。

「あーやっと外れたか」

見ると”バインド”を引き千切る後藤がいた。・・・千切る？

”バインド”相手を拘束する為の強固な限定的結界。
人間の腕力で何とか出来る可能性は、0

普通は、砕けるが正解。

なのに・・・千切る？一体どんな事をすれば、そんな事になるんだ？

「ヴィータ！とにかく奴からその娘を守れ！」

「おう！なんか、最初の目的と大きくズレたけど分かった！」

ヴィータはそう言つて、後藤の持つていたバッドに手をかけたそして・・・

「あれ？」

「どうした？」

「何だ・・・」「レ・・・重い」

ヴィータは両手で刺バッドを持つが、バッドは、少しも浮かなかつた。ヴィータは、体は小さくても立派の騎士である。しかも、ディバイスである”グラーフ・アイゼン”はそれなりの重さがあるので。そんな、ヴィータが持てない・・・？

「当然だ。・・・”エスカリボルグ”の重量はおよそ2t。常人が持ち上げられる代物じゃねえよ」

コラリコラリと後藤は、ヴィータに近付いてきた。

「チツ・・・」

ヴィータは舌打ちすると、一旦後藤から距離をとり最近ザフィーラに習っている空手拳の構えを取った。

「後藤・・・お前その子をどうするつもりだ？」

「ん？ 愛でるだけだけど？ 愛でて愛でて愛でる！！ それだけが、僕の幸せだ。・・・ そう・・・ この世界は、腐ってる。皆が綺麗な心を持つていれば、争いは、起こらない」

「・・・」

「・・・ だが、大人は駄目だ・・・ もう手遅れなんだ。心も身体も汚れてる。だから、僕は口りを愛す！ 愛でる！ そして、見守る。世界が、幼女だけになるその日まで！」

後藤は、まるで、子供の様にだが、明確な意思を持って、そう言った。それに私は、寒気を覚えた。氣味が悪い訳ではない。その思いが、純粋だと分かるのだ。まるで・・・ かつての”闇の書”の主達の様に歪んだ願いを感じる。

「ヴィータん。この世の中変だとは思わないか？」

「変？ ・・・ 後、ヴィータん言つな！」

「人は、どうせ死ぬんだ。なのにさ・・・ 人は、成長するにつれて、欲を持つて行くんだ」

「それが、人つてもんどうづ」

「……確かに……でも」

後藤は、有刺鉄線に縛られている男の方に向かつ。そして、何かの瓶を取り出した。

「……命が無限で、成長しなければ……欲なんて、生まれるのかな？」

そして、それを男の体に掛けた。

「う……うわあああ！……！」

瞬間男の体から煙が上がった。なんだ！

「あ”あ”あ”あ”あ”……」

煙の中のシユルヒットがどんどん変形して行く。全体が縮んでゆき、声が、どんどん高くなつてゆく。

「！」これは……」

「嘘……だらうへ。」

煙が、完全に晴れた時そこには男はいなかつた。その代わり小さな女の子がブカブカの男物の服を着て目をパチクリさせていた。

「え……なんだ？これは……」

「お兄ちゃん？……が、小っちゃくなつちやつた……」

困惑する一同をよそに後藤は高笑いを始めた。

「フハハハ！！成功だ！」

「何をした！」

”元”男が、服で体を隠しながら後藤につかかる。

「分らないのか？これこそ全人類の夢！浴びるだけで、美幼女になる夢の薬！どんな、オッサンでもこれさえ浴びれば8歳の幼女になる！そのプロトタイプさ。」

「プロトタイプ？」

「どう言う意味なのだろうか。それ以前にそんな薬があつた時点で驚きだが。

「本物は、永遠の命を授ける。つまり不老不死になるのだ」

「ハイ？」

「不老不死？それは、なんと口ストロギアだ？

「世界は、幼女だけになる。世界は、救われる・・・まさに、ヘブ

ン」

後藤は、”エスカリボルグ”を拾うとクルクルと構えた。

「本当なら、もう少ししてから、始める計画だつたんだがな・・・まあいいか。それじゃあ、皆様・・・」

瞬間私達の体が、何かに拘束された。これは・・・濡れタオル？

「そこなら～幼女の世界で再び会いましょう」

なんだ？」このタオル・・・どんどん締まって・・・くつ・・・なんか、気持ち良くなってきた・・・。

その間にも後藤は、”エスカリボルグ”を構えてやつてくる。全員ここが始末する気らしい。・・・不味い！

「おじやましまーす！」

そんな時だった。とても場違いな声が、聞こえたのは。

「その声は、夢か？」

「うん！・・・何してるの？」

「話は、後だ。後藤を止めてくれ！」

とそこまで言つた所で私は氣付いた。何言つてゐるんだ？夢は、・・・一体何なんだ？ナギサをよく迎えに来る子。私が、知つてゐるのは、それだけだ。

「OK！なんか、分らないけど良いよー」ワンワン“一”

夢が、そう言つと獰猛な獣の唸り声が辺りから聞こえてきた。何だ？

「上手く入れたみたいね」

『『そりが、流石”無効”の力だな』』

「前、そんな力使つてたつけ？夢ちゃん」

『・・・恐らく使う以前にボロボロにされたからだと思つぞ？』

「う・・・。アハハ・・・ワスレロ」

『ハイ』

「とにかく、早く来なさい」

『はいはい』

第29話 永遠の少女を求める天使（後書き）

闇 : . . . 色々混ざつてないか？

作者 : まあ、そのへんは作中で突っ込んでもらいましょう。

星光 : それにしても、後藤の執念は凄いですね。

雷刃 : だね。永遠の幼女つて・・・アレ？

闇 : どうした？

雷刃 : アハハヽなんでもないよ？ともかく次回は、夢ちゃんが活躍しそうだね！

星光 : ええ。天使VS殺人鬼つてところでしょうか。

闇 : どっちが勝つてもおかしくないな。

雷刃 : まあそうだね。所で主人公は？

全員 :

星光 : そ、それでは、次回で・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0113u/>

とある市民の自己防衛

2011年10月9日22時05分発行